

Oracle® ILOM システム監視および診断用ユーザーズガイドファームウェアリリース 3.2.x

ファームウェアリリース 3.2.x

ORACLE®

Part No: E40339-03
2015 年 10 月

Part No: E40339-03

Copyright © 2013, 2015, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクルまでご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアまたはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアまたはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、Oracle Corporationおよびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはオラクル およびその関連会社の登録商標です。その他の社名、商品名等は各社の商標または登録商標である場合があります。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ, AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。適用されるお客様とOracle Corporationとの間の契約に別段の定めがある場合を除いて、Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。適用されるお客様とOracle Corporationとの間の契約に定めがある場合を除いて、Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクルのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility ProgramのWeb サイト(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>)を参照してください。

Oracle Supportへのアクセス

サポートをご契約のお客様には、My Oracle Supportを通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info>)か、聴覚に障害のあるお客様は (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs>)を参照してください。

目次

このドキュメントの使用方法	11
Oracle ILOM の概要	13
Oracle ILOM について	13
Oracle ILOM の特長と機能	14
サポートされる管理インタフェース	15
サポートされているオペレーティングシステムの Web ブラウザ	16
ほかの管理ツールとの統合	17
Oracle Enterprise Manager Ops Center について	17
Oracle ILOM 3.2.x の使用開始	19
Oracle ILOM へのログイン	19
ログインするためのネットワーク要件	19
▼ Oracle ILOM Web インタフェースへのログイン	20
▼ Oracle ILOM CLI へのログイン	21
Web インタフェースのナビゲート	23
Oracle ILOM 3.2.x Web インタフェース	23
Oracle ILOM によって管理されたデバイスの Web インタフェースナビゲーションオプション	24
CMM Web インタフェース: ブレードサーバーのビュー	29
コマンド行インタフェース (CLI) の名前空間ターゲットのナビゲート	29
Oracle ILOM 3.1 および 3.2.x CLI の大文字と小文字の区別なし	30
管理対象デバイス上の Oracle ILOM 3.2.x CLI 名前空間ターゲット	30
CMM CLI からのブレードサーバーの管理	34
SPARC マルチドメインサーバーからの PDomain の管理	34
FMM CLI からの計算ノードの管理	34
Oracle ILOM レガシターゲットの表示または非表示	35
ターゲットへのナビゲートとそれらのプロパティおよびサポートされるコマンドの一覧表示	36

システムインベントリ、健全性、およびサービスと管理アクションの実行	39
システムコンポーネントインベントリおよび健全性ステータスの表示	39
▼ システムレベルの情報と健全性ステータスの表示 (Web)	40
▼ サブコンポーネントレベルの情報と健全性ステータスの表示 (Web)	41
▼ システムレベルの情報と健全性ステータスの表示 (CLI)	42
▼ サブコンポーネントレベルの情報と健全性ステータスの表示 (CLI)	43
健全性状態: 定義	45
未解決の問題の管理	47
未解決の問題の用語	47
▼ 管理対象デバイスに検出された未解決の問題の表示	47
保守アクションの管理: Oracle ブレードシャーシ NEM	48
NEM 保守アクションプロパティ	49
▼ NEM の取り外しまたはサービスへの復帰の準備 (Web)	49
▼ NEM の取り外しまたはサービスへの復帰の準備 (CMM CLI)	50
SPARC M シリーズサーバー上のリムーバブルデバイスの管理	51
▼ M シリーズサーバーのリムーバブルデバイスの管理	51
Oracle ILOM のログエントリの管理	53
ログの説明	54
ログプロパティ	54
ログのタイムスタンプ	56
▼ ログエントリの表示およびクリア (Web)	56
▼ ログエントリの表示およびクリア (CLI)	57
▼ ログエントリのフィルタリング	58
一般的なシステム管理アクションの実行	60
▼ デバイスの電源状態を「Actions」パネルから表示および変更する (Web)	60
▼ デバイスのロケータ状態を「Actions」パネルから表示および変更する (Web)	61
▼ デバイスのファームウェアを「Actions」パネルから更新する (Web)	62
▼ リモートコンソールを「Actions」パネルから起動する (Web)	65
▼ x86 Oracle System Assistant の起動	67
ホストおよびシステムの管理アクションの適用	69
ホスト管理構成アクションの管理	69
システム管理構成アクションの管理	70
Oracle ILOM インタフェースを介したリアルタイム電力監視	71
消費電力のモニタリング	71
▼ 管理対象デバイスの「Power Consumption」プロパティの表示	72

消費電力の用語とプロパティ	73
電力割り当てのモニタリング	75
▼ 管理対象デバイスの電力割り当て計画の表示	75
管理対象デバイスごとの「Power Allocation Plan」プロパティ	78
電力割り当てコンポーネントとモニタリングの考慮事項	81
電力使用統計情報の分析	83
移動平均電力統計のグラフおよびメトリック	83
▼ 電力統計の棒グラフおよびメトリックの表示	84
電力履歴パフォーマンスの比較	85
電力履歴グラフおよびメトリック	85
▼ 電力履歴グラフおよびメトリックの表示	85
Oracle ILOM 管理対象デバイスのトラブルシューティング	87
ネットワーク接続の問題: Oracle ILOM インタフェース	87
システム動作の監視およびデバッグのためのツール	88
Oracle ILOM 診断ツールを有効にして実行する	89
ブート時の x86 診断の実行を有効にする	90
x86 プロセッサ割り込みの生成: システムステータスのデバッグ	97
レガシー SPARC サーバー (M6、M5、T5 以前) でブート時の診断の実行を有効にする	98
新しい SPARC システム (M7 および T7 サーバー) でブート時の診断の実行を有効にする	101
スナップショットの取得: Oracle ILOM SP の状態	105
Oracle ILOM 障害管理シェルによる Oracle ハードウェア障害の管理	111
ハードウェア障害からの保護: Oracle ILOM 障害マネージャー	111
ハードウェア障害通知	112
ハードウェア障害の修正アクション	112
障害イベントのクリア: 修復されたハードウェア	112
Oracle ILOM 障害管理シェル	113
障害管理の用語	113
▼ 障害管理シェルセッションの起動 (CLI)	114
fmadm を使用したアクティブな Oracle ハードウェア障害の管理	115
▼ 障害のあるアクティブなコンポーネントについての情報の表示 (fmadm faulty)	116
修復または交換についての障害のクリア	116
fmdump を使用した障害管理履歴ログの表示	119
ログファイル表示コマンドおよびログの説明	120
▼ 障害管理ログファイルの表示 (fmdump)	120

fmstat を使用した障害管理統計レポートの表示	121
fmstat レポートの例および説明	122
▼ 障害管理統計レポートの表示 (fmstat)	123
コマンド行インタフェースの使用	125
コマンド行インタフェース (CLI) について	125
サポートされている DMTF 構文、コマンド動詞、およびオプションについての CLI リファレンス	126
サポートされている CLI 構文	126
基本的な CLI コマンドおよびオプション	127
基本的なコマンド行編集キーストローク	129
プロパティを変更するコマンドの実行の CLI リファレンス	131
ターゲットプロパティを変更するためのコマンドの実行	131
確認が必要なコマンドの実行	132
CLI デバイス管理名前空間サマリー	134
関連情報:	136
CLI ターゲットへの管理タスクのマッピングの CLI リファレンス	136
管理接続タスクと適用可能な CLI ターゲット	137
ネットワーク配備タスクと適用可能な CLI ターゲット	139
ユーザー管理タスクと適用可能な CLI ターゲット	141
システム電源投入ポリシータスクと適用可能な CLI ターゲット	142
システム電力使用ポリシータスクと適用可能な CLI ターゲット	143
ファームウェア更新タスクと適用可能な CLI ターゲット	145
ファームウェアバックアップおよび復元タスクと適用可能な CLI ターゲット	147
x86 BIOS バックアップおよび復元タスクと適用可能な CLI ターゲット	148
システム健全性ステータスタスクと適用可能な CLI ターゲット	149
イベント、監査、およびシステムログタスクと適用可能な CLI ターゲット	150
アラート通知タスクと適用可能な CLI ターゲット	151
ホスト管理タスクと適用可能な CLI ターゲット	152
リモート KVMS サービス状態タスクと適用可能な CLI ターゲット	153
ホストシリアルコンソールセッションタスクと適用可能な CLI ターゲット	154
ホスト診断タスクと適用可能な CLI ターゲット	155
障害管理シェルセッションタスクと適用可能な CLI ターゲット	156
NEM 保守アクションタスクと適用可能な CLI ターゲット	157
SAS ブレードゾーン管理と適用可能な CLI ターゲット	158
CMM ブレード管理タスクと適用可能な CLI ターゲット	159
CLI レガシーサービス状態タスクと適用可能な CLI ターゲット	160
用語集	161

索引 183

このドキュメントの使用方法

- **概要** - 『Oracle ILOM システム監視および診断用ユーザーズガイド』では、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.2.x の Web およびコマンド行インタフェースの使用に関する概念情報および手順情報を提供しています。このドキュメントでは、製品のトラブルシューティングのヒントと手順も説明します。
- **対象読者** - このガイドは、技術者、システム管理者、および Oracle 認定サービスプロバイダを対象としています。
- **必要な知識** - ユーザーにはシステムハードウェアの管理経験があるべきです。

製品ドキュメントライブラリ

この製品の最新情報や既知の問題は、ドキュメントライブラリ (http://docs.oracle.com/cd/E37444_01/index.html) に含まれています。

フィードバック

このドキュメントに関するフィードバックを <http://www.oracle.com/goto/docfeedback> からお寄せ下さい。

Oracle ILOM の概要

説明	リンク
Oracle ILOM の特長、機能、およびサポートされるブラウザについて学習します。	<ul style="list-style-type: none">■ 13 ページの「Oracle ILOM について」■ 14 ページの「Oracle ILOM の特長と機能」■ 15 ページの「サポートされる管理インタフェース」■ 16 ページの「サポートされているオペレーティングシステムの Web ブラウザ」
サードパーティ製管理ツールとの統合について学習します。	<ul style="list-style-type: none">■ 17 ページの「ほかの管理ツールとの統合」

関連情報

- [「Setting Up a Management Connection to Oracle ILOM and Logging In」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)
- [「SNMP Overview」 in 『Oracle ILOM Protocol Management Reference for SNMP and IPMI』](#)
- [「Server Management Using IPMI」 in 『Oracle ILOM Protocol Management Reference for SNMP and IPMI』](#)

Oracle ILOM について

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) は、Oracle ハードウェアを管理およびモニタリングするために使用できる高度なサービスプロセッサ (SP) ハードウェアおよびソフトウェアを提供します。Oracle ILOM は、Oracle のすべてのラックマウントサーバー、ブレードサーバー、およびブレードシャーシに事前インストールされています。Oracle ILOM は、データセンターに不可欠な管理ツールで、Oracle サーバーにインストールされているほかのデータセンター管理ツールと統合できます。

Oracle ILOM を使用すると、すべての Oracle サーバーおよびブレードシャーシで単一の一貫した標準ベースのサービスプロセッサを使用できます。これは次があることを意味します。

- オペレータ用の単で一貫性のあるシステム管理インタフェース
- 豊富な標準プロトコルのサポート

- サードパーティーの管理ツールとインタフェース
- 追加コストなしで統合されたシステム管理機能

Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) は独自の組み込みオペレーティングシステムを実行し、専用の Ethernet ポートを備え、それらはまとめて帯域外管理機能を提供します。サーバーに電源が投入されるとすぐに、Oracle ILOM は自動的に初期化されます。完全な機能を備えたブラウザベースの Web インタフェースを提供し、同等のコマンド行インタフェース (CLI) を備えます。業界標準の SNMP インタフェースおよび IPMI インタフェースも利用できます。

関連情報

- [14 ページの「Oracle ILOM の特長と機能」](#)
- [15 ページの「サポートされる管理インタフェース」](#)
- [16 ページの「サポートされているオペレーティングシステムの Web ブラウザ」](#)
- [17 ページの「ほかの管理ツールとの統合」](#)

Oracle ILOM の特長と機能

Oracle ILOM は、サーバーシステムのモニターと管理に役立つ機能とプロトコルの完全なセットを備えています。

表 1 Oracle ILOM の特長と機能

Oracle ILOM の機能	可能な操作
新しく設計された Web およびコマンド行インタフェース	x86 SP, SPARC SP, および CMM プラットフォームに共通の簡単な標準化された形式で概要情報を表示します。
専用のサービスプロセッサとリソース	<ul style="list-style-type: none"> ■ システムリソースを消費することなくサーバーを管理します。 ■ サーバーの電源が切れたときでも、スタンバイ電源を使用してサーバーの管理を続行します。
簡単な Oracle ILOM 初期構成	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle ILOM は IPv4 および IPv6 のデフォルトの設定を使用して、サーバー SP または CMM のネットワークアドレスを自動的に検出します。 ■ x86 SP プラットフォームで BIOS 設定を構成します。
ダウンロード可能なファームウェア更新	<ul style="list-style-type: none"> ■ ブラウザベースの Web インタフェースを使用してファームウェア更新をダウンロードします。
リモートハードウェアのモニタリング	<ul style="list-style-type: none"> ■ システムの健全性とシステムイベントログをモニターします。 ■ ハードウェアイベントログをモニターします。 ■ 監査イベントログをモニターします。 ■ 電源装置、ファン、ホストバスアダプタ (HBA)、PCI デバイス、ディスク、CPU、メモリー、マザーボードなどの顧客交換可能ユニット (CRU) および現場交換可能ユニット (FRU) をモニターします。 ■ 環境温度 (コンポーネントの温度) をモニターします。
ハードウェアと FRU のインベントリおよび有無	<ul style="list-style-type: none"> ■ 取り付けられている CRU と FRU, およびそれらのステータスを識別します。

Oracle ILOM の機能	可能な操作
	<ul style="list-style-type: none"> ■ パーツ番号、バージョン、および製品シリアル番号を識別します。 ■ NIC カードの MAC アドレスを識別します。
リモート KVMS	<ul style="list-style-type: none"> ■ シリアルポートと LAN を通じてシステムシリアルコンソールをリダイレクトします。 ■ リモートの x86 システムや一部の SPARC システムのキーボード、ビデオ、およびマウス (KVM) にアクセスします。 ■ リモートクライアントブラウザに OS のグラフィカルコンソールをリダイレクトします。 ■ リモートの CD、DVD、フロッピーをリモートストレージとしてシステムに接続します。
システムの電源制御とモニタリング	<ul style="list-style-type: none"> ■ システムの電源をローカルまたはリモートで投入または切断します。 ■ 即時停止のために電源を強制的に切断、または正常な停止を実行してホストオペレーティングシステムを停止してから電源を切断します。 ■ Web インタフェースを使用して電力管理および電力履歴チャートをモニターします。
ユーザーアカウントの構成と管理	<ul style="list-style-type: none"> ■ ローカルユーザーアカウントを構成します。 ■ LDAP、LDAP/SSL、RADIUS、および Active Directory を使用してユーザーアカウントを認証します。
エラーと障害の管理	<ul style="list-style-type: none"> ■ すべての「サービス」データについて一貫した方法でイベントを記録します。 ■ 専用のユーザーインタフェースページ、SP ログ、syslog、およびリモートログホストに報告される、ハードウェアおよびシステム関連のエラーと ECC メモリエラーをモニターします。 ■ ユーザーが保守アクションを実行して障害に対処すると、Oracle ILOM はほとんどの障害状態を自動的にクリアします。
SNMPトラップ、IPMI PET、リモート syslog、電子メールアラートなどのシステムアラート	<ul style="list-style-type: none"> ■ 業界標準の SNMP コマンドと IPMItool コーティリティーを使用してコンポーネントをモニターします。

サポートされる管理インタフェース

このドキュメントでは、Oracle ILOM の Web およびコマンド行インタフェースに関する概念情報および手順情報を提供します。ただし、すべての Oracle ILOM 機能にアクセスするには、次のインタフェースとプロトコルのいずれかまたは組み合わせて使用することを選択できます。

- **Web インタフェース** – Web インタフェースを使用すると、Web ブラウザを介して Oracle ILOM SP または CMM にアクセスできます。Oracle ILOM の Web インタフェースから日常的なシステム管理操作をリモートで実行できます。また、Web インタフェースからツールを起動し、KVMS をリダイレクトしたり保守および診断の操作を実行したりできます。
- **コマンド行インタフェース (CLI)** – SSH クライアントを使用して、サーバー SP または CMM 上の Oracle ILOM CLI にアクセスできます。コマンド行インタフェースを使用すると、業界標準の DMTF 形式のキーボードコマンドやスクリプトプロトコルを使用してサーバー管理操作をリモートで実行できます。
- **Intelligent Platform Management Interface (IPMI)** – IPMI は、多くのさまざまな種類のネットワーク上でサーバーシステムを管理するために設計された、業界標準のオープン

なインタフェースです。IPMI の機能には、現場交換可能ユニット (FRU) インベントリの報告、システムモニタリング、システムイベントのロギング、システム回復 (システムのリセットや電源投入および電源切断機能を含む)、警告などが含まれます。

- **Simple Network Management Protocol (SNMP) インタフェース** – Oracle ILOM は、HP OpenView や IBM Tivoli などのサードパーティーアプリケーションに SNMP v3 インタフェースも提供します。Oracle ILOM では、次のような MIB をサポートしています。
 - SUN-PLATFORM-MIB
 - SUN-ILOM-CONTROL-MIB
 - SUN-HW-TRAP-MIB
 - SUN-ILOM-PET-MIB
 - SNMP-FRAMEWORK-MIB (9RFC2271.txt)
 - SNMP-MPD-MIB (RFC2572)
 - NMPv2-MIB のシステムグループと SNMP グループ (RFC1907)
 - ENTITY-MIB の entPhysicalTable (RFC2737)

関連情報

- [20 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースへのログイン」](#)
- [21 ページの「Oracle ILOM CLI へのログイン」](#)
- [「Server Management Using IPMI」 in 『Oracle ILOM Protocol Management Reference for SNMP and IPMI 』](#)
- [「SNMP Overview」 in 『Oracle ILOM Protocol Management Reference for SNMP and IPMI 』](#)
- [「Setting Up a Management Connection to Oracle ILOM and Logging In」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)

サポートされているオペレーティングシステムの Web ブラウザ

Oracle ILOM は、次のオペレーティングシステムの Web ブラウザをサポートしています。

注記 - Oracle サーバーでサポートされているオペレーティングシステムのリストについては、サーバー管理ガイドまたはプロダクトリリースノートを参照してください。

表 2 サポートされている Web ブラウザ

オペレーティングシステム	Web ブラウザ
Oracle Solaris 10, Oracle Solaris 11	■ Mozilla Firefox ESR 17 ■ Mozilla Firefox ESR 24

オペレーティングシステム	Web ブラウザ
Oracle Linux 6, Red Hat Enterprise Linux 6, SUSE Linux Enterprise 11, Ubuntu Linux 12 LTS	<ul style="list-style-type: none"> ■ Google Chrome 31 ■ Mozilla Firefox ESR 17 ■ Mozilla Firefox ESR 24
Microsoft Windows 7	<ul style="list-style-type: none"> ■ Google Chrome 31 ■ Internet Explorer 8 ■ Internet Explorer 9 ■ Internet Explorer 10 ■ Mozilla Firefox ESR 17 ■ Mozilla Firefox ESR 24
Microsoft Windows 8	<ul style="list-style-type: none"> ■ Google Chrome 31 ■ Internet Explorer 10 ■ Mozilla Firefox ESR 17 ■ Mozilla Firefox ESR 24
Macintosh OS X 10.7 ^{† ‡}	<ul style="list-style-type: none"> ■ Safari 5

[†] Oracle ILOM のストレージリダイレクション機能は Macintosh ブラウザクライアントでサポートされていません。さらに、Oracle ILOM での国際キーボードサポートは Macintosh ブラウザクライアントで利用できません。

[‡] Oracle ILOM リモートシステムコンソールプラスは Macintosh ブラウザクライアントでサポートされていません。

関連情報

- [23 ページの「Oracle ILOM 3.2.x Web インタフェース」](#)
- [20 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースへのログイン」](#)

ほかの管理ツールとの統合

Oracle ILOM をほかの管理ツールやプロセスと簡単に統合できます。サポートされているサードパーティーシステム管理ツールのドキュメントへのリンクについては、次にアクセスします。

<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/sys-mgmt-networking-190072.html#thirdparty>

Oracle Enterprise Manager Ops Center 管理ツールについては、[17 ページの「Oracle Enterprise Manager Ops Center について」](#)を参照してください。

Oracle Enterprise Manager Ops Center について

Oracle Enterprise Manager Ops Center は、ネットワーク上の新規および既存の Oracle システムの管理に役立つことがあります。たとえば、Oracle Enterprise Manager Ops Center を次の用途で使用できます。

- サーバーを最新のファームウェアおよび BIOS イメージに更新します。
- オペレーティング環境に既製のディストリビューションや Oracle Solaris イメージをプロビジョニングします。
- 更新と構成変更を管理します。
- ブート制御、電源ステータス、インジケータライトなどのサービスプロセッサの主要な側面をリモートで制御します。

Oracle Enterprise Manager Ops Center の詳細は、http://docs.oracle.com/cd/E27363_01/index.htm を参照してください。

Oracle ILOM 3.2.x の使用開始

説明	リンク
Oracle ILOM の CLI および Web インタフェースにログインします。	■ 19 ページの「Oracle ILOM へのログイン」
Oracle ILOM 管理対象デバイス用の Oracle ILOM Web インタフェースおよびナビゲーションオプションについて学習します。	■ 23 ページの「Web インタフェースのナビゲート」
Oracle ILOM CLI 名前空間と CLI コマンドの発行について学習します。	■ 29 ページの「コマンド行インタフェース (CLI) の名前空間ターゲットのナビゲート」

関連情報

- [「Setting Up a Management Connection to Oracle ILOM and Logging In」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)
- [「Server Management Using IPMI」 in 『Oracle ILOM Protocol Management Reference for SNMP and IPMI』](#)
- [「SNMP Overview」 in 『Oracle ILOM Protocol Management Reference for SNMP and IPMI』](#)

Oracle ILOM へのログイン

- [19 ページの「ログインするためのネットワーク要件」](#)
- [20 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースへのログイン」](#)
- [21 ページの「Oracle ILOM CLI へのログイン」](#)

ログインするためのネットワーク要件

ネットワーク接続経由で Oracle ILOM にログインする前に、次を実行する必要があります。

- 内部のトラステッドネットワークまたはセキュアなプライベートネットワークからサーバー SP または CMM への物理ネットワーク管理接続を確立します。
- サーバー SP または CMM に割り当てられたネットワークアドレスを取得します。
IPv4 および IPv6 アドレスの入力の受け入れられる入力形式は次のとおりです。

注記 - IPv6 アドレスまたはリンクローカル IPv6 アドレスを入力する際に、正しく機能させるためには、そのアドレスを角括弧で囲む必要があります。ただし、SSH を使用して Oracle ILOM にログインするために IPv6 アドレスを指定する場合は、IPv6 アドレスを角括弧で囲まないようにしてください。

- IPv4 アドレス - 192.0.2.0
- IPv6 アドレス - [2001:db8:0:0:0:0:0:0/32]
- SSH と root ユーザーアカウントを使用した IPv6 アドレス - ssh root@[ipv6address]
- リンクローカル IPv6 アドレス - [e80::214:4fff:feca:5f7e/64]
- DNS ホストドメインアドレス - company.com
- Oracle ILOM ユーザーアカウントを持っていない場合、Oracle ILOM システム管理者からユーザーアカウントを取得する必要があります。

関連情報

- [16 ページの「サポートされているオペレーティングシステムの Web ブラウザ」](#)
- [20 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースへのログイン」](#)
- [21 ページの「Oracle ILOM CLI へのログイン」](#)
- 「Setting Up a Management Connection to Oracle ILOM and Logging In」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- 「Setting Up and Maintaining User Accounts」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』

▼ Oracle ILOM Web インタフェースへのログイン

始める前に

[19 ページの「ログインするためのネットワーク要件」](#)で説明されている要件を満たします。

1. Web ブラウザのアドレスバーで、サーバーのサービスプロセッサ (SP) またはシャーシモニタリングモジュール (CMM) の IPv4 アドレス、IPv6 アドレス、またはホスト名を入力して、Enter キーを押します。

Oracle ILOM のログインページが表示されます。

2. ユーザー名とパスワードを入力し、「Log In」をクリックします。

注記 - Oracle ILOM への初回ログインおよびアクセスを有効にするために、デフォルトの管理者アカウントとそのパスワードがシステムに用意されています。セキュアな環境を構築するには、Oracle ILOM への初回ログイン後、デフォルトの管理者アカウント (root) のデフォルトのパスワード (changeme) を変更する必要があります。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

関連情報

- [16 ページの「サポートされているオペレーティングシステムの Web ブラウザ」](#)
- [87 ページの「ネットワーク接続の問題: Oracle ILOM インタフェース」](#)
- [「Resolving Web Browser Security Settings」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Setting Up a Management Connection to Oracle ILOM and Logging In」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Default Timeout for CLI and Web Sessions」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Password Recovery for Default root Account」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)

▼ Oracle ILOM CLI へのログイン

始める前に

[19 ページの「ログインするためのネットワーク要件」](#)で説明されている要件を満たします。

1. Secure Shell (SSH) セッションを使用して、次のいずれかの方法で Oracle ILOM にログインします。
 - デフォルトの root アカウントパスワードでログインする場合、システムプロンプトで次のように入力します。

```
$ ssh root@system-ip-address
```

注記 - Oracle ILOM への初回ログインおよびアクセスを有効にするために、デフォルトの管理者アカウントとそのパスワードがシステムに用意されています。セキュアな環境を構築するには、Oracle ILOM への初回ログイン後、デフォルトの管理者アカウント (`root`) のデフォルトのパスワード (`changeme`) を変更する必要があります。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

- システム管理者によって作成されたユーザーアカウントでログインする場合、システムプロンプトで次のように入力します:

```
$ ssh system-ip-address
```

Oracle ILOM がデュアルスタックネットワーク環境で動作している場合、`system-ip-address` を IPv4 または IPv6 のいずれかのアドレス形式で入力できます。

2. システムプロンプトで、ユーザーアカウントのパスワードを入力します。(デフォルトの `root` アカウントの場合、これは `changeme` です。)

Oracle ILOM CLI のプロンプト (`->`) が表示されます。

例:

```
Password: password
```

```
Oracle(R) Integrated Lights Out Manager
```

```
Version 3.2.1.0 r76641
```

```
Copyright (c) 2012, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.
```

```
->
```

関連情報

- [87 ページの「ネットワーク接続の問題: Oracle ILOM インタフェース」](#)
- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)
- [「Setting Up a Management Connection to Oracle ILOM and Logging In」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Default Timeout for CLI and Web Sessions」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Password Recovery for Default root Account」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)

Web インタフェースのナビゲート

- 23 ページの「Oracle ILOM 3.2.x Web インタフェース」
- 24 ページの「Oracle ILOM によって管理されたデバイスの Web インタフェースナビゲーションオプション」
- 29 ページの「CMM Web インタフェース: ブレードサーバーのビュー」

Oracle ILOM 3.2.x Web インタフェース

図 1 Oracle ILOM Web インタフェースの「Summary Information」ページ

The screenshot displays the Oracle ILOM 3.2.x Web Interface. The page title is "Summary Information". The navigation menu on the left includes "Summary" (highlighted with callout 1), "Processors", "Memory", "Power", "Cooling", "Storage", "Networking", "PCI Devices", "Firmware", "Open Problems (0)", "System Log", "Remote Control", "Host Management", "System Management", "Power Management", and "ILOM Administration".

The main content area is divided into three sections:

- General Information (9):** A table listing system details such as System Type (Rack Mount), Model (SUN SERVER X4-4), Part Number (000-0000-00), Serial Number (0000CNW000), Component Model (SUN SERVER X4-4), Component Part Number (123456789), System Identifier (X4-4-SP), System Firmware Version (3.2.2), Primary Operating System (Not Available), Host Primary MAC Address (00:10:e0:3b:cb:be), ILOM Address (192.0.2.250), and ILOM MAC Address (00:10:E0:3B:CB:C2).
- Actions (10):** A panel with controls for Power State (ON/OFF), Locator Indicator (ON/OFF), System Firmware Update (Update), and Remote Console (Launch).
- Status (11):** A table showing the overall status (OK) and a list of subsystems with their status and details. The status table is as follows:

Subsystem	Status	Details	Inventory
Processors	OK	Processor Architecture: x86 64-bit Processor Summary: Four Intel Xeon Processor E7 V2 Series	Processors: 4 / 4 (Installed / Maximum)
Memory	OK	Installed RAM Size: 1536 GB	DIMMs: 96 / 96 (Installed / Maximum)
Power	OK	Permitted Power Consumption: 2549 watts Actual Power Consumption: 460 watts	PSUs: 2 / 2 (Installed / Maximum)
Cooling	OK	Inlet Air Temperature: 26 °C Exhaust Air Temperature: 31 °C	Chassis Fans: 6 / 6 (Installed / Maximum) PSU Fans: Not Supported
Storage	Not Available	Installed Disk Size: Not Available Disk Controllers: Not Available	Internal Disks: 1 / 6 (Installed / Maximum)
Networking	OK		Ethernet NICs: 4 (Installed)

番号	説明
1	ナビゲーションペイン - Web インタフェースを使用してナビゲートできる階層メニュー。
2	「Warning」メッセージ - 管理している CMM または SP で Oracle ILOM が検出した警告の番号を表示します。「ILOM Administration」>「Notifications」ページで警告しきい値を定義し、ア

番号	説明
	ラートを受け取るタイミングと場所を定義できます。詳細は、「 Configuring Alert Notifications, Service Requests, or Remote Logging 」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』を参照してください。
3	「User」フィールド - ログインに使われた Oracle ILOM アカウントのユーザー名を表示します。
4	「Role」フィールド - ログインに使われたユーザーアカウントに割り当てられている役割権限を表示します。
5	「Hostname」フィールド - SP または CMM のホスト名を表示します。
6	「About」ボタン - クリックして、製品の著作権情報を表示します。
7	「Refresh」ボタン - クリックして、インタフェースの内容ペインの情報をリフレッシュします。「Refresh」ボタンでは、ページで入力または選択した新しいデータは保存されません。
8	「Log Out」ボタン - クリックして、Web インタフェースの現在のセッションを終了します。
9	「General Information」パネル - サーバーに関する情報 (システムタイプ、シリアル番号、インストールされているファームウェアバージョン、サービスプロセッサの IP アドレスなど) を表示します。
10	「Actions」パネル - 一般的なサーバー管理アクション (システムの電源オン/オフ、リモートコンソールアプリケーションの起動など) を実行できます。
11	「Status」パネル - 各サーバーサブシステムの概要 (健全性ステータスやコンポーネント数など) を示します。

Oracle ILOM によって管理されたデバイスの Web インタフェースナビゲーションオプション

次の表では、Oracle ILOM によって管理されるデバイスに使用可能な Web インタフェースナビゲーションオプションについて説明します。

注記 - Web インタフェースに提供されている CMM および SP ナビゲーションオプションは、管理対象デバイスに現在インストールされている Oracle ILOM ファームウェアバージョンによって多少異なる場合があります。

表 3 Oracle ILOM によって管理されたデバイスの Web インタフェースナビゲーションオプション

第 1 レベルのメニュー	第 2 および第 3 レベルのメニュー	可能な操作	管理対象デバイス
Chassis View		シャーシの前面および背面 (シャーシに取り付けられているブレードやモニタリングモジュールなど) をグラフィックで表示します。	CMM
System Information	Summary	システムに関するサマリー情報を表示します。次のアクションも実行できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ システムの電源の状態をオンまたはオフにします。 ■ システムインジケータ LED をオンまたはオフにすることによって、 	サーバー SP CMM ドメイン

第 1 レベルのメニュー	第 2 および第 3 レベルのメニュー	可能な操作	管理対象デバイス
		シャーシ内のシステムの位置を特定します。 ■ システムファームウェアを更新します。 ■ リモートコンソールを起動します。 ■ 一般的なシステムステータスと問題の数を表示します。	
	Blades	ブレードシャーシ内のブレード、モニタリングモジュール、および NEM についてのサマリーおよび詳細情報を表示します。	CMM
	Processors	システムのプロセッサについてのサマリーおよび詳細情報を表示します。	サーバー SP
	メモリー	システムに取り付けられているメモリーについてのサマリーおよび詳細情報を表示します。	サーバー SP
	電力	システム内の電源についてのサマリーおよび詳細情報を表示します。	サーバー SP CMM
	冷却装置	システムを冷却するファンについてのサマリーおよび詳細情報を表示します。	サーバー SP
	Storage	SP または CMM 内のストレージについてのサマリー情報を表示します。 Oracle ILOM は次のストレージについて報告します。 ■ ディスク ■ ボリューム (論理ボリュームを含む) ■ コントローラ ■ エクスパンダ	サーバー SP CMM
	I/O Modules	システム内の I/O モジュールについてのサマリーおよび詳細情報を表示します。	CMM
	Networking	システムネットワークについてのサマリーおよび詳細情報を表示します。	サーバー SP
	PCI Devices	システム内の PCI デバイスについてのサマリーおよび詳細情報を表示します。	サーバー SP
	ファームウェア	現在のファームウェアレベルを表示し、必要な場合はファームウェアのアップグレードを選択します。	サーバー SP CMM
Open Problems		障害状態のシステムおよびサブシステムに関する情報を表示します。	サーバー SP CMM
Remote Control	Redirection	使用しているローカルマシンにシステムコンソールをリダイレクトすることにより、ホストをリモート管理します。	サーバー SP CMM ドメイン

第 1 レベルのメニュー	第 2 および第 3 レベルのメニュー	可能な操作	管理対象デバイス
	KVMS	キーボード、ビデオ、マウス、またはストレージデバイスのリモート管理を有効または無効にします。	サーバー SP ドメイン
Host Management	Power Control	電源の状態 (「Immediate Power Off」、「Graceful Shutdown and Power Off」、「Power On」、「Power Cycle」、または「Reset」) を選択します。	サーバー SP CMM ドメイン
	Diagnostics	x86 プロセッサベースのシステムまたは SPARC プロセッサベースのシステムの診断を有効または無効にします。	サーバー SP ドメイン
	Host Control	ホスト制御情報を表示および構成します。次のシステム電源投入時のブートデバイスを構成します。	サーバー SP ドメイン
	Host Boot Mode	SPARC サーバーでのデフォルトのサーバーブート方法をオーバーライドします。	サーバー SP ドメイン
	Host Domain	SPARC サーバーでのホストドメイン制御設定を構成し、ホストドメイン構成を表示します。	サーバー SP ドメイン
	Keyswitch	SPARC サーバーの仮想キースイッチの位置を制御します。	サーバー SP ドメイン
	TPM	SPARC サーバーで Trusted Platform Module 機能の状態を管理します。	サーバー SP ドメイン
System Management	BIOS	BIOS 構成のバックアップと復元を管理します。	サーバー SP
	SAS Zoning	Zone Manager の設定を有効または無効にし、Zone Manager のパスワードをリセットします。	CMM
	Domains	SPARC マルチドメインサーバーでドメイン構成可能ユニット (DCU) の可用性およびホストへの割り当てを表示および管理します。	サーバー SP
	Policy	シャーン電源の管理、電源装置ファンの強制的な高速または低速実行、特定の電源装置のモニタリングなどのシステムポリシーを有効または無効にします。	サーバー SP CMM
	Diagnostics	SPARC マルチドメインサーバーの SP で電源投入時自己診断が実行されるトリガーを選択します。	サーバー SP
Power Management	Consumption	実電力と許容電力の消費電力基準値を表示し、電子メールアラートまたは SNMP 通知を生成するための消費電力しきい値を設定します。	サーバー SP CMM ドメイン

第 1 レベルのメニュー	第 2 および第 3 レベルのメニュー	可能な操作	管理対象デバイス
	Limit	サーバー電源の制限を表示または構成します。	サーバー SP ドメイン
	Allocation	容量計画のためにシステム電力要件を表示します。	サーバー SP CMM ドメイン
	Settings	SPARC サーバーの消費電力のポリシーオプションを構成します。	サーバー SP ドメイン
	Redundancy	CMM 電源装置の冗長性オプションを表示および構成します。	CMM ドメイン
	Statistics	Oracle CMM またはサーバーの電力統計データを表示します。	サーバー SP CMM ドメイン
	History	消費電力の移動平均の履歴を表示します。	サーバー SP CMM ドメイン
ILOM Administration	Identification	ホスト名またはシステム識別子を割り当てることにより、サービスプロセッサの識別情報を入力または変更します。	サーバー SP CMM
	Logs > Event	イベント ID、クラス、タイプ、重要度、日付と時間、イベントの説明を含む、各イベントに関するさまざまな詳細を表示します。	サーバー SP CMM
	Logs > Audit	ユーザーログイン、ログアウト、構成変更などインタフェースに関するユーザーアクションを表示します。	サーバー SP CMM
	Management Access > Web Server	HTTP Web サーバーや HTTP ポートなど、Web サーバーの設定を編集または更新します。	サーバー SP CMM
	Management Access > SSL Certificate	デフォルトの SSL 証明書に関する情報を表示するか、オプションで新しい SSL 証明書を検索および入力します。	サーバー SP CMM
	Management Access > SNMP	SNMP の設定を編集または更新します。	サーバー SP CMM
	Management Access > SSH Server	Secure Shell (SSH) サーバーのアクセスと鍵の生成を構成します。	サーバー SP CMM
	Management Access > IPMI	コマンド行インタフェースを使用して、サーバープラットフォームに関する情報を取得するだけでなく、サーバープラットフォームをモニターおよび制御します。	サーバー SP CMM

第 1 レベルのメニュー	第 2 および第 3 レベルのメニュー	可能な操作	管理対象デバイス
	Management Access > CLI	CLI の設定を構成します。「Session Time-out」の値は、CLI の自動ログアウトが発生するまでのアイドル時間を分単位で示します。	サーバー SP CMM
	Management Access > Banner Messages	ユーザーログイン前に表示されるメッセージとユーザーログイン後に表示されるメッセージを表示および構成します。	サーバー SP CMM
	User Management > Active Sessions	現在 Oracle ILOM にログインしているユーザーと、各ユーザーが開始したセッションの種類を表示します。	サーバー SP CMM
	User Management > User Accounts	ローカルの Oracle ILOM ユーザーアカウントを追加、削除、または変更します。	サーバー SP CMM
	User Management > LDAP	LDAP ユーザーの Oracle ILOM へのアクセスを構成します。	サーバー SP CMM
	User Management > LDAP/SSL	Secure Socket Layer (SSL) テクノロジーによって実現される高度なセキュリティ設定を使用して、LDAP ユーザーの Oracle ILOM へのアクセスを構成します。	サーバー SP CMM
	User Management > RADIUS	RADIUS ユーザーの Oracle ILOM へのアクセスを構成します。	サーバー SP CMM
	User Management > Active Directory	Active Directory ユーザーの Oracle ILOM へのアクセスを構成します。	サーバー SP CMM
	Connectivity > Network	Oracle ILOM およびローカル相互接続インタフェース設定の IPv4 と IPv6 のネットワーク設定を表示および編集します。	サーバー SP CMM
	Connectivity > DNS	ホスト名を指定し、ドメインネームサービス (DNS) を使用してそのホスト名を IP アドレスに解決します。	サーバー SP CMM
	Connectivity > Serial Port	内部および外部のシリアルポートのボーレートを表示および編集します。	サーバー SP CMM
	Configuration Management > Backup/Restore	サービスプロセッサの構成を、セキュアな方法でリモートホストまたは取り外し可能なストレージデバイスにバックアップしたり復元したりします。	サーバー SP CMM
	Configuration Management > Reset Defaults	すべての Oracle ILOM のデフォルト設定を復元します。	サーバー SP CMM
	Notifications > Alerts	それぞれのアラートに関する詳細を表示したり、構成されたアラートのリストを変更したりします。	サーバー SP CMM
	Notifications > Syslog	syslog メッセージの送信先となるサーバーのアドレスを構成します。	サーバー SP

第 1 レベルのメニュー	第 2 および第 3 レベルのメニュー	可能な操作	管理対象デバイス
			CMM
	Notifications > SMTP Client	アラートの電子メール通知の送信に使用する SMTP クライアントの状態を構成します。	サーバー SP CMM
	Date and Time > Clock	Oracle ILOM クロックの時間を手動で表示および編集したり、Oracle ILOM クロックを NTP サーバーと同期させたりします。	サーバー SP CMM
	Date and Time > Timezone	サービスプロセッサによって表示されるタイムスタンプをほかの場所 (Oracle Solaris オペレーティングシステムなど) で作成されるログに対応付けできるように、特定のタイムゾーンを指定します。	サーバー SP CMM
	Maintenance > Firmware Upgrade	Oracle ILOM のファームウェアのアップグレードを取得する処理を開始します。	サーバー SP CMM
	Maintenance > Reset Components	サービスプロセッサおよび CMM コンポーネントをリセットします。	サーバー SP CMM
	Maintenance > Snapshot	環境、ログ、エラー、および FRUID に関するデータを収集し、CLI を使用するか、ダウンロードされたファイルとして、USB フラッシュドライブまたは外部ホストにそれを送信します。	サーバー SP CMM

CMM Web インタフェース: ブレードサーバーのビュー

CMM の Web インタフェースは Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.x、3.1.x、3.2.x を実行しているブレードサーバーをサポートしています。CMM の Web インタフェースで Oracle ILOM 3.1 または 3.2 を実行しているブレードサーバーをクリックすると、新しく設計された Web インタフェースが表示されます。CMM の Web インタフェースで Oracle ILOM 3.0 を実行しているブレードサーバーをクリックすると、レガシー 3.0 Web インタフェースが表示されます。

コマンド行インタフェース (CLI) の名前空間ターゲットのナビゲート

- [30 ページの「Oracle ILOM 3.1 および 3.2.x CLI の大文字と小文字の区別なし」](#)
- [30 ページの「管理対象デバイス上の Oracle ILOM 3.2.x CLI 名前空間ターゲット」](#)
- [34 ページの「CMM CLI からのブレードサーバーの管理」](#)
- [34 ページの「FMM CLI からの計算ノードの管理」](#)
- [34 ページの「SPARC マルチドメインサーバーからの PDomain の管理」](#)

- 35 ページの「Oracle ILOM レガシーターゲットの表示または非表示」
- 36 ページの「ターゲットへのナビゲートとそれらのプロパティおよびサポートされるコマンドの一覧表示」

Oracle ILOM 3.1 および 3.2.x CLI の大文字と小文字の区別なし

Oracle ILOM 3.1 以降、Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI) には大文字と小文字の区別がありません。つまり、Oracle ILOM は大文字と小文字を区別しません。このルールには次の例外があります。

- サーバーのサービスプロセッサ (SP) の /SYS レガシーターゲットの下にあるターゲットおよびプロパティ
- シャーシモニタリングモジュール (CMM) の /CH レガシーターゲットの下にあるターゲットおよびプロパティ
- コマンド動詞 (show、set、start など)
- プロパティ値

管理対象デバイス上の Oracle ILOM 3.2.x CLI 名前空間ターゲット

Oracle ILOM 3.2.x CLI 名前空間は、ある管理対象デバイスについて管理可能なすべてのオブジェクトを含む階層ツリーです。

次の表では、Oracle ILOM 3.2.x で使用可能な CLI 名前空間ターゲットについて説明します。次の表に一覧表示されている名前空間ターゲットは、ツリー階層の最高レベルにあります。

管理対象デバイス	名前空間ターゲット	名前空間の説明
サーバー SP	/SP	サーバー SP で /SP 名前空間の下のプロパティは、1) Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) の構成、2) ログエントリの表示、3) サブコンポーネントの管理、および 4) リモートコンソールへのアクセスに使用します。
	/HOST	サーバー SP で、/HOST 名前空間ターゲットの下のプロパティは、ラックマウントサーバーまたはブレードサーバーモジュール上にインストールされているホストオペレーティングシステムをモニターおよび管理するために使用します。
シャーシモニタリングモジュール (CMM)	/CMM	ブレードモジュラーシステムの CMM で、/CMM 名前空間の下のプロパティは、1) Oracle ILOM CMM の構成、2) 監査およびイベントログエントリの表示、3) 障害およびアラートの管理に使用します。
	/CH	ブレードモジュラーシステム CMM で、/CH 名前空間は、Oracle ILOM 3.1 以前のレガシーターゲットです。これは、CMM で

管理対象デバイス	名前空間ターゲット	名前空間の説明
	(3.0 レガシータラゲット)	<p>legacy_targets のプロパティが有効になっている場合にのみ表示されます。/CH 名前空間の下にあるプロパティは、インベントリのステータスおよび環境センサーのモニターのほか、ストレージおよび CPU ブレードサーバーモジュールなどのシャーシサブコンポーネントのアクセスと管理に使用します。/CH 名前空間の下のターゲット名は、シャーシハードウェアコンポーネントの名前に直接対応します。</p> <p>/CH 名前空間の下のターゲットおよびプロパティは、既存の Oracle ILOM ユーザーズクリプトとの下位互換性を確保するために、(表示されていなくても) 常に使用できます。</p>
フレームモニターリングモジュール (FMM)	/FMM	Netra Modular System (NMS) FMM で、/FMM 名前空間は 1) Oracle ILOM FMM の構成、2) 監査およびイベントログエントリの表示、および 3) 障害とアラートの管理に使用します。
	/Networking	<p>NMS FMM で、/Networking 名前空間の下のプロパティは、サーバー SP レベルでネットワークノードにログインしている場合と同様にネットワークノードを管理するために使用します。</p> <p>注記 - /Networking タラゲットは、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.2.5 を実行しているすべての FMM でサポートされていないことがあります。以降のファームウェアバージョンが必要になることがあります。</p>
	/Frame (3.2.5 現在のレガシータラゲット)	<p>NMS FMM で、/Frame 名前空間は、Oracle ILOM レガシータラゲットです。FMM で legacy_targets の CLI プロパティが有効になっている場合にのみ表示されます。/Frame 名前空間の下にあるターゲットとプロパティは、インベントリのステータスおよび環境センサーのモニターのほか、フレームサブコンポーネント (計算ノードなど) のアクセスと管理に使用します。/Frame 名前空間の下のターゲット名は、シャーシハードウェアコンポーネントの名前に直接対応します。</p> <p>/Frame 名前空間の下のターゲットおよびプロパティは、既存の Oracle ILOM ユーザーズクリプトとの下位互換性を確保するために、(表示可能であっても非表示であっても) 常に使用できます。</p>
サーバー SP CMM FMM	/System	<p>サーバー SP、CMM、または FMM で、/System 名前空間の下のプロパティは、ハードウェアの健全性とシステムインベントリのモニターのほか、ファームウェアの更新などの保守アクションの実行に使用します。</p> <p>/System 名前空間の下の名前は、管理対象デバイスに取り付けられているハードウェアコンポーネントに直接対応します。</p>
SPARC マルチドメインサーバー SP CMM FMM	/Servers	<p>CMM、FMM、または SPARC マルチドメインサーバー SP で、/Servers 名前空間の下のプロパティは、ハードウェアサブコンポーネント構成をモニターおよび管理するために使用します。例:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SPARC マルチドメインサーバー SP から、PDomain 構成 (/Servers/PDomains) を管理できます。 ■ CMM から、ブレードサーバーモジュール構成 (/Servers/blades) を管理できます。 ■ FMM から、計算ノード構成 (/Servers/ComputeNodes) を管理できます。
サーバー SP CMM	/SYS (3.0 レガシータラゲット)	サーバー SP または CMM で、/SYS 名前空間は Oracle ILOM 3.1 以前のレガシータラゲットです。これは、管理対象デバイスで

管理対象デバイス	名前空間ターゲット	名前空間の説明
		legacy_targets のプロパティが有効になっている場合にのみ表示されます。ラックマウントまたはブレードサーバーで、このターゲットタイプは /System ターゲットに似ていますが、Oracle ILOM 3.0 で使用可能なすべてのターゲットが含まれます。/SYS 名前空間の下のターゲットおよびプロパティは、既存の Oracle ILOM ユーザーズスクリプトとの下位互換性を確保するために、(表示されていなくても) 常に使用できます。
	/STORAGE (3.0 レガシーターゲット)	サーバー SP または CMM で、/Storage 名前空間は Oracle ILOM 3.1 以前のレガシーターゲットです。これは、管理対象デバイスで legacy_targets のプロパティが有効になっている場合にのみ表示されます。このターゲットは以前に SAS ストレージデバイスなどのストレージコンポーネントを管理するために使用されていました。/Storage 名前空間ターゲットおよびプロパティは、既存の Oracle ILOM ユーザーズスクリプトとの下位互換性を確保するために、(表示可能であっても非表示であっても) 常に使用できます。

関連情報

- 32 ページの「Oracle ILOM 3.2 x ターゲットの CLI 階層」
- 35 ページの「Oracle ILOM レガシーターゲットの表示または非表示」

Oracle ILOM 3.2 x ターゲットの CLI 階層

Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.1 以降に付属するサーバー、ブレードシャーシ、Netra フレームの名前空間階層の例を次に示します。表示される実際のターゲットはシステムごとに異なります。レガシーターゲットはデフォルトで非表示になります。

表 4 Oracle ILOM 3.2.x CLI ターゲットの例

サーバー (SP 経由で接続)	ブレードシャーシ (CMM 経由で接続)	Netra フレーム (FMM 経由で接続)
/HOST	/STORAGE	/System
bootmode (SPARC のみ)	sas_zoning	Open_Problems
console		Networking
diag	/System	Firmware
domain (SPARC のみ)	Cooling	ComputeNodes
provisioning (x86 のみ)	Power	Log
tpm (SPARC のみ)	Storage	
	Firmware	
	Open_Problems	
	IO_Modules	
	Blades	
/System	/CMM	/FMM

サーバー (SP 経由で接続)	ブレードシャーシ (CMM 経由で接続)	Netra フレーム (FMM 経由で接続)
Cooling	alertmgmt	alertmgmt
Processors	cli	cli
Memory	clients	clients
Power	clock	clock
Storage	config	config
PCI_Devices	diag	diag
Firmware	faultmgmt	faultmgmt
Networking	firmware	firmware
Open_Problems	logs	logs
BIOS (x86 のみ)	network	network
IO_Modules	policy	policy
	powermgmt	preferences
	preferences	serial
	serial	services
	services	sessions
	sessions	users
	users	
/SP	/Servers/Blades	/Servers/ComputeNodes
alertmgmt	Blade_0	ComputeNode_0
cli	Blade_1	ComputeNode_1
clients	Blade_2	ComputeNode_2
clock	Blade_3	ComputeNode_3
config	Blade_4	ComputeNode_4
diag	Blade_5	ComputeNode_5
faultmgmt	Blade_6	Compute_Node_6
firmware	Blade_7	Compute_Node_7
logs	Blade_8	ComputeNode_8
network	Blade_9	ComputeNode_9
policy		...
powermgmt		ComputeNode_31
preferences		注記 - 最大 31 の計算ノードを構成 できます。
serial		
services		
sessions		
users		

関連情報:

- [35 ページの「Oracle ILOM レガシーターゲットの表示または非表示」](#)
- [34 ページの「CMM CLI からのブレードサーバーの管理」](#)
- [34 ページの「FMM CLI からの計算ノードの管理」](#)
- [34 ページの「SPARC マルチドメインサーバーからの PDomain の管理」](#)

CMM CLI からのブレードサーバーの管理

Oracle ILOM 3.1 以降、CMM CLI からブレードサーバーを直接管理できます。CMM の CLI セッションからブレード SP プロパティを表示および管理するには、/SP ターゲットに /Servers/Blades/Blade_*n* を追加します。または、ブレードサーバー SP にログインして /SP 名前空間の下にあるターゲットおよびプロパティを直接管理できます。

関連情報

- [35 ページの「Oracle ILOM レガシーターゲットの表示または非表示」](#)
- [134 ページの「CLI デバイス管理名前空間サマリー」](#)
- [136 ページの「CLI ターゲットへの管理タスクのマッピングの CLI リファレンス」](#)

SPARC マルチドメインサーバーからの PDomain の管理

Oracle ILOM ファームウェア 3.2 以降、SPARC マルチドメインサーバー SP CLI セッションから PDomain を直接管理できます。マルチドメインサーバー SP CLI セッションから PDomain プロパティを表示および管理するには、/SP ターゲットに /Servers/PDomains/PDomain_*n* を追加します。

関連情報

- [35 ページの「Oracle ILOM レガシーターゲットの表示または非表示」](#)
- [134 ページの「CLI デバイス管理名前空間サマリー」](#)
- [136 ページの「CLI ターゲットへの管理タスクのマッピングの CLI リファレンス」](#)

FMM CLI からの計算ノードの管理

Oracle ILOM 3.2.5 以降、Netra FMM CLI セッションから直接計算ノードを管理できます。FMM CLI セッションから計算ノード SP プロパティを表示および管理するには、/SP ターゲットに /Servers/ComputeNodes/ComputeNode_*n* を追加します。または、サーバー SP にログインして /SP 名前空間の下にあるターゲットおよびプロパティを直接管理できます。

関連情報

- [32 ページの「Oracle ILOM 3.2 x ターゲットの CLI 階層」](#)
- [134 ページの「CLI デバイス管理名前空間サマリー」](#)
- [136 ページの「CLI ターゲットへの管理タスクのマッピングの CLI リファレンス」](#)

Oracle ILOM レガシーターゲットの表示または非表示

Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.1 以降、/SYS、/STORAGE (サーバーの場合)、および /CH (ブレードシャーシの場合) 名前空間は、/System によって置き換えられています。Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.2.5 以降、/Frame (Netra FMM 上) の名前空間は /System によって置き換えられます。/System 名前空間は、レガシーターゲットの簡素化バージョンで、明確さと使いやすさのために設計されたものです。

Oracle ILOM 3.2.x を実行しているシステムでは、/SYS、/STORAGE、/CH、および /Frame 名前空間ターゲットが非表示になっていても、引き続きこれらのレガシーターゲットにコマンドを発行できます。この 3.0 レガシー CLI ターゲットとの下位互換性によって、以前 Oracle ILOM 3.0 で実行していたコマンドおよびスクリプトが、Oracle ILOM 3.2.x でも引き続き動作することが保証されます。

次のいずれかのコマンドを実行することによって、/SYS、/STORAGE、および /CH 名前空間ターゲットの非表示をオプションで解除できます。

- サーバースerviceプロセッサの場合、次のように入力します。

```
set /SP/cli legacy_targets=enabled
```

- ブレードシャーシ CMM の場合、次のように入力します。

```
set /CMM/cli legacy_targets=enabled
```

CMM 上のレガシーターゲットと、ブレードサーバー上のシングルサインオンを有効にすると、CMM CLI の /CH/BLn ターゲットから直接ブレードサーバーを管理できます。詳細は、[34 ページの「CMM CLI からのブレードサーバーの管理」](#)を参照してください。

- Netra モジュールシステム FMM の場合、次のように入力します。

```
set /FMM/cli legacy_targets=enabled
```

FMM でレガシーターゲットを有効にし、シングルサインオンが有効になっていると、FMM の CLI で /Frame/computenoden ターゲットからコンピュータノードを直接管理できます。

CLI ターゲットの詳細は、次を参照してください。

- [30 ページの「管理対象デバイス上の Oracle ILOM 3.2.x CLI 名前空間ターゲット」](#)
- [30 ページの「Oracle ILOM 3.1 および 3.2.x CLI の大文字と小文字の区別なし」](#)
- [36 ページの「ターゲットへのナビゲートとそれらのプロパティおよびサポートされるコマンドの一覧表示」](#)
- [「コマンド行インタフェースの使用」](#)

ターゲットへのナビゲートとそれらのプロパティおよびサポートされるコマンドの一覧表示

Oracle ILOM のコマンド行インタフェース (CLI) 名前空間をナビゲートするには、次のコマンドを使用します。

- `help targets` – システムの CLI 名前空間内で使用可能なすべてのターゲットが、簡単な説明とともに一覧表示されます。
- `cd` – 名前空間階層をナビゲートします。
たとえば、`/SP` の下の `services` ターゲットにナビゲートするには、次のように入力します。
`cd /SP/services`
- `show` (または `ls`) – 上位レベルのターゲットのすぐ下にあるターゲットと、そのターゲットで使用できるコマンドが一覧表示されます。
たとえば、`/SP/services` ターゲットに関する情報を一覧表示するには、次のように入力します。

```
-> cd /SP/services
/SP/services
-> show
/SP/services
  Targets:
    http
    https
    ipmi
    kvms
    servicetag
    snmp
    ssh
    sso

  Properties:

  Commands:
    cd
    show
```

注記 - 完全修飾パスを使用し、コマンドが目的のターゲットによってサポートされているかぎり、コマンドを CLI 階層の任意の場所で実行できます。前の例では、`show /SP/services` と入力しても同じ結果を得られます。

上記の例で、show コマンド出力はプロパティおよびコマンドを単純なリストで表示しましたが、show コマンドはプロパティおよびコマンドを表出力で表示することもできます。例:

```
-> show -o table SP/services/http
Target          | Property          | Value
-----+-----+-----
/SP/services/http | port              | 80
/SP/services/http | secureredirect    | enabled
/SP/services/http | servicestate      | disabled
/SP/services/http | sessiontimeout    | 15

->
```

- help - 指定されたターゲットのプロパティ、使用可能なプロパティ値、および構成可能なプロパティを設定するための役割要件が表示されます。

注記 - 構成可能なプロパティがすべてのターゲットにあるわけではありません。一部は読み取り専用です。

たとえば、HTTP アクセス用に Oracle ILOM 内部 Web サーバーを構成するために使用される、http ターゲットについてのヘルプ情報を取得するには、次のように入力します。

```
-> help /SP/services/http

/SP/services/http : HTTP service
Targets:

Properties:
  port : Port number for http service
  port : User role required for set = a

  secureredirect : HTTP secure redirect
  secureredirect : Possible values = enabled, disabled
  secureredirect : User role required for set = a

  servicestate : HTTP service state
  servicestate : Possible values = enabled, disabled
  servicestate : User role required for set = a

  sessiontimeout : Timeout in minutes for http session
  sessiontimeout : Possible values = Range: 1-720 minutes
  sessiontimeout : User role required for set = a
```

->

関連情報

- [30 ページの「管理対象デバイス上の Oracle ILOM 3.2.x CLI 名前空間ターゲット」](#)
- [35 ページの「Oracle ILOM レガシーターゲットの表示または非表示」](#)
- [「コマンド行インタフェースの使用」](#)

システムインベントリ、健全性、およびサービスと管理アクションの実行

説明	リンク
システム情報を収集してサブコンポーネントの健全性の詳細を表示します。	■ 39 ページの「システムコンポーネントインベントリおよび健全性ステータスの表示」
未解決の問題を表示して必要な保守アクションを判別します。	■ 47 ページの「未解決の問題の管理」
ブレードシャーシ NEM または M シリーズサーバーリムーバブルデバイスの保守アクションを実行します。	■ 48 ページの「保守アクションの管理: Oracle ブレードシャーシ NEM」 ■ 51 ページの「SPARC M シリーズサーバー上のリムーバブルデバイスの管理」
システムイベントおよびユーザーアクションについてのロギングエントリにアクセスして管理します。	■ 53 ページの「Oracle ILOM のログエントリの管理」
Web インタフェースから一般的なシステム管理アクションを実行します。	■ 60 ページの「一般的なシステム管理アクションの実行」

関連情報

- [「Configuring Host Server Management Actions」](#) in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- [「Setting System Management Power Source Policies」](#) in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- [「Configuring Alert Notifications, Service Requests, or Remote Logging」](#) in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』

システムコンポーネントインベントリおよび健全性ステータスの表示

Oracle ILOM インタフェースは、サーバーコンポーネントインベントリおよび健全性ステータスを表示するためのアクセスが容易なプロパティを提供します。詳細は、次を参照してください

- [40 ページの「システムレベルの情報と健全性ステータスの表示 \(Web\)」](#)
- [41 ページの「サブコンポーネントレベルの情報と健全性ステータスの表示 \(Web\)」](#)
- [42 ページの「システムレベルの情報と健全性ステータスの表示 \(CLI\)」](#)
- [43 ページの「サブコンポーネントレベルの情報と健全性ステータスの表示 \(CLI\)」](#)
- [45 ページの「健全性状態: 定義」](#)

▼ システムレベルの情報と健全性ステータスの表示 (Web)

ホストサーバーまたは CMM に関するシステムレベルの健全性ステータスプロパティは、Web インタフェースの「Summary」ページから表示できます。

1. システムレベルの健全性ステータスの詳細を表示するには、「System Information」> 「Summary」をクリックします。
「Summary」ページが表示されます。
2. 管理対象デバイスに関するシステム情報を収集するには、「General Information」テーブルのエントリを確認します。
「General Information」テーブルに表示される情報には、モデル番号、シリアル番号、システムの種類、現在インストールされているファームウェア、インストールされているプライマリオペレーティングシステム、ホストの MAC アドレス、管理対象の SP または CMM の IP アドレス、管理対象の SP または CMM の MAC アドレスなどがあります。

注記 - インストールされているプライマリオペレーティングシステムのプロパティ値は、管理対象デバイスに Oracle ILOM Hardware Management Pack がインストールされている場合にのみ表示されます。

3. 管理対象デバイスに検出された問題を特定するか、問題の合計数を表示するには、「Status」テーブルのエントリを確認します。
全体的な健全性ステータスと問題の合計数がテーブルの上部に表示されます。
「Status」テーブルに報告されるサブコンポーネントカテゴリについて追加情報を表示するには、「Subsystem」列のリンクをクリックします。
4. 管理対象デバイスのファームウェア履歴を表示するには、「System Information」> 「Firmware」をクリックします。

関連情報

- [45 ページの「健全性状態: 定義」](#)
- [41 ページの「サブコンポーネントレベルの情報と健全性ステータスの表示 \(Web\)」](#)
- [47 ページの「未解決の問題の管理」](#)

▼ サブコンポーネントレベルの情報と健全性ステータスの表示 (Web)

ホストサーバーまたは CMM に関するサブコンポーネントレベルの健全性ステータスプロパティは、Web インタフェースの「Summary」ページから表示できます。

始める前に

- Infiniband ネットワークコントローラの健全性およびインベントリステータスプロパティを「Networking」ページで表示するには、Oracle Hardware Management Pack (HMP) ソフトウェアのバージョン 2.3 以降のインストールが必要です。
- 健全性およびインベントリステータスプロパティの大部分を「Storage」ページで表示するには、HMP ソフトウェアのバージョン 2.2 以降のインストールが必要です。さらに、コントローラの「Type」プロパティ、コントローラの「Details」プロパティ（場所、FC コントローラの World Wide Name (WWN)、ポート数など）を表示するには、HMP ソフトウェアのバージョン 2.3 以降のインストールが必要です。

1. サブコンポーネントレベルの健全性ステータスプロパティを表示するには、「System Information」>「*subcomponent-category-name*」をクリックします。

例:

- SP ナビゲーションペインには、Processors、Memory、Power、Cooling、Storage などのサブコンポーネントのリストが表示されます。
プロセッサについてサーバー SP サブコンポーネントレベルの健全性ステータスの詳細を表示するには、「System Information」>「Processors」をクリックします。
- CMM ナビゲーションペインには、Blades、Power、Cooling、Storage、および I/O Modules などのサブコンポーネントが表示されます。
I/O モジュールについて CMM サブコンポーネントレベルの健全性ステータスの詳細を表示するには、「System Information」>「I/O Modules」をクリックします。
- ドメインナビゲーションペインには、DCUs、Processors、Memory、Power、Cooling、Storage、Networking、PCI Devices、および Firmware などのサブコンポーネントが表示されます。
ドメイン固有の DCU にサブコンポーネントレベルの健全性ステータスの詳細を表示するには、「System Information」>「DCUs」をクリックします。

注記 - ドメインナビゲーションペインは Oracle のマルチドメイン SPARC システムについて使用できます。

2. サブコンポーネントカテゴリのページでは、次のことが可能です:

- サブコンポーネントカテゴリの全体的な健全性、および各カテゴリの取り付け済みサブコンポーネントの数を判定する。

- 管理対象デバイスに現在取り付けられている各サブコンポーネントについて、健全性の詳細と取り付け位置を判定する。

一部のサーバーでは、サブコンポーネントをサブコンポーネントカテゴリページから有効化および無効化することもできます。Oracle サーバーのサブコンポーネントの有効化または無効化の詳細は、使用しているサーバーに付属のドキュメントを参照してください。

- テーブル内の「Details」リンクをクリックして、取り付け済みサブコンポーネントの詳細情報を表示します。

注記 - Oracle ILOM 3.1.2 以降、「DIMM Details」ページでは、「DIMM Part Number」の値を記述するために「= *Oracle_part_number, vendor_part_number*」という形式が使用されます。例: 5111616-01, M393B5270DH0-YK0。ここでは: 5111616-01 は Oracle のパート番号、M393B5270DH0-YK0 はベンダーのパート番号です。

関連情報

- [45 ページの「健全性状態: 定義」](#)
- [47 ページの「未解決の問題の管理」](#)

▼ システムレベルの情報と健全性ステータスの表示 (CLI)

システムレベルのホスト健全性ステータスの CLI プロパティは、`/System` ターゲットで表示できます。

注記 - また、管理対象デバイスが ILOM 3.0.x を以前サポートしていた場合、`/System` ターゲットの代わりに CLI レガシターゲット `/SYS` を使用できます。管理対象デバイスが Oracle ILOM 3.0 のバージョンを以前サポートしていなかった場合、レガシターゲット `/SYS` は Oracle ILOM 3.2.x ではデフォルトで無効になっています。CLI `/SYS` レガシターゲットを有効にするには、[35 ページの「Oracle ILOM レガシターゲットの表示または非表示」](#)を参照してください。

- システムレベルの情報を収集するか、システムの健全性ステータスを確認するには、次のように入力します。

show /System

例:

```
Properties:  
health = OK  
health_details = -  
open_problems_count = 0
```

```

power_state = On
locator_indicator = Off
model = SUN FIRE X4270 M3
type = Rack Mount
part_number = 07011205
serial_number = 0328MSL-1119T4002F
system_identifer = (none)
system_fw_version = ILOM: 3.2.1.0
primary_operating_system = Not Available
host_primary_mac_address = Not Available
ilom_address = 10.123.45.255
ilom_mac_address = 00:12:34:D5:F2:F6
actual_power_consumption = 123 watts
action = (none)

```

注記 - 管理対象デバイスにインストールされているプライマリオペレーティングシステムのプロパティ値は、管理対象デバイスに Oracle ILOM Hardware Management Pack がインストールされている場合にのみ表示されます。

関連情報

- [45 ページの「健全性状態: 定義」](#)
- [43 ページの「サブコンポーネントレベルの情報と健全性ステータスの表示 \(CLI\)」](#)
- [47 ページの「未解決の問題の管理」](#)

▼ サブコンポーネントレベルの情報と健全性ステータスの表示 (CLI)

サブコンポーネントに関するホスト健全性ステータスの CLI プロパティは、`/System` ターゲットで表示できます。

- サブコンポーネントレベルの健全性の詳細に CLI からアクセスするには、次のように入力します。

```
show /System/subcomponent-category-name
```

`subcomponent-category-name` は、`show /System` の下にあるサブコンポーネントターゲット名のいずれかです。

注記 - Oracle のマルチドメイン SPARC システムで、PDomain についてのサブコンポーネントレベルの健全性の詳細を表示するには、次の CLI パスを使用してください。`/Servers/PDomains/PDomain_n/System/subcomponent-category-name`

例:

- 単一サーバー SP システム上のメモリーモジュールについてのサブコンポーネント健全性ステータスを表示するには、次のように入力します。

```
show /System/Memory
```

```
/System/Memory
Targets:
  DIMMs

Properties:
  health = OK
  health_details = -
  installed_memory = 16 GB
  installed_dimms = 2
  max_dimms = 16

Commands:
  cd
  show
```

- 単一サーバー SP 上の特定の DIMM についてのサブコンポーネント健全性ステータスを表示するには、次のように入力します。

```
show /System/Memory/DIMMs/DIMM_n
```

```
/System/Memory/DIMMs/DIMM_0 Targets: Properties: health = OK
  health_details = - part_number = 001-0003 serial_number =
00AD0111232F6E432B location = P0/D0 (CPU 0 DIMM 0) manufacturer = Hynix
Semiconductor Inc. memory_size = 8 GB Commands: cd show
```

注記 - Oracle ILOM 3.1.2 以降、DIMM_n プロパティでは、part_number の値を記述するのに「= Oracle_part number, vendor_part number」という形式が使用されます。例: 5111616-01, M393B5270DH0-YK0。ここでは: 5111616-01 は Oracle のパート番号、M393B5270DH0-YK0 はベンダーのパート番号です。

- ブレードシステムシャーシ内のすべてのブレードに関する健全性ステータスの詳細を表示するには、次のように入力します。

```
show -level all /System/Blades
```

```
/System/Blades
Targets:
  Blade_0
  Blade_1

Properties:
  health = Service Required
  health_details = BL1 (Blade 1) is faulty.
```

```

Type 'show /System/Open_Problems' for details.
installed_blades = 2
max_blades = 10

/System/Blades/Blade_0
Targets:

Properties:
health = OK
health_details = -
type = Storage Blade
model = ASSY,BLADE,X6275
location = BL0 (Blade 0)
actual_power_consumption = 10 watts
system_identifier = (none)
address = Not Available
part_number = 375-3604-01
serial_number = Not Available

/System/Blades/Blade_1
Targets:

Properties:
health = Service Required
health_details = A device necessary to support a configuration
has failed. Type 'show /System/Open_Problems' for details.
type = Server Blade
model = SUN BLADE X6270 M2 SERVER MODULE
location = BL1 (Blade 1)
actual_power_consumption = 56 watts
system_identifier = ORACLESP-1044FMN00B
address = Not Available
part_number = 511-1418-03
serial_number = 000000-1042B903A6

Commands:
cd
show

```

関連情報

- [45 ページの「健全性状態: 定義」](#)
- [47 ページの「未解決の問題の管理」](#)

健全性状態: 定義

健全性ステータスの状態	説明
Not Available	Oracle ILOM ではこのコンポーネントの健全性ステータスを表示できません。

健全性ステータスの状態	説明
	Oracle ILOM は Hardware Management Pack のインストールを必要としている可能性があります。詳細は、Oracle Hardware Management のドキュメントライブラリ (http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ohmp&id=homepage) を参照してください。
OK	システムまたはコンポーネントは正常に動作しています。
Offline	「Offline」は、シャードサブコンポーネントの「Prepare to Remove」アクションの状態に適用されます。このステータスは、アクションプロパティが「Prepare to Remove」に設定され、物理サブコンポーネントがシャードから物理的に取り外されていない場合に表示されます。 注記 - 保守アクション（「Prepare to Remove」または「Return to Service」）のプロパティは、Oracle ILOM で管理されるすべてのシャードサブコンポーネントでサポートされているわけではありません。
Warning	Oracle ILOM は、管理対象デバイスにマイナーな問題が検出されたことを示す場合に情報警告メッセージを表示します。警告メッセージが表示されても、管理対象デバイスは期待どおりに機能するため、情報メッセージは無視しても安全です。
Degraded	親コンポーネントのいずれかのサブコンポーネントが無効化された場合、Oracle ILOM はその親コンポーネントについて Degraded 状態を表示します。親コンポーネントは制限された能力でシステムの動作に参加し続けます。
Disabled	Oracle ILOM は、次のいずれかの条件が発生したときに「Disabled」状態を表示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ コンポーネントに障害は検出されなかったが、そのコンポーネントはシステムの動作に参加すべきではないと Oracle ILOM が判断した場合。 ■ エンドユーザーがコンポーネントを手動で無効化した場合。 「Disabled」の健全性状態が表示された場合、コンポーネントの「Health Details」プロパティを確認してください。
Disabled (Service Required)	Oracle ILOM がコンポーネント上の障害を検出し、そのコンポーネントを無効にしました。無効化されたコンポーネントを有効にするには保守アクションが必要です。 「Disabled (Service Required)」の健全性状態が表示された場合、コンポーネントに対して指定された「Health Details」プロパティを確認してください。
Service Required	Oracle ILOM が管理対象デバイスに問題を検出し、その問題を解決するには保守アクションが必要です。 このステータスがシステムレベルで表示された場合は、管理対象デバイスに検出された未解決の問題を Oracle ILOM Web インタフェースまたは CLI で表示してください。 このステータスが「Open Problems」テーブルに表示された場合は、テーブルに示された URL で追加の詳細を参照してください。

関連情報

- [47 ページの「未解決の問題の管理」](#)

未解決の問題の管理

Oracle ILOM は、システムのハードウェア障害と管理対象デバイスの環境条件を自動的に検出します。管理対象システムに問題が発生すると、Oracle ILOM は自動的に:

- 物理デバイスのサーバーアクション LED を点灯します。
- 読みやすい「Open Problems」テーブルで障害の状況を特定します。
- 障害の状況に関するシステム情報をイベントログに記録します。

障害のあるサーバーコンポーネントまたは障害のある Oracle ブレードシャーシ現場交換可能ユニット (FRU) の修復 (または交換) が行われると、Oracle ILOM は「Open Problems」テーブルから障害状態を自動的にクリアします。

Oracle ILOM インタフェースで検出され報告された未解決の問題を管理する方法の詳細は、これらのトピックを参照してください。

- [47 ページの「未解決の問題の用語」](#)
- [47 ページの「管理対象デバイスに検出された未解決の問題の表示」](#)

未解決の問題の用語

用語	定義
障害状態	障害状態は、コンポーネントは存在しているが、Oracle ILOM で 1 つ以上の問題が診断されたために使用できないか機能低下していることを示します。システムに損傷を与えないために、Oracle ILOM は自動的にコンポーネントを無効にします。
Open Problems	未解決の問題とは、Web インタフェースの「Open Problems」ページまたは CLI に表示される「Open Problems」表形式出力を指します。 管理対象デバイスに問題が検出されると、Oracle ILOM は「Open Problems」CLI 出力または Web インタフェーステーブルで問題を特定します。
Oracle ILOM 障害管理シェル	Oracle ILOM 障害管理シェルは、Oracle の保守担当者がシステムの問題を診断し、必要に応じて障害状態をオーバーライドできるようにします。お客様は、Oracle の保守担当者からリクエストがないかぎり、このシェルを使用しないでください。

▼ 管理対象デバイスに検出された未解決の問題の表示

ホストサーバーまたはブレードシステムシャーシに検出された未解決の問題は、「Open Problems」Web ページまたは `/System/Open_problems` CLI ターゲットから表示できます。

始める前に

- サーバーコンポーネントまたはブレードシャーシ FRU の「Open Problems」表で報告された障害は、コンポーネントの修復または交換時に自動的にクリアされます。
- ブレードシャーシの顧客交換可能ユニット (CRU) について「Open Problems」テーブルに報告された障害は、障害のある CRU の修復または交換後に「Open Problems」テーブルから手動でクリアする必要があります。手順については、[118 ページの「交換または修復された未検出のハードウェアコンポーネントについての障害のクリア」](#)を参照してください。

CLI または Web インタフェースを使用して、ホストサーバーまたはブレードシステムシャーシの未解決の問題を表示するには、次の手順に従います。

1. 次のいずれかを実行します。

- **Web:**
「System Information」>「Open Problems」をクリックします。
- **CLI:**
次のように入力します: `show /System/Open_Problems`

2. 「Open Problems」Web ページおよび CLI ターゲットで次の情報が報告されます:

- 検出された問題の合計数
- 障害の発生した各コンポーネントのタイムスタンプ、名前、および CLI ターゲット
- 障害の発生したコンポーネントのトラブルシューティングのための URL

関連情報

- [「Oracle ILOM 障害管理シエルによる Oracle ハードウェア障害の管理」](#)
- [48 ページの「保守アクションの管理: Oracle ブレードシャーシ NEM」](#)
- [「Performing Firmware Updates」](#) in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- [「Reset Power to Server SP, NEM SP, or CMM」](#) in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』

保守アクションの管理: Oracle ブレードシャーシ NEM

Oracle ILOM は一部の Oracle ブレードシャーシネットワーク Express Module (NEM) を取り外したまたはサービスに戻すためのプロパティのセットを提供します。このような NEM サービスプロパティの使用の詳細は、これらのトピックを参照してください。

- [49 ページの「NEM 保守アクションプロパティ」](#)

- 49 ページの「NEM の取り外しまたはサービスへの復帰の準備 (Web)」
- 50 ページの「NEM の取り外しまたはサービスへの復帰の準備 (CMM CLI)」

NEM 保守アクションプロパティ

NEM のプロパティ	説明
Prepare to Remove (action=prepare_to_remove)	Oracle ILOM に、修復のために物理 NEM がブレードシャーシの NEM スロットから取り外されることを通知します。
Return to Service (action=return_to_service)	Oracle ILOM に、修復のために物理的に取り外された NEM がブレードシャーシの NEM スロットに戻され、サービスの準備ができていることを通知します。

▼ NEM の取り外しまたはサービスへの復帰の準備 (Web)

Oracle ILOM Web インタフェースの CMM プロパティを使用して、NEM の取り外しまたはサービスへの復帰の場合に備えてブレードシステムシャーシを準備します。

注記 - NEM の取り外しまたはサービスへの復帰のための保守アクションの状態は、Oracle ILOM で管理されるすべての Oracle ブレードシャーシ NEM でサポートされているわけではありません。

始める前に

- 49 ページの「NEM 保守アクションプロパティ」を確認します。
 - Oracle ILOM で NEM の保守アクションを変更するには、Reset and Host Control (r) 役割が必要です。
1. CMM の Web インタフェースで、「System Information」>「I/O Modules」をクリックします。
 2. 「Network Express Module」テーブルで、次の手順を実行します。
 - a. 取り外しまたはサービスへの復帰が必要な NEM を選択します。
テーブルで NEM の選択を解除するには、NEM の列の最上部に表示される選択解除アイコンをクリックします。
 - b. アクションリストボックスをクリックし、「Prepare to Remove」または「Return to Service」のいずれかを選択します。
確認のダイアログボックスが表示されます。

- c. **確認ダイアログボックスで、「Yes」をクリックして続行します。**
選択したアクションに従って、NEM の健全性状態が更新されます。詳細は、[45 ページの「健全性状態: 定義」](#)を参照してください。

▼ NEM の取り外しまたはサービスへの復帰の準備 (CMM CLI)

Oracle ILOM CLI の CMM プロパティを使用して、NEM の取り外しまたはサービスへの復帰の場合に備えてブレードシステムシャーシを準備します。

注記 - NEM の取り外しまたはサービスへの復帰のための保守アクションの状態は、Oracle ILOM で管理されるすべてのブレードシステムシャーシ NEM でサポートされているわけではありません。

始める前に

- [49 ページの「NEM 保守アクションプロパティ」](#)を確認します。
- Oracle ILOM で NEM の保守アクションを変更するには、Reset and Host Control (r) 役割が必要です。

1. **NEM の取り外しまたはサービスへの復帰を行うには、CMM CLI で次のいずれかのコマンドを入力します。**

```
set /Systems/IO_Modules/NEMs/NEM_n action=prepare_to_remove|return to service
```

NEM_n は、ブレードシャーシ内の NEM スロット番号と同等です。

変更を続行するかどうかの確認を求めるプロンプトが表示されます。

注記 - 別の方法として、/System ターゲットの代わりに CLI レガシターゲット /SYS を発行することもできます。レガシターゲット /SYS は、Oracle ILOM 3.2.x ではデフォルトで無効になっています。CLI レガシターゲット /SYS を有効にする方法については、[35 ページの「Oracle ILOM レガシターゲットの表示または非表示」](#)を参照してください。

2. **プロンプトで Yes と入力して続行します。**
設定した保守アクションに従って、NEM の健全性状態が更新されます。
3. **NEM の更新された健全性状態を確認するには、次のように入力します。**

```
show /Systems/IO_Modules/NEMs/NEM_n health
```

健全性状態の詳細は、[45 ページの「健全性状態: 定義」](#)を参照してください。

関連情報

- [「Update Blade Chassis Component Firmware Images」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)
- [「Reset Power to Server SP, NEM SP, or CMM」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)

SPARC M シリーズサーバー上のリムーバブルデバイスの管理

ファームウェアリリース 3.2.5 以降、Oracle ILOM は、リムーバブルデバイスを管理するほか、M シリーズサーバーでのリムーバブルデバイスの健全性、位置、およびインベントリを表示するための一連のプロパティを提供します。M シリーズサーバーでリムーバブルデバイスを管理する方法の詳細は、次の手順を参照してください

- [51 ページの「M シリーズサーバーのリムーバブルデバイスの管理」](#)

▼ M シリーズサーバーのリムーバブルデバイスの管理

始める前に

- Oracle ILOM で Prepare to Remove または Return to Service アクションを実行するには、Reset and Host Control (r) 役割が必要です。
- Web ページに表示されるリムーバブルデバイスプロパティに関する特定の情報を表示するには、ページの上にある「More Details...」リンクをクリックします。
- CLI のリムーバブルデバイスのプロパティに関する特定の情報を表示するには、`help /System/Other_Removable_Devices/` コマンドを発行します。例: `help /System/Other_Removable_Devices/`

注記 - Oracle ILOM によって管理されるすべてのコンポーネントで、Prepare to Remove および Return to Service 保守アクションがサポートされているわけではありません。

M シリーズサーバーで、リムーバブルデバイスを管理するには、次の手順を実行します。

1. サーバーですべてのリムーバブルデバイスの健全性およびインベントリを表示するには、次のいずれかを実行します。
 - Web (SP): 「System Information」>「Other Removable Devices」>「Health」をクリックします。

すべてのリムーバブルデバイスの「Installed [Device Name]」プロパティおよび健全性情報を表示します。

■ CLI: 次を実行します。

- a. サーバーに取り付けられているリムーバブルデバイス名のリストを表示するには、次のように入力します。

```
show /System/Other_Removable_Devices
```

- b. 特定のリムーバブルデバイスタイプのインベントリおよび健全性を表示するには、次の手順を実行します。

■ インベントリを表示するには、次のように入力します。

```
show /System/Other_Removable_Devices/[Installed_Device_Name]
```

■ 健全性を表示するには、次のように入力します。

```
show /System/Other_Removable_Devices/[Installed_Device_Name]/  
[Installed_Device_Name_n]
```

2. リムーバブルデバイスをサービスから取り外すか、またはリムーバブルデバイスをサービスに復帰させるには、次のいずれかを実行します。

■ Web (SP): 次を実行します。

- a. 「System Information」>「Other Removable Devices」>「[Name of Device]」をクリックします。
- b. 表で、サービスからの取り外しまたは復帰が必要なコンポーネント（「Fan_Module 0」など）を選択します。
- c. 表の上部で、「Actions」リストボックスから次の保守アクションのいずれかを選択します。

■ Prepare to Remove

■ Return to Service

確認のダイアログボックスが表示されます。

- d. 確認ダイアログボックスで、「Yes」をクリックして続行します。

リムーバブルデバイスの健全性状態が更新され、選択が反映されます。詳細は、45 ページの「健全性状態: 定義」を参照してください。

■ CLI (SP): 次を実行します。

- a. サービスからの取り外しまたは復帰が必要なリムーバブルメディアデバイスに移動します。たとえば、Fan_Module 0 の CLI ターゲットに移動するには、次のように入力します。

```
cd /System/Other_Removable_Devices/Fan_Modules/Fan_Module_0
```

- b. 次のいずれかの保守アクションを実行します。

- デバイスの取り外しの準備をするには、次のように入力します。

```
set action=prepare_to_remove
```

- デバイスをサービスに復帰させるには、次のように入力します。

```
set action=return_to_service
```

- c. プロンプトで Yes と入力して続行します。

コンポーネントの健全性の状態が更新され、設定した保守アクションが反映されません。

- d. コンポーネントの更新された健全性状態を確認するには、次のように入力します。

```
show health
```

健全性状態の詳細は、[45 ページ](#)の「健全性状態: 定義」を参照してください。

Oracle ILOM のログエントリの管理

Oracle ILOM では、システムログ、イベントログ、監査ログ、および syslog の 4 つのシステム管理ログを保持します。これらのログの詳細は、次のトピックを参照してください。

- [54 ページ](#)の「ログの説明」
- [54 ページ](#)の「ログプロパティ」
- [56 ページ](#)の「ログのタイムスタンプ」
- [56 ページ](#)の「ログエントリの表示およびクリア (Web)」
- [57 ページ](#)の「ログエントリの表示およびクリア (CLI)」
- [58 ページ](#)の「ログエントリのフィルタリング」

ログの説明

ログ	説明
システム	最上位のシステムログは、関連する操作イベントログエントリのサブセットを示します。特にこのログは、システムインベントリアクションおよびコンポーネントの健全性に関するサブシステムレベルの診断イベントを報告します。これらのイベントには、電源の投入および切断、FRUの挿入および除去のほかに、「Service Required」、「Warning」、「OK」などの健全性ステータスイベントが含まれることがあります。
イベント	<p>イベントログは、コンポーネントの追加または削除やコンポーネントの障害など、管理対象デバイスに関する情報、警告、またはエラーメッセージを追跡します。イベントログに記録されるイベントのプロパティには、イベントの重要度、イベントプロバイダ (クラス)、イベントが記録された日付と時間などがあります。</p> <p>イベントログは、問題が発生したときのシステムのトラブルシューティングに役立ちます。また、管理対象デバイスのパフォーマンスのモニタリングにも役立ちます。</p>
監査	<p>監査ログは、ユーザーのログイン、ユーザーのログアウト、構成変更、パスワード変更など、インタフェース関連のすべてのユーザーアクションを追跡します。ユーザーアクションをモニタリングするユーザーインタフェースには、Oracle ILOM Web インタフェース、CLI、障害管理シェル (captive shell)、制限付きシェル、SNMP および IPMI クライアントインタフェースが含まれます。</p> <p>監査ログは、ユーザーアクティビティを監査して権限違反が発生していないことを確認するために役立ちます。</p>
Syslog	<p>syslog は、イベントのログの一般的な機能セットと、ログエントリをリモートログホストに転送するためのプロトコルを定義します。</p> <p>syslog は、複数の Oracle ILOM セッションのイベントを 1 か所にまとめる場合に役立ちます。syslog に記録されるエントリには、ローカルのイベントログに表示される同じ情報がすべて含まれます。</p> <p>注記 - Oracle ILOM の syslog 機能はデフォルトでは無効になっています。Oracle ILOM で syslog のプロパティを構成する方法の手順については、「Configuring Alert Notifications, Service Requests, or Remote Logging」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』を参照してください。</p>

ログプロパティ

プロパティ	説明	該当する対象:
Event ID	発生したイベントを識別するために使用する固有の番号。	<ul style="list-style-type: none"> ■ システムログ ■ イベントログ ■ 監査ログ
Date and Time	イベントが発生した日付と時間。時間情報プロトコル (NTP) サーバーで Oracle ILOM 時間を設定できる場合、Oracle ILOM クロックは協定世界時 (UTC) を使用します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ システムログ ■ イベントログ ■ 監査ログ

プロパティ	説明	該当する対象:
	タイムスタンプの詳細は、56 ページの「ログのタイムスタンプ」を参照してください。	
Event Type or Type	ハードウェア依存のイベントプロパティ。 イベントタイプの例: <ul style="list-style-type: none"> ■ IPMI ■ UI ■ Upgrade ■ Persistence ■ Action または Service Required ■ Warning ■ OK 	<ul style="list-style-type: none"> ■ システムログ ■ イベントログ ■ 監査ログ
Subsystem	イベントが発生したサブシステムを識別するハードウェア依存のプロパティ。 サブシステムの例: <ul style="list-style-type: none"> ■ システム ■ 電力 ■ 冷却装置 ■ メモリー ■ Storage ■ 入出力モジュール ■ プロセッサ ■ ブレード ■ DCU ■ ファームウェア 	<ul style="list-style-type: none"> ■ システムログ
コンポーネント	イベントが発生したコンポーネントを識別するハードウェア依存のプロパティ。 コンポーネントの例: <ul style="list-style-type: none"> ■ BLn (ブレード n) ■ Hostn ■ /SYS (ホストシステム) ■ CMUn (プロセッサボード n) ■ DCUn ■ PSn (電源装置 n) ■ Fann (ファン n) ■ Diskn ■ ILOM 	<ul style="list-style-type: none"> ■ システムログ
Class	イベントクラスを識別するハードウェア依存のプロパティ。 クラスの例: <ul style="list-style-type: none"> ■ Audit/ Log - 構成が変更されるコマンド。説明には、ユーザー、コマンド、コマンドパラメータ、および成功と失敗が記述されません。 ■ IPMI/Log - IPMI SEL に記録されたイベントは、管理ログにも記録されます。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ イベントログ ■ 監査ログ

プロパティ	説明	該当する対象:
	<ul style="list-style-type: none"> ■ Chassis/State – インベントリの変更および一般的なシステム状態の変更。 ■ Chassis/Action – サーバーのモジュール/シャーシの停止イベント、FRU コンポーネントのホットインサート/リムーブ、および押された「Reset Parameters」ボタン。 ■ Fault/Fault – 説明には、障害が検出された時間と原因と思われるコンポーネント名が表示されます。 ■ Fault/Repair – 障害管理の修復。説明にはコンポーネント名が表示されます。 	
Severity	イベントの重要度レベル。 重要度の例: <ul style="list-style-type: none"> ■ Debug ■ Down ■ Critical ■ Major ■ Minor 	<ul style="list-style-type: none"> ■ イベントログ ■ 監査ログ

ログのタイムスタンプ

デフォルトで、ローカルシステムタイムスタンプは、ホストサーバーのシステムクロック UTC/GMT タイムゾーンを使用して、Oracle ILOM ログファイルに取り込まれます。ただし、別のタイムゾーンにあるリモートクライアントからログファイルが表示される場合、Oracle ILOM はログファイルのタイムスタンプを自動的に調整して、リモートクライアントとホストシステムのローカルタイムゾーンを反映します。この場合、一覧表示されるイベントエントリごとに 2 つのタイムスタンプがログに表示されます。Oracle ILOM では、ローカルシステムタイムスタンプのサポートに加え、時間情報プロトコル (NTP) サーバーを使用してリモートルーターのタイムスタンプを取り込むことができます。Oracle ILOM がログエントリにタイムスタンプを取り込む方法を変更する方法については、「[Setting Properties for SP or CMM Clock](#)」 in 『[Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x](#)』を参照してください。

▼ ログエントリの表示およびクリア (Web)

ホストサーバーまたはブレードシステムシャーシについての Oracle ILOM ログエントリは、サーバー SP または CMM の Web インタフェースから表示できます。

始める前に

- ログエントリをクリアするには、Admin (a) の役割権限が必要です。

サーバー SP または CMM の Web インタフェースを使用してログエントリを表示およびクリアするには、次の手順に従います。

1. **ログエントリを表示するには、次のいずれかを実行します。**
 - システムログエントリを表示するには、「System Information」>「System Log」をクリックします。
 - イベントログまたは監査ログのエントリを表示するには、「ILOM Administration」>「Logs」をクリックし、「Event」または「Audit」タブをクリックします。選択された Oracle ILOM ログページが表示されます。
2. **表示されるすべてのログエントリをクリアするには、ログテーブルの「Clear Log」ボタンをクリックし、表示されるメッセージボックスで「OK」をクリックします。**

Oracle ILOM はログファイル内のすべてのエントリを削除します。

関連情報

- [58 ページの「ログエントリのフィルタリング」](#)
- [「Configuring Syslog for Event Logging」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)
- [「Setting Properties for SP or CMM Clock」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)

▼ ログエントリの表示およびクリア (CLI)

ホストサーバーまたはブレードシステムシャーシについての Oracle ILOM ログエントリは、サーバー SP の CLI から表示できます。

始める前に

- ログエントリをクリアするには、Admin (a) の役割権限が必要です。

サーバー SP または CMM の CLI を使用してログエントリを表示およびクリアするには、次の手順に従います。

1. **ログエントリを表形式のリストで表示するには、次のいずれかを入力します。**
 - システムログの場合、次のように入力します。

```
show /System/Log/list
```
 - イベントログの場合、次のいずれかを入力します。

```
show /SP/Logs/event/list
```

または

```
show /CMM/Logs/event/list
```

- 監査ログの場合は、次のいずれかを入力します:

```
show /SP/Logs/audit/list
```

または

```
show /CMM/Logs/audit/list
```

リストをスクロールするには q キー以外の任意のキーを押します。

2. 表示されるログエントリをクリアするには、`set target clear=true` コマンドを入力し、プロンプトで `y` と入力します。

例:

- `set /System/Log clear=true`
- `set /SP/logs/event/ clear=true`
- `set /CMM/logs/event clear=true`
- `set /SP/logs/audit clear=true`
- `set /CMM/logs/audit clear=true`

関連情報

- [58 ページの「ログエントリのフィルタリング」](#)
- [「Configuring Syslog for Event Logging」](#) in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- [「Setting Properties for SP or CMM Clock 」](#) in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』

▼ ログエントリのフィルタリング

サーバー SP または CMM のログエントリをフィルタリングするためのプロパティは、CLI と Web インタフェースで使用できます。

サーバー SP または CMM のログエントリをフィルタリングするには、次の手順に従います。

- ログエントリをフィルタリングするには、次のいずれかを実行します。
 - Web インタフェースで、「Filter」リストボックスから標準フィルタまたはカスタムフィルタのいずれかを選択します。

Web インタフェースに表示されるログエントリのフィルタリングの詳細は、ログページの「More Details」リンクをクリックしてください。

- CLI で、`show` コマンドのあとに、サポートされる 1 つ以上のログフィルタプロパティを指定して実行します。

例:

- システムログエントリを Subcomponent または Event Type でフィルタリングするには、次のいずれかを入力します。

```
show /System/Log/list Subsystem==subsystem
```

```
show /System/Log/list Type==type
```

- イベントまたは監査ログエントリを Class でフィルタリングするには、次のように入力します。

```
show /SP|CMM/Logs/event|audit/list Class==class
```

- イベントまたは監査ログエントリを Class および Type でフィルタリングするには、次のように入力します。

```
show /SP|CMM/Logs/event|audit/list Class==class Type==type
```

- イベントまたは監査ログエントリをすべてのフィルタプロパティでフィルタリングするには、次のように入力します。

```
show /SP|CMM/Logs/event|audit/list Class==class Type==type  
Severity==value
```

ここでは:

- *subsystem* はサブシステムコンポーネント名で、たとえば System、Cooling、Processor などがあります。ほかの例については、54 ページの「ログプロパティ」に記載されているサブシステムの例を参照してください。
- *type* は、イベント名か、イベントが発生したコンポーネント名で、たとえば、OK、Warning、Service Required、Fan π 、Processor π 、DCU π 、DIMM π 、UI、Product、Log、Update、または Action などがあります。ほかの例については、54 ページの「ログプロパティ」に記載されている「Component or Event Type」の例を参照してください。
- *class* はクラスイベント名で、たとえば、System、Fault、Chassis、Software、Audit、BIOS、または Sensor などがあります。Class ログプロパティの詳細は、54 ページの「ログプロパティ」の「Class」を参照してください。
- *severity* はイベントの重要度で、たとえば、Debug、Down、Critical、Major、または Minor などがあります。

- *SP/CMM* は、サーバー *SP* または *CMM* のいずれかを選択することを示します。**SP** または **CMM** と入力します。
- *event/audit* は、イベントログまたは監査ログのいずれかを選択することを示します。イベントログをフィルタリングする場合は **event** と入力し、監査ログをフィルタリングする場合は **audit** と入力します。

関連情報

- [56 ページの「ログエントリの表示およびクリア \(Web\)」](#)
- [57 ページの「ログエントリの表示およびクリア \(CLI\)」](#)

一般的なシステム管理アクションの実行

Oracle ILOM Web インタフェースの「Summary」ページにある「Actions」パネルは、次のことに使用できます。

- 管理対象デバイスの電源の状態やロケータインジケータ LED の状態など、一般的に使用されるシステムプロパティの状態を表示および変更します。
- 管理対象デバイスに現在インストールされているファームウェアイメージを更新します。
- リモートコンソール機能または x86 Oracle System Assistant を起動します。

注記 - Oracle System Assistant は、Oracle の x86 サーバーでのみ使用できます。

一般的に使用されるこれらのホスト管理アクションを Web インタフェースの「Summary」ページの「Actions」パネルから開始する方法の詳細は、これらのトピックを参照してください。

- [60 ページの「デバイスの電源状態を「Actions」パネルから表示および変更する \(Web\)」](#)
- [61 ページの「デバイスのロケータ状態を「Actions」パネルから表示および変更する \(Web\)」](#)
- [62 ページの「デバイスのファームウェアを「Actions」パネルから更新する \(Web\)」](#)
- [65 ページの「リモートコンソールを「Actions」パネルから起動する \(Web\)」](#)
- [67 ページの「x86 Oracle System Assistant の起動」](#)

▼ デバイスの電源状態を「Actions」パネルから表示および変更する (Web)

ホストサーバーまたは CMM に関する「Power」状態プロパティは、Web インタフェースの「Summary」ページの「Actions」パネルから表示および構成できます。

始める前に

- Oracle ILOM で管理対象デバイスの電源状態を変更するには、Admin (a) 役割権限が必要です。

注記 - また、「Host Management」>「Remote Power Control」ページまたは CLI の /System ターゲットから管理対象デバイスの電源状態を変更することもできます。これらの代替方法を使用して電源状態を制御する詳細は、この手順のあとの「関連情報」セクションのトピックを参照してください。

1. 管理対象デバイスの電源状態を表示するには、「System Information」>「Summary」をクリックします。
管理対象デバイスの現在の電源状態が「Actions」パネルに表示されます。
2. 表示された管理対象デバイスの電源状態を変更するには、次のいずれかを実行します。
 - 「Actions」パネルで電源状態がオンに設定されている場合、「Turn Off」ボタンをクリックしてオペレーティングシステムの正常な停止を実行してから、ホストサーバーの電源を切断します。

注記 - ホストサーバーの電源停止に失敗する場合は、「Host Management Power Control」ページの「Immediate Power Off」をクリックして電源を強制的に停止できます。

- 「Actions」パネルで電源状態がオフに設定されている場合、「Turn On」ボタンをクリックしてホストサーバーに電源を再投入します。

続行するかどうかを確認するプロンプトが表示されたら、「Yes」をクリックして続行するか、「No」をクリックして操作を取り消します。

関連情報

- [「Controlling Host Power to Server or Blade System Chassis」](#) in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』

▼ デバイスのロケータ状態を「Actions」パネルから表示および変更する (Web)

ホストサーバーまたは CMM に関する「Locator Indicator」状態プロパティは、Web インタフェースの「Summary」ページの「Actions」パネルから表示および構成できます。

始める前に

- ロケータインジケータについては、サーバーまたはシャーシのドキュメントを参照してください。使用しているプラットフォームのドキュメントにロケータインジケータの説明が記載されていない場合は、Oracle サービス担当者にお問い合わせください。

注記 - または、CLI の `/System` ターゲットからロケータインジケータ状態を表示および変更することもできます。手順については、この手順のあとの「関連情報」セクションのリンクを参照してください。

1. 管理対象デバイスの現在のロケータインジケータ状態を表示するには、「System Information」>「Summary」をクリックします。
管理対象デバイスの現在のロケータインジケータ状態が「Actions」パネルに表示されます。
2. 「Actions」パネルに表示されたロケータインジケータ状態を変更するには、ロケータの「Turn On」または「Turn Off」ボタンをクリックします。
続行するかどうかを確認するプロンプトが表示されたら、「Yes」をクリックして続行するか、「No」をクリックしてアクションを取り消します。

関連情報

- [「Locate a Managed Device Using the Locator LED」](#) in 『Oracle ILOM Getting Started Guide Firmware Release 3.2.x 』
- [「Configuring Host Server Management Actions」](#) in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』

▼ デバイスのファームウェアを「Actions」パネルから更新する (Web)

ホストサーバーまたは CMM に関する「System Firmware Update」プロパティは、Web インタフェースの「Summary」ページの「Actions」パネルから表示および構成できます。

始める前に

- プラットフォームが必要とする場合は、サーバー SP のファームウェアイメージを更新する前に、ホストオペレーティングシステムをシャットダウンします。
- システムファームウェアを更新するには、Admin (a) 役割権限が必要です。
- ファームウェア更新処理の完了には、数分かかります。この間、ほかの Oracle ILOM タスクを実行しないでください。ファームウェアの更新が完了すると、システムがリブートします。

注記 - または、「ILOM Administration」>「Maintenance」>「Firmware Upgrade」ページからファームウェアの更新プロセスを起動することもできます。また、Oracle ILOM CLI からファームウェアの更新プロセスを起動することもできます。詳細は、この手順のあとの「関連情報」セクションのトピックを参照してください。

Web インタフェースの「Summary」ページの「Actions」パネルからファームウェアの更新プロセスを開始するには、次のようにします。

1. **サーバー SP または CMM にインストールされている現在のファームウェアバージョンを判定します。**

Web インタフェースから「System Information」>「Summary」をクリックし、「General Information」テーブルの「System Firmware Version Installed」値を確認します。

2. **新しい Web ブラウザタブまたはウィンドウを開き、次のサイトに移動して Oracle ILOM ファームウェアイメージをダウンロードします。**

<http://support.oracle.com/>

My Oracle Support Web サイトからソフトウェアの更新をダウンロードする方法の詳細な手順については、「[Oracle ILOM Firmware Versions and Download Methods](#)」 in 『[Oracle ILOM Feature Updates and Release Notes Firmware Release 3.2.x](#)』を参照してください。

注記 - 管理対象デバイスのシステムファームウェアイメージを以前のファームウェアリリースに更新することは推奨されません。ただし、以前のファームウェアリリースが必要な場合、Oracle ILOM はダウンロードサイトから入手できる以前のファームウェアリリースへのファームウェア更新処理をサポートします。

3. **TFTP、FTP、SFTP、SCP、HTTP、HTTPS プロトコルのいずれかをサポートするサーバーにファームウェアイメージを配置します。**

Web インタフェースでファームウェアを更新する場合は、Oracle ILOM Web ブラウザが動作しているシステムにイメージをコピーするようにしてください。

4. **Web インタフェースの「Summary」ページの「Actions」パネルから Oracle ILOM ファームウェアイメージを更新するには、「System Information」>「Summary」をクリックし、次の手順を実行します。**

- a. 「Actions」パネルで、「System Firmware Update」の「Update」ボタンをクリックします。

「Firmware Upgrade」ページが表示されます。

- b. 「Firmware Upgrade」ページの「Enter Upgrade Mode」をクリックします。

更新プロセスが完了すると、ログインしているほかのユーザーのセッションが切断されることを示す「Upgrade Verification」ダイアログボックスが表示されます。

- c. 「Upgrade Verification」ダイアログボックスで、「OK」をクリックして続行します。
「Firmware Upgrade」ページが表示されます。
5. 次のアクションを実行します。
 - a. 次のいずれかの手順を実行して、イメージの場所を指定します。
 - 「Browse」をクリックし、インストールするファームウェアイメージの場所を選択します。
 - 使用しているシステムでサポートされている場合は、「Specify URL」をクリックします。テキストフィールドに、ファームウェアイメージがある URL を入力します。
 - b. ファイルのアップロードと検証のために「Upload」ボタンをクリックし、ファイルがアップロードされ検証されるまで待ちます。
「Firmware Verification」ページが表示されます。
 6. 次の任意のオプションを有効にします:
 - Preserve Configuration – Oracle ILOM の既存の構成を保存して更新プロセスの完了後に復元する場合は、このオプションを有効にします。
 - Delay BIOS upgrade until next server power-off – システムが次にリポートするまで BIOS のアップグレードを延期する場合は、このオプションを有効にします。
-
- 注記 - 「Delay BIOS upgrade」オプションは、Oracle x86 サーバー上でファームウェアを更新する場合にのみ表示されます。
-
- 注記 - Oracle x86 サーバーの場合、Oracle ILOM は、管理対象デバイスの現在の BIOS プロパティを保持するかどうかを確認するプロンプトを表示します。「Yes」と回答すると、Oracle ILOM はファームウェア更新の完了後に現在の BIOS プロパティを保持します。「No」と回答すると、Oracle ILOM はファームウェア更新の完了後に BIOS プロパティを出荷時のデフォルトに設定します。
-
7. 「Start Upgrade」をクリックして、アップグレードプロセスを開始するか、「Exit」をクリックしてプロセスを取り消します。
「Start Upgrade」をクリックすると、アップグレードプロセスが開始され、プロセスの続行を確認するプロンプトが表示されます。
 8. プロンプトで「OK」をクリックして続行します。
「Update Status」ページが表示され、更新の進捗状況が表示されます。「Update Status」ページの進捗状況が 100% を示すと、ファームウェアのアップロードは完了です。

アップロードが完了すると、システムは自動的にリポートします。

注記 - 更新の完了後、Oracle ILOM の Web インタフェースが正しくリフレッシュされないことがあります。Oracle ILOM の Web ページで情報が欠落している場合やエラーメッセージが表示される場合は、キャッシュされているバージョンのページが表示されている可能性があります。ブラウザのキャッシュをクリアしてブラウザをリフレッシュしてから、続行してください。

9. Oracle ILOM SP または CMM の Web インタフェースに再接続します。「System Information」>「Summary」をクリックして、SP または CMM のファームウェアバージョンが、インストールしたファームウェアのバージョンと一致することを確認します。

関連情報

- [「Performing Firmware Updates」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)
- [「Recover From a Network Failure During Firmware Update」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)
- [「Update the Server SP or CMM Firmware Image」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)
- [「Update Oracle ILOM Firmware \(SNMP\)」 in 『Oracle ILOM Protocol Management Reference for SNMP and IPMI』](#)

▼ リモートコンソールを「Actions」パネルから起動する (Web)

Oracle ILOM の「Summary」ページの「Actions」パネルには、グラフィカルリモートコンソール機能を起動するための、「Remote Console Launch」ボタンが用意されています。リモートコンソールを使用すると、ホストシステムのキーボード、ビデオ、マウス、およびストレージデバイスをリダイレクトできます。ブレードシャーシの場合、リモートコンソール機能はシャーシ内のブレードサーバーごとにリダイレクションセッションを提供します。

Oracle ILOM では、テキストベースのシリアルリダイレクション機能も使用できます。シリアルリダイレクションの詳細は、「[Using Remote KVMS Consoles for Host Server Redirection](#)」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』を参照してください。

始める前に **始める前に**

グラフィカルリモートコンソールの初回設定要件を確認します。

- Oracle ILOM 3.2.x に付属しているシステムについては、「Using the Oracle ILOM Remote System Console Plus」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』を参照してください
- Oracle ILOM 3.1 または 3.0 に付属しているシステムについては、「Using the Oracle ILOM Remote System Console or Storage Redirection CLI」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』を参照してください

1. Web インタフェースの「Actions」パネルにアクセスするには、「System Information」>「Summary」をクリックします。

「Summary」ページの右上隅に「Actions」パネルが表示されます。

注記 - または、「Remote Control」>「Redirection」ページの「Launch Remote Console」ボタンをクリックして、リモートコンソールを Web インタフェースから起動することもできます。

2. 「Remote Console Launch」ボタンをクリックします。

はじめて使用するように Web ブラウザの 32 ビット JDK プラグインが構成されていない場合は、「Opening jnlpgenerator.cli」ダイアログが表示されます。「OK」をクリックして続行する前に、『Oracle ILOM 構成および保守用管理者ガイド』で説明されているブラウザの JDK プラグイン構成オプションを確認してください。

「Oracle ILOM Remote System Console Plus」ウィンドウが表示されます。

注記 - システムに Oracle ILOM 3.1 または 3.0 が標準搭載されている場合は、「Oracle ILOM Remote System Console」ウィンドウが表示されます。

リモートコンソールウィンドウには、ホストサーバーのデスクトップが現在の状態で表示されます。
例:

- ホストサーバーの電源が投入されている場合、ブートメッセージのセットが表示されます。
- ホストサーバーのオペレーティングシステムの電源が投入されている場合、デスクトップログインダイアログが表示されます。
- ホストサーバーの電源が投入されていない場合、ブランク画面が表示されます。

関連情報

- 「Using Remote KVMs Consoles for Host Server Redirection」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』
- 「Optionally Set a Lock Mode to Secure the Host Server Desktop」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』

▼ x86 Oracle System Assistant の起動

Oracle System Assistant は、オペレーティングシステムのインストール、ファームウェアの更新、RAID の構成など、サーバーのプロビジョニングのための機能を提供するツールです。これらの機能の追加情報については、使用している x86 サーバーの管理ガイドを参照してください。

始める前に

- Oracle ILOM に Oracle System Assistant の「Launch」オプションが表示されるのは、ホスト x86 サーバーに Oracle System Assistant が存在する場合に限りです。
- ホストサーバーのホストオペレーティングシステムの電源を切断します。この手順を実行する前にホスト OS の電源を切断しないと、Oracle ILOM では Oracle System Assistant を起動する前にホストの電源切断を求めるプロンプトが表示されます。
- Oracle System Assistant を起動するときに、新しいリモートコンソールセッションの起動を求めるプロンプトが表示されます。したがって、Oracle System Assistant を起動する前に、グラフィカルリモートコンソールの起動および使用の設定要件 (JDK バージョン、ブラウザの Java plug-in、および KVM 設定) が満たされていることを確認してください。これらの要件の詳細は、[65 ページの「リモートコンソールを「Actions」パネルから起動する \(Web\)」](#)を参照してください。
- Oracle System Assistant を起動するには、Oracle ILOM の Admin (a) の役割が必要です。リモートコンソールを起動するには、Console (c) の役割が必要です。

この手順では、Web と CLI の両方の手順について説明します。

- **Oracle System Assistant を起動するには、次の Oracle ILOM インタフェース手順のいずれかを実行します。**

Oracle ILOM インタフェース	Oracle System Assistant の起動手順
Web	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「System Information」>「Summary」ページにある「Actions」パネルで、Oracle System Assistant の「Launch」ボタンをクリックします。 <p>次のプロンプトが1 つまたは複数表示されます:</p> <p>「Power off host」プロンプト: このプロンプトは、この手順を実行する前にホストサーバーの電源が切断されていない場合のみ表示されます。「OK」をクリックしてホストサーバーの電源を切断します。</p> <p>「Launch a new remote console」プロンプト: このプロンプトは、リモートコンソールを起動する前に表示されます。</p> <p>注記 - 次の動作が発生することがあります。1) 「電源状態を取得できない」という警告メッセージが表示される、および 2) 「Actions」パネルの「Power」に電源切断状態が表示される。この動作が発生した場合、その原因は Oracle ILOM が一時的にホストサーバーの情報を取得できないためです。この場合には、警告メッセージの「OK」をクリックして Oracle System Assistant の起動を続行します。「Summary」ページに戻ったら、「Refresh」をクリックして、「Actions」パネルに表示されるホストの電源状態を更新します。</p> <p>Oracle ILOM により、Oracle System Assistant が「Oracle ILOM Remote System Console (Plus)」ウィンドウで起動されます。</p>

Oracle ILOM インタフェース	Oracle System Assistant の起動手順
CLI	<p data-bbox="574 371 1419 422">Oracle System Assistant の使用手順については、x86 サーバーの管理ガイドを参照してください。</p> <ol data-bbox="574 432 1419 720" style="list-style-type: none"><li data-bbox="574 432 1419 632">1. Oracle ILOM CLI で次のように入力します: start /HOST/provisioning/system-assistant 次のプロンプトが表示されます: Are you sure that you want to start /HOST/provisioning/system-assistant (y/n)? 2. y と入力して Oracle System Assistant を起動します (または、n と入力して操作を取り消します)。 Oracle ILOM により、Oracle System Assistant が起動されます。 Oracle System Assistant の使用手順については、x86 サーバーの管理ガイドを参照してください。

関連情報

- Oracle x86 サーバーの管理ガイド、Oracle System Assistant

ホストおよびシステムの管理アクションの適用

説明	リンク
ホスト管理アクションのプロパティを設定する方法を説明する Oracle ILOM 構成トピックへのリンクを見つけます。	■ 69 ページの「ホスト管理構成アクションの管理」
サーバー管理アクションのプロパティを設定する方法を説明する Oracle ILOM 構成トピックへのリンクを見つけます。	■ 70 ページの「システム管理構成アクションの管理」

関連情報

- [「Setting System Management Power Source Policies」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Maintaining x86 BIOS Configuration Parameters」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Configuring Host Server Management Actions 」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Performing Oracle ILOM Maintenance and Configuration Management Tasks」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)

ホスト管理構成アクションの管理

説明	リンク
ラックマウントおよびブレードシャーシの電力プロパティを制御します。	■ 「Controlling Host Power to Server or Blade System Chassis 」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
次回のブートデバイスを制御します。	■ 「Setting Next Boot Device on x86 Host Server」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』

説明	リンク
管理対象サーバーの SP 診断を有効にします。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「Setting Diagnostic Tests to Run」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』
SPARC ホストブート、ホストドメイン、KeySwitch、および TPM プロパティを管理します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「Setting Boot Behavior on SPARC Host Server」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』 ■ 「Overriding SPARC Host Boot Mode」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』 ■ 「Managing SPARC Host Domains」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』 ■ 「Setting SPARC Host KeySwitch State」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』 ■ 「Setting SPARC Host TPM State」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』

システム管理構成アクションの管理

説明	リンク
x86 管理対象サーバーで BIOS プロパティをバックアップおよび復元します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「Maintaining x86 BIOS Configuration Parameters」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』
管理対象デバイスにシステム管理ポリシーを設定します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「Setting System Management Power Source Policies」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』
Oracle ブレードシャーシに取り付けられている SAS ストレージデバイスを管理します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「SAS Zoning Chassis Blade Storage Resources」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』
Oracle ILOM 構成のバックアップおよび復元と、サーバー SP、NEM SP、または CMM のリセットを実行します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「Performing Oracle ILOM Maintenance and Configuration Management Tasks」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』

Oracle ILOM インタフェースを介したリアルタイム電力監視

説明	リンク
Oracle ILOM インタフェースを使用して管理対象デバイスの消費電力メトリックを表示します。	■ 71 ページの「消費電力のモニタリング」
Oracle ILOM インタフェースを使用して管理対象デバイスの電力割り当てメトリックを表示する場合のプロパティ、ハードウェアコンポーネント、モニタリングの考慮事項、および手順について学習します。	■ 75 ページの「電力割り当てのモニタリング」
Oracle ILOM インタフェースを使用して電力統計、電力履歴メトリック、およびグラフを表示します。	■ 83 ページの「電力使用統計情報の分析」 ■ 85 ページの「電力履歴パフォーマンスの比較」

関連情報

- [「Setting the CMM Power Supply Redundancy Policy」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)
- [「Setting Power Alert Notifications and Managing System Power Usage」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)
- [「Monitor and Manage System Power \(SNMP\)」 in 『Oracle ILOM Protocol Management Reference for SNMP and IPMI』](#)

消費電力のモニタリング

Oracle ILOM インタフェースに表示される「Power Consumption」プロパティにより、次を取得できます。

- 管理対象デバイスによって現在消費されている入力電力 (ワット) の値。
- 管理対象デバイスが消費できる最大電力 (ワット) の値。
- 電力イベント通知の生成のために設定されている消費電力しきい値 (ワット)。

Oracle ILOM で表示される消費電力プロパティの詳細は、次のトピックを参照してください。

- [72 ページの「管理対象デバイスの「Power Consumption」プロパティの表示」](#)
- [73 ページの「消費電力の用語とプロパティ」](#)

▼ 管理対象デバイスの「Power Consumption」プロパティの表示

始める前に

[73 ページの「消費電力の用語とプロパティ」](#)を確認します。

- SP または CMM の Web インタフェースまたは CLI から消費電力プロパティを表示するには、次のいずれかを実行します。

- SP または CMM の Web インタフェースから、「Power Management」> 「Consumption」をクリックします。

- SP または CMM の CLI から、`show` コマンドに続いて該当するターゲットとプロパティを入力します。

たとえば、CMM または単一の SP Oracle サーバーについての CLI 消費電力プロパティを表示するには、次のいずれかを入力します。

- `show /SP/CMM/powermgmt actual_power`
- `show /SP/CMM/powermgmt permitted_power`
- `show /SP/CMM/powermgmt threshold1|2`

ここでは:

- `SP|CMM` は、サーバー SP または CMM のいずれかを選択することを示します。管理対象デバイスが Oracle サーバーの場合は `SP` と入力し、管理対象デバイスが Oracle Blade CMM の場合は `CMM` と入力します。
- `1|2` は、しきい値番号を示します。しきい値 1 を表示するには `1` と入力し、しきい値 2 を表示するには `2` と入力します。

マルチドメイン SPARC サーバーの PDomain `n` の消費電力プロパティを表示するには、次のいずれかを入力します。

- `show /Servers/PDomains/PDomain_n/SP/powermgmt actual_power`
- `show /Servers/PDomains/PDomain_n/SP/powermgmt permitted_power`
- `show /Servers/PDomains/PDomain_n/SP/powermgmt allocated_power`

関連情報

- 「Setting Power Consumption Alert Notifications」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- 「Setting CMM Power Grant and SP Power Limit Properties」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- 「Setting SP Advanced Power Capping Policy to Enforce Power Limit」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- 「Setting the CMM Power Supply Redundancy Policy」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』

消費電力の用語とプロパティ

- 表5「消費電力の用語」
- 表6「Oracle ILOM インタフェースの「Power Consumption」プロパティ」

表 5 消費電力の用語

用語	説明
リアルタイム電力モニタリング	Oracle ILOM は、ハードウェアインタフェース (CMM、SP、電源ユニット (PSU) など) を任意の時点でポーリングして、更新された電力モニタリングメトリックを継続的に Oracle ILOM インタフェースに表示することにより、1 秒以内の精度のリアルタイム電力モニタリングを可能にします。
消費電力	消費電力は、管理対象デバイスによって消費される入力電力または PSU から供給される出力電力を指します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 入力電力 ■ 出力電力
管理対象デバイスごとの消費電力	Oracle ILOM インタフェースに表示される消費電力メトリックは、次のハードウェア構成によって異なります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ラックマウント ■ ブレードサーバー ■ CMM

注記 - 次の表には、Oracle のマルチドメイン SPARC システムへの CLI パスは含まれていません。特定の PDomain の電力プロパティを表示するには、示された CLI パスの先頭に /Servers/PDomains/PDomain_n/ を付けてください。

表 6 Oracle ILOM インタフェースの「Power Consumption」プロパティ

「Power Metric」プロパティ	管理対象デバイス	説明
Actual Power (/SP/CMM/powermgmt actual_power) または (/System/Power actual_power_consumption)	x86 SP SPARC SP CMM	Oracle ILOM インタフェースに表示される読み取り専用の「Actual Power」プロパティ値は、管理対象デバイス (ブレードシャーシ、ラックマウントサーバー、またはブレードサーバー) によって消費される電力 (ワット) を示します。
Target Limit (/SP/powermgmt/budget powerlimit)	x86 SP SPARC SP	Oracle ILOM インタフェースに表示される読み取り専用の「Target Limit」プロパティ値は、Oracle サーバーに設定されている現在のターゲット制限値 (ワットまたはパーセント) を表示します。 電力モニタリングの重要考慮事項: <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle ILOM は、設定されたターゲット制限値を使用して、サーバーに許可される電力バジェットパラメータを決定します。 ■ すべての x86 サーバーが電力管理の「Target Limit」プロパティを Oracle ILOM インタフェースに表示するわけではありません。x86 サーバーで「Target Limit」プロパティがサポートされていない場合、Oracle ILOM はそのサーバーに取り付けられている電力消費ハードウェアコンポーネントに基づいて、そのサーバーの電力バジェットパラメータを決定します。 ■ 「Target Limit」プロパティが Oracle ILOM インタフェースでサポートされている (表示される) ときに、プロパティ値が設定されていない場合は、プロパティ値「Not Configured」が Oracle ILOM インタフェースに表示されます。 電力バジェットまたは「Target Limit」の設定の手順の詳細は、「Set SP Power Target Limit Properties」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』を参照してください。
Peak Permitted (/SP/CMM/powermgmt permitted_power) または (/System/Power max_permitted_power)	x86 SP SPARC SP CMM	Oracle ILOM インタフェースに表示される読み取り専用の「Peak Permitted」プロパティ値は、管理対象デバイスが消費できる最大電力 (ワット) を表示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle ラックマウントサーバーまたはブレードサーバーの場合、許容ピーク値は、サーバーが消費できる最大入力電力を表します。 ■ ブレードシャーシの場合、許容ピーク値は、ブレードシャーシが消費できる最大電力を表します。
Event Notification Threshold デフォルト設定: disabled <ul style="list-style-type: none"> ■ Threshold 1 = 0 ワット ■ Threshold 2 = 0 ワット (/SP/CMM/powermgmt threshold 1/2 = 0)	x86 SP SPARC SP CMM	Oracle ILOM インタフェースに表示されるユーザー定義の「Notification Threshold」プロパティ値は、アラート通知をトリガーするように設定されている電力値 (ワット) を表示します。有効にされている場合、管理対象デバイスの消費電力 (ワット) がユーザー定義のしきい値を超えると、アラート通知が Oracle ILOM によってトリガーされます。 注記 - Oracle ILOM によって生成されるイベント通知は、Oracle ILOM インタフェースで電子メールアラートプロパティが正しく構成されているかどうか依存し

「Power Metric」プロパティ	管理対象デバイス	説明
		<p>ます。詳細は、「Setting Power Alert Notifications and Managing System Power Usage」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』を参照してください。</p>

関連情報

- [「Setting Power Consumption Alert Notifications」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)

電力割り当てのモニタリング

Oracle ILOM インタフェースに表示される「Power Management Allocation Plan」は、エネルギー効率の高いデータセンターを計画するのに役立ちます。「Allocation Plan」に表示されるプロパティにより、単一の管理対象デバイスまたは管理対象デバイスに取り付けられている個々のコンポーネントに割り当てられた正確な電力メトリックを効果的にモニターおよび取得できます。

「Allocation Plan」に表示される電力メトリックプロパティの詳細は、次のトピックを参照してください。

- [78 ページの「管理対象デバイスごとの「Power Allocation Plan」プロパティ」](#)
- [81 ページの「電力割り当てコンポーネントとモニタリングの考慮事項」](#)
- [75 ページの「管理対象デバイスの電力割り当て計画の表示」](#)

▼ 管理対象デバイスの電力割り当て計画の表示

始める前に

- [78 ページの「管理対象デバイスごとの「Power Allocation Plan」プロパティ」](#)を確認してください
- [81 ページの「電力割り当てコンポーネントとモニタリングの考慮事項」](#)を確認してください

1. CMM または SP の Web インタフェースから「Power Allocation Plan」プロパティを表示するには、「Power Management」>「Allocation」をクリックします。

管理対象デバイスの「Power Allocation Plan」が表示されます。

2. SP の CLI から「Power Allocation Plan」プロパティーを表示するには、次を実行します。

注記 - この手順には、SPARC マルチドメインサーバーへの CLI パスは含まれていません。特定の PDomain の電力プロパティーを表示するには、次に示された CLI パスの先頭に `/Servers/PDomains/PDomain_n/` を付けてください。

■ SP の「System Power Specification」プロパティーを表示します:

- a. 「Allocated Power」および「Peak Permitted」電力プロパティー値を表示するには、次のように入力します:

```
show /SP/powermgmt/ allocated_power permitted_power
```

- b. 「Target Limit」(このプロパティーはすべてのサーバーでサポートされているわけではありません) のプロパティー値を表示するには、次のように入力します:

```
show /SP/powermgmt/budget powerlimit
```

- c. 「Power Supply Maximum」のプロパティーを表示するには、次のように入力します:

```
show /SP/powermgmt/ available_power
```

注記 - Oracle CPU ブレードサーバーの「Installed Hardware Minimum」の電力 (ワット) プロパティー値は、Oracle ILOM Web インタフェースの「Allocation Plan」からのみ表示できます。

■ SP の「Per Component Map」プロパティーを表示します:

- a. 管理対象サーバーに構成されている電力割り当てコンポーネントのリストを表示するには、次のように入力します:

```
show /SP/powermgmt/powerconf/
```

- b. 特定のサーバーコンポーネントの電力割り当てプロパティー値を表示するには、次のように入力します。

```
show /SP/powermgmt/powerconf/component_type/component_name
```

ここでは、*component_type* はコンポーネントカテゴリの名前、*component_name* はコンポーネントの名前です。

たとえば、特定の CPU に割り当てられた電力を表示するには、次のように入力します。

```
show /SP/powermgmt/powerconf/CPUs/CPUn
```

n は、CPU の取り付け位置番号です。

3. CMM の CLI から「Power Allocation Plan」プロパティを表示するには、次を実行します。

■ CMM の「System Power Specification」プロパティを表示します:

- a. 「Allocated Power」および「Peak Permitted」電力プロパティ値を表示するには、次のように入力します:

```
show /CMM/powermgmt/ allocated_power permitted_power
```

- b. 「Power Supply Maximum」プロパティ値を表示するには、次のように入力します:

```
show /CMM/powermgmt available_power
```

- c. 「Redundant Power」プロパティ値を表示するには、次のように入力します:

```
show /CMM/powermgmt redundant_power
```

■ CMM の「Blade Power Map」プロパティを表示します:

- a. 「Grantable Power」プロパティを表示するには、次のように入力します:

```
show /CMM/powermgmt/ grantable_power
```

注記 - 「Unfilled Grant Requests」のプロパティは、Oracle ILOM Web インタフェースの「Allocation Plan」からのみ表示できます。

- b. ブレードスロットごとの「Grant Limit」および「Granted Limit」プロパティ値を表示するには、次のように入力します:

```
show /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots BLn
```

n は、Oracle ブレードシャーシ内のブレードのスロット位置です。

- c. 特定のブレードスロットの「Required Power」プロパティを表示するには、次のように入力します:

```
show /CMM/powermgmt/advanced/n
```

n は、Oracle ブレードシャーシ内のブレードのスロット位置です。

- d. すべてのシャーシブレードスロットの「Granted Power」プロパティ値、およびすべての I/O シャーシブレードスロットの「Reserved Power」プロパティ値を表示するには、次のように入力します:

```
show /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots granted_power reserved_power
```

- e. シャーシスロットに取り付けられている特定のコンポーネントの電力割り当てプロパティ値を表示するには、次のように入力します:

```
show /CMM/powermgmt/powerconf/component-type/component-name
```

component_type はコンポーネントカテゴリの名前、*component-name* はコンポーネントの名前です

例:

```
show /CMM/powermgmt/powerconf/NEMs/NEMn
```

n は、Oracle ブレードシャーシ内の NEM のスロット位置です。

関連情報

- 78 ページの「管理対象デバイスごとの「Power Allocation Plan」プロパティ」
- 81 ページの「電力割り当てコンポーネントとモニタリングの考慮事項」
- 「Setting CMM Power Grant and SP Power Limit Properties」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- 「Setting SP Advanced Power Capping Policy to Enforce Power Limit」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- 「Setting the CMM Power Supply Redundancy Policy」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』

管理対象デバイスごとの「Power Allocation Plan」プロパティ

- 表7「System Power Specification」プロパティ (電力割り当て)
- 表8「Per Component Power Map」プロパティ (SP の電力割り当て)
- 表9「ブレードスロット電力のサマリー (CMM の電力割り当て)
- 表9「ブレードスロット電力のサマリー (CMM の電力割り当て)
- 表11「Chassis Component」プロパティ (CMM のみ)

表 7 「System Power Specification」プロパティ (電力割り当て)

「Power Metric」プロパティ (読み取り専用)	管理対象デバイス	説明
Power Supply Maximum (/SP/CMM/powermgmt available_power)	x86 SP CMM	Oracle ILOM インタフェースに表示される「Power Supply Maximum」プロパティ値は、電源装置が電源コンセントから引き出すことができる最大入力電力 (ワット) を表します。

「Power Metric」プロパティ (読み取り専用)	管理対象デバイス	説明
Redundant Power (/CMM/powermgmt_redundant_power)	CMM	Oracle ILOM インタフェースに表示される「 <i>Redundant Power</i> 」プロパティ値は、ブレードシャーシ電源装置に現在割り当てられていない使用可能電力 (ワット) を表します。 注記 - 冗長電力プロパティの電力 (ワット) は、CMM の「Power Supply Redundancy Policy」を介して構成できます。詳細は、「 Set CMM Power Supply Redundancy Policy 」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』を参照してください。
Installed Hardware Minimum	ブレード SP	Oracle ILOM Web インタフェースに表示される「 <i>Installed Hardware Minimum</i> 」プロパティ値は、サーバーに取り付けられているハードウェアコンポーネントによって消費されている最小入力電力 (ワット) を表します。
Peak Permitted (/SP/CMM/powermgmt_permitted_power)	x86 SP SPARC SP CMM	Oracle ILOM インタフェースに表示される「 <i>Peak Permitted</i> 」プロパティ値は、管理対象デバイスに保証された最大消費電力 (ワット) を表します。たとえば: <ul style="list-style-type: none">■ Oracle x86 および SPARC サーバーの場合、「Peak Permitted」プロパティは、サーバーが任意の時点で消費できる最大入力電力 (ワット) を表します。■ Oracle CMM の場合、「Peak Permitted」プロパティは、ブレードサーバーが任意の時点で消費できる最大入力電力 (ワット) を表します。
<p>モニタリングの重要考慮事項:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ すべての x86 サーバー SP が Oracle ILOM インタフェースで「Target Limit」のプロパティをサポートしているわけではありません。このような場合、「Peak Permitted」に表示される同じプロパティ値 (ワット) を、管理対象サーバーに取り付けられている電力消費ハードウェアコンポーネントから導き出します。 ■ Oracle サーバー SP の場合、Oracle ILOM は、「Peak Permitted」に表示するワット値を、「Allocated Power」および「Target Limit」に表示されるプロパティ値から導き出します。「Target Limit」プロパティがサポートされていない場合、Oracle ILOM は「Peak Permitted」プロパティ値を、管理対象サーバーに取り付けられている電力消費ハードウェアコンポーネントから導き出します。 <p>管理対象デバイスによって消費される電力のバジェットの詳細は、「Setting Power Alert Notifications and Managing System Power Usage」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』を参照してください。</p>		
Allocated Power (/SP/CMM/powermgmt_allocated_power)	x86 SP SPARC SP CMM	Oracle ILOM インタフェースに表示される「 <i>Allocated Power</i> 」プロパティ値は、管理対象デバイスに割り当てられた最大入力電力 (ワット) を表します。例: <ul style="list-style-type: none">■ Oracle ラックマウントサーバーの場合、「Allocated Power」プロパティ値は、ラックマウントサーバーに構成されているすべての取り付け済みシャーシコンポーネントおよびホットプラグ可能コンポーネントに割り当てられた最大電力の合計を表します。■ Oracle ブレードシャーシの場合、「Allocated Power」プロパティ値は次のものを表します。1) すべての取り付け済みシャーシ

管理対象デバイスの電力割り当て計画の表示

「Power Metric」プロパティ (読み取り専用)	管理対象デバイス	説明
		コンポーネントに割り当てられた最大電力 (ワット)、および 2) すべてのシャーシサーバーブレードに許可された最大電力 (ワット)。
Target Limit (/SP/powermgmt/budget powerlimit)	x86 SP SPARC SP	Oracle ILOM インタフェースに表示される「Target Limit」プロパティ値は、サーバーに構成されている電力制限値 (ワットまたはパーセント) を表示します。 電力モニタリングの重要考慮事項: <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle ILOM は、設定された電力制限値を使用して、サーバーに許可される電力バジェットパラメータを決定します。 ■ Oracle ILOM で電力制限が構成されていない場合は、読み取り専用の「Target Limit」プロパティ値「Not Configured」が「Power Allocation Plan」に表示されます。 ■ すべての x86 サーバー SP が「Target Limit」プロパティを Oracle ILOM インタフェースでサポートしているわけではありません。「Target Limit」プロパティがサポートされていない場合、Oracle ILOM は「Peak Permitted」ワット値を、管理対象サーバーに取り付けられている電力消費ハードウェアコンポーネントに基づいて決定します。 <p>電力バジェットまたは電力制限の構成手順の詳細は、「Setting Power Alert Notifications and Managing System Power Usage」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』を参照してください。</p>

表 8 「Per Component Power Map」プロパティ (SP の電力割り当て)

「Power Metric」プロパティ (読み取り専用)	管理対象デバイス	説明
Allocated Power (/SP/powermgmt/allocated_power)	x86 SP SPARC SP	Oracle ILOM SP インタフェースに表示される「Allocated Power」プロパティ値は、次のいずれかに割り当てられた電力 (ワット) の合計を表します。1) サーバーコンポーネントカテゴリ (CPU)、または 2) サーバーに取り付けられている個別のコンポーネント (MB_P0)。
Can be capped	x86 SP SPARC SP	サーバーコンポーネントごとに「Yes」または「No」のプロパティ値が Oracle ILOM SP Web インタフェースに表示され、そのサーバーコンポーネントに電力バジェット制限を設定できるかどうかを示します。 注記 - サーバーで電力バジェット (「Target Limit」プロパティ) がサポートされていない場合、「Can be capped」プロパティは「Power Management Allocation Plan」に表示されません。 電力バジェットの詳細は、「 Setting Power Alert Notifications and Managing System Power Usage 」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』を参照してください。

表 9 ブレードスロット電力のサマリー (CMM の電力割り当て)

「Power Metric」プロパティ (読み取り専用)	管理対象デバイス	説明
Grantable Power	CMM ブレードスロット	Oracle ILOM CMM インタフェースに表示される「Grantable Power」プロパティ値は、許可制限を超えることなく CMM が

「Power Metric」プロパティ (読み取り専用)	管理対象デバイス	説明
(/CMM/powermgmt grantable_power)		ら Oracle ブレードシャーシスロットに割り当て可能な残りの電力 (ワット) の合計を表します。
Unfilled Grant Requests	CMM ブレードスロット	Oracle ILOM CMM Web インタフェースに表示される「Unfilled Grant Requests」プロパティ値は、CMM がシャーシブレードスロットに許可するようにリクエストされている、まだ許可されていない電力 (ワット) の合計を表します。

表 10 ブレード電力許可 (CMM の電力割り当て)

「Power Metric」プロパティ	管理対象デバイス	説明
Grant Limit (/CMM/powermgmt/powerconf/ bladeslots/BL# grant_limit)	CMM ブレードスロット	Oracle ILOM CMM インタフェースに表示されるユーザー定義の「Grant Limit」プロパティ値は、CMM がブレードスロットに許可できる電力 (ワット) の最大合計を表します。 「Grant Limit」プロパティの設定手順については、「Set CMM Blade Slot Grant Limit Property」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』を参照してください。
Required Power (/CMM/powermgmt/advanced/# value)	CMM ブレードスロット	Oracle ILOM CMM インタフェースに表示される読み取り専用の「Required Power」プロパティ値は、次のいずれかに必要な電力 (ワット) の最大合計を表します。1) すべてのブレードスロット、または 2) 個別のブレードスロット。
Granted Power (/CMM/powermgmt/powerconf/ bladeslots granted_power または /CMM/powermgmt/powerconf/ bladeslots/BL# granted_power)	CMM ブレードスロット	Oracle ILOM CMM インタフェースに表示される読み取り専用の「Granted Power」プロパティ値は、CMM が次のいずれかに許可した電力 (ワット) の最大合計を表します。1) 電力をリクエストしているすべてのブレードスロット、または 2) 電力をリクエストしている個別のブレードスロット。

表 11 「Chassis Component」プロパティ (CMM のみ)

「Power Metric」プロパティ (読み取り専用)	管理対象デバイス	説明
Allocated Power (/CMM/powermgmt/ powerconf/component_type/component_name allocated_power)	CMM コンポーネント	Oracle ILOM CMM インタフェースに表示される読み取り専用の「Allocated Power」プロパティ値は、次のいずれかに割り当てられた電力 (ワット) の合計を表します。1) Oracle ブレードシャーシカテゴリ (ファン)、または 2) 取り付けられている個別のシャーシコンポーネント (ファン 0)。 注記 - Oracle ブレードシャーシ構成が I/O ブレードサーバーをサポートしている場合、Oracle ILOM はすべての I/O ブレードサーバーに予約された電力 (ワット) の最大合計も表示します。

電力割り当てコンポーネントとモニタリングの考慮事項

■ 表12「サーバー SP 電力割り当てコンポーネント」

- [表13「CMM 電力割り当てコンポーネント」](#)
- [表14「電力割り当てモニタリングの考慮事項」](#)

表 12 サーバー SP 電力割り当てコンポーネント

サーバー コンポーネント	割り当て 電力	Oracle x86 および SPARC サーバーに該当	Oracle ブレードサーバーに 該当
すべてのサーバー電力消費コンポーネント	X	X	X
CPU	X	X	X
メモリーモジュール (DIMM など)	X	X	X
I/O モジュール (HDD、PEM など) † REM*、RFEM*	X	X	X
マザーボード (Motherboard、MB)	X	X	X
電源ユニット (PSU)	X	X	該当しない ‡
ファン (FM)	X	X	該当しない ‡

† これらのサーバー関連 I/O モジュール (PEM、REM、および RFEM) は Oracle ブレードシャーシ構成にのみ該当します。

‡ これらのデバイス (PSU および FM) が Oracle ブレードシャーシに取り付けられている場合は、CIMM によって電力が割り当てられます。

表 13 CMM 電力割り当てコンポーネント

CMM コンポーネント	許可された電力 (ワット)	許可制限 (ワット)	許可可能電力 (ワット)
CMM のすべての電力消費コンポーネント (一覧表示されている電源が投入されたすべてのエンティティの集約値)	X	X	X
ブレードスロット (BL#)	X	X †	該当しない
CMM	X	該当しない	該当しない
Network Express Module (NEM)	X	該当しない	該当しない
電源ユニット (PSU)		該当しない	該当しない
ファン (FM)		該当しない	該当しない

† ブレードスロットに割り当てられる許可制限はユーザーが構成できます。

表 14 電力割り当てモニタリングの考慮事項

電力割り当てコンポーネント	Oracle ILOM の電力割り当て動作
Oracle ラックマウントサーバー	Oracle ラックマウントサーバーに割り当てられる電力は、ラックマウントシャーシコンポーネントが消費できる最大電力です。この値は、プロセッサ、メモリー、I/O、ファンで消費される最大電力 (ワット) のほか、電源装置での電力損失を表します。ラックマウントシャーシにホットプラグ可能コンポーネント用のスロットが含まれている場合、表示される「Power Allocated」プロパティ値は、ホットプラグ可能スロットに取り付け可能な、もっとも電力を消費するコンポーネントに必要な最大電力 (ワット) を表します。
Oracle ブレードサーバー	Oracle ブレードサーバーに対する電力は、ブレードサーバーが電力をリクエストしたときに、CIMM によって割り当てられます。ブレードサーバーは電源が投入されるたびに電力をリクエ

電力割り当てコンポーネント	Oracle ILOM の電力割り当て動作
Oracle 自動送電式 I/O ブレード	<p>ストし、電源が切断されるたびに CMM に電力を解放します。CMM は、許可可能電力がブレードサーバーのリクエストを満たすのに十分な場合は、ブレードサーバーに電力を割り当てます。さらに、CMM は、対応するブレードスロットに許可制限が設定されているかどうかを確認します。対応するブレードスロットに許可制限が設定されている場合は、電力 (ワット) リクエストがブレードスロットに設定されている「Grant Limit」プロパティ以下の場合にのみ、CMM はブレードサーバーに電力を割り当てます。</p>
ホットプラグ可能なシャーシコンポーネント	<p>Oracle I/O ブレードサーバーは SP によって管理されないため、I/O ブレードサーバーは CMM からの電源投入の許可を求めません。I/O ブレードサーバーが Oracle ブレードシャーシに取り付けられている場合、I/O ブレードサーバーには自動的に電源が投入されます。</p> <p>Oracle ILOM は、ホットプラグ用のシャーシスロット位置に取り付けられている既知のホットプラグ可能コンポーネントについて、割り当て済みの最大電力値を自動的に表示します。次に例を示します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ラックマウントのホットプラグ可能スロットの場合、Oracle ILOM は、ホットプラグ可能コンポーネントに必要な既知の最大電力値 (ワット) を表示します。 ■ ブレードのホットプラグ可能スロットの場合、Oracle ILOM は、ブレードシャーシスロットに取り付け可能な Oracle I/O ブレードサーバーに必要な最大電力値を表示します。ただし、ブレードシャーシが I/O ブレードサーバーをサポートしていない場合、Oracle ILOM は、CPU ブレードサーバーに必要な最大電力値 (ワット) を表示します。 <p>ラックマウントシャーシまたはブレードシャーシのどのコンポーネントやスロットがホットプラグ可能かを判定するには、Oracle サーバーまたは CMM ハードウェアのドキュメントを参照してください。</p>
シャーシコンポーネントカテゴリ	<p>同じコンポーネントの複数のインスタンスを含むシャーシコンポーネントカテゴリの場合、Oracle ILOM は、1 つのコンポーネントカテゴリ (ファン) に割り当てられた電力の合計のほか、個別のコンポーネント (ファン 0) に割り当てられた電力の合計を表示します。</p>
電源ユニット (PSU)	<p>Oracle ILOM は、コンセントと管理対象デバイスの間での電力損失を考慮するために、電源装置に自動的に電力を割り当てます。</p>

電力使用統計情報の分析

管理対象デバイスによって消費される電力を分析しやすくするために、Oracle ILOM は電力使用統計プロパティを棒グラフと表形式出力で提供します。詳細は、これらのトピックを参照してください。

- [83 ページの「移動平均電力統計のグラフおよびメトリック」](#)
- [84 ページの「電力統計の棒グラフおよびメトリックの表示」](#)

移動平均電力統計のグラフおよびメトリック

Oracle ILOM は、管理対象デバイスごとに 15 秒、30 秒、60 秒間隔で消費電力の移動平均を示す電力メトリックおよび棒グラフを提供します。これらの電力使用メトリックおよび棒グラフは、管理対象デバイスによるエネルギー消費の分析に特に役立ちます。

▼ 電力統計の棒グラフおよびメトリックの表示

1. CMM または SP の Web インタフェースから電力使用メトリックおよび棒グラフを表示するには、「Power Management」>「Statistics」をクリックします。

- 棒グラフと「Power History」テーブルに表示される電力 (ワット) 値と時間間隔を表示します。
- CMM の棒グラフの場合は、シャーシの電力使用とブレードサーバーの電力使用の間でグラフ表示を切り替えられます。

注記 - ブレードシャーシに取り付けられている I/O ブレードサーバーには、電力統計グラフは使用できません。「Power Usage Averages」テーブルに表示される電力履歴メトリックでは、ブレードシャーシに取り付けられている各 I/O ブレードサーバーに「No Data」プロパティ値が表示されます。

2. CMM CLI から 15、30、および 60 秒間隔の CMM 電力統計情報にアクセスするには、次のように入力します。

```
show /CH/VPS/history
```

注記 - 15、30、および 60 秒間隔の電力使用統計情報は、SP CLI からは使用できません。ただし、/SYS CLI レガシターゲットが管理対象サーバー SP でサポートされている場合は、/SYS/VPS/history CLI ターゲットから電力統計情報を表示できます。デフォルトでは、/SYS レガシターゲットは非表示になっています。/SYS レガシターゲットを表示するには、[35 ページの「Oracle ILOM レガシターゲットの表示または非表示」](#)を参照してください。

関連情報

- [85 ページの「電力履歴グラフおよびメトリック」](#)
- [「Setting CMM Power Grant and SP Power Limit Properties」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Setting SP Advanced Power Capping Policy to Enforce Power Limit」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Setting the CMM Power Supply Redundancy Policy」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)

電力履歴パフォーマンスの比較

管理対象デバイスの電力使用を時間の経過に沿って比較しやすくするために、Oracle ILOM は履歴統計情報を棒グラフと表形式出力で提供します。詳細は、次を参照してください。

- [85 ページの「電力履歴グラフおよびメトリック」](#)
- [85 ページの「電力履歴グラフおよびメトリックの表示」](#)

電力履歴グラフおよびメトリック

Oracle ILOM は、次の単位で最小、平均、および最大消費電力を示す履歴メトリックおよび一連の棒グラフを提供します。

- 管理対象デバイスについて 1 時間間隔
- 管理対象デバイスについて 14 日間隔
- 管理対象デバイスについて 1 分間隔で過去 1 時間
- 管理対象デバイスについて 1 時間間隔で過去 14 日間

Oracle ILOM によって表示される電力履歴メトリックおよびグラフは、管理対象デバイスの最高、平均、および最低のエネルギーパフォーマンスを比較する場合に特に役立ちます。

▼ 電力履歴グラフおよびメトリックの表示

1. CMM または SP の Web インタフェースから電力履歴メトリックおよび棒グラフを表示するには、「Power Management」>「History」をクリックします。

- SP – 1 時間間隔と 14 日間隔の間でグラフ表示を切り替えられます。

- CMM – 次のオプションをクリックしてグラフ表示を変更できます。

- **Hardware options:** シャーシの電力使用とブレードの電力使用の間で電力使用を切り替えます。

注記 - ブレードシャーシに取り付けられている I/O ブレードサーバーには、電力履歴グラフは使用できません。「Power History」テーブルに表示される電力履歴メトリックでは、ブレードシャーシに取り付けられている各 I/O ブレードサーバーに「No Data」プロパティ値が表示されます。

- **Time period:** 1 時間間隔と 14 日間隔の間で履歴を切り替えます。

- Graph series: 最小消費電力 (ワット)、平均消費電力 (ワット)、最大消費電力 (ワット) の間で一連のグラフを切り替えるか、これらのオプションの組み合わせを選択します。
2. SP または CMM の Web インタフェースから追加の電力履歴サンプルセットを表示するには、「Power History」テーブルの「Sample Set」列の下にあるリンクをクリックします:
- 「Sample Set」のリンクを使用すると、1 分間隔で過去 1 時間、または 1 時間間隔で過去 14 日間の消費電力 (ワット) を表す棒グラフを表示できます。

注記 - Oracle ILOM によって表示される電力履歴メトリックおよびグラフは、SP CLI からは使用できません。ただし、CMM CLI から次の `show` コマンドを入力して、分単位または時間単位の消費電力履歴メトリック、およびこれらのサンプルセットのタイムスタンプと電力 (ワット) を表示できます。 `show /CH/VPS/history/0 show /CH/VPS/history/0/list`

関連情報

- [83 ページの「移動平均電力統計のグラフおよびメトリック」](#)
- [「Setting CMM Power Grant and SP Power Limit Properties」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Setting SP Advanced Power Capping Policy to Enforce Power Limit」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Set CMM Power Supply Redundancy Policy」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)

Oracle ILOM 管理対象デバイスのトラブルシューティング

説明	リンク
Oracle ILOM への管理接続の確立時の問題を解決します。	■ 87 ページの「ネットワーク接続の問題: Oracle ILOM インタフェース」
管理対象システムを監視およびデバッグするために使用できるオフラインおよびオンラインのツールの一覧を確認します。	■ 88 ページの「システム動作の監視およびデバッグのためのツール」
Oracle ILOM SP 診断ツールを有効にして実行します。	■ 89 ページの「Oracle ILOM 診断ツールを有効にして実行する」

関連情報

- [「Oracle ILOM 障害管理シェルによる Oracle ハードウェア障害の管理」](#)
- [「Setting Diagnostic Tests to Run」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Suggested Resolutions for Network Connectivity Issues」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [Oracle ILOM を搭載するサーバー向け Oracle x86 サーバー診断ガイド](#)
- [Oracle サーバーまたは CMM のサービスマニュアル](#)

ネットワーク接続の問題: Oracle ILOM インタフェース

Oracle ILOM インタフェースへのネットワーク接続の確立に問題が発生している場合、推奨される解決策について次の情報を参照してください。

表 15 接続の問題のトラブルシューティング

問題	推奨される解決策
IPv6 アドレスを使用して Oracle ILOM Web インタフェースにアクセスできません。	URL 内の IPv6 アドレスが角括弧で囲まれていることを確認します。例: <code>https://[2001:db8:0:0:0:0:0:0]</code>

問題	推奨される解決策
IPv6 アドレスを使用してファイルをダウンロードできません。	URL 内の IPv6 アドレスが角括弧で囲まれていることを確認します。例: <code>load -source tftp://[2001:db8:0:0:0:0:0:0]/desktop.pkg</code>
ネットワーククライアントから IPv6 を使用して Oracle ILOM にアクセスできません。	別のサブネット上の場合、次のことを試します: <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle ILOM が (リンクローカルアドレスだけでなく) 動的または静的アドレスを持つことを確認します。 ■ ネットワーククライアントに (リンクローカルアドレスだけでなく) IPv6 アドレスが構成されていることを確認します。 <p>同じサブネットまたは別のサブネット上の場合、次のことを試します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle ILOM Web インタフェースの「Network Settings」ページ、または Oracle ILOM CLI の /SP/network/ipv6 ターゲットで、「IPv6 State」のプロパティが有効になっていることを確認します。 ■ Oracle ILOM で適切なネットワークサービスである SSH、HTTP、または HTTPS が使用可能になっていることを確認します。 <p>Web インタフェースで、「ILOM Administration」>「Connectivity」をクリックして、ネットワーク接続設定を検証および変更します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ IPv6 Ping や Traceroute などの業界標準のネットワーク診断ツールを使用して、管理対象デバイスへのネットワーク接続をテストします。 <p>Web インタフェースまたは CLI から Ping6 を実行するか、または、Oracle サービスから指示があった場合は、Oracle ILOM 制限付きシェルから <code>traceroute</code> を実行します。</p>
ネットワーククライアントから IPv4 を使用して Oracle ILOM にアクセスできません。	Oracle ILOM Web インタフェースの「Network Settings」ページ、または Oracle ILOM CLI の /SP/network ターゲットで、「State」プロパティが有効になっていることを確認します。IPv4 ネットワークの問題を診断するための推奨されるほかの方法には、次のものがあります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 物理的な管理ポート (NET MGMT) への LAN 接続が確立されていることを確認します。 ■ Oracle ILOM で適切なネットワークサービスである SSH、HTTP、または HTTPS が使用可能になっていることを確認します。Web インタフェースで、「ILOM Administration」>「Connectivity」をクリックして、ネットワーク接続設定を検証および変更します。 ■ IPv4 Ping や Traceroute などの業界標準のネットワーク診断ツールを使用して、管理対象デバイスへのネットワーク接続をテストします。 <p>Web インタフェースまたは CLI から Ping を実行するか、または、Oracle サービスから指示があった場合は、Oracle ILOM 制限付きシェルから <code>traceroute</code> を実行します。</p>
Internet Explorer 6 (IE6) Web ブラウザを使用して Oracle ILOM Web インタフェースにアクセスできません	Internet Explorer 6 ユーザーは、ブラウザをアップグレードするか、Oracle ILOM Web インタフェースで SSL を使用するためのカスタム証明書鍵をアップロードする必要があります。 カスタム SSL 証明書をアップロードする方法の手順については、「 Resolving Web Browser Security Settings 」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』を参照してください。

システム動作の監視およびデバッグのためのツール

Oracle ILOM には、サーバーの動作の検証、問題のトラブルシューティング、修復または交換保守アクションを実行するシステム管理者および Oracle 保守担当者を支援するオンラインおよびオフライン診断ツールのコレクションが用意されています。Oracle ILOM 診断ツール、それ

らの使用法、およびそれらに関する追加情報の参照先の一覧については、次の表を参照してください。

表 16 推奨される診断ツール

診断ツール	詳細は、次を参照してください。
x86 ホスト診断テスト	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「Setting Diagnostic Tests to Run」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』 ■ 90 ページの「ブート時の x86 診断の実行を有効にする」 ■ 97 ページの「x86 プロセッサ割り込みの生成: システムステータスのデバッグ」
回復不能エラーまたはシステムステータスのデバッグのための x86 プロセッサマスク不可能割り込み (NMI)	<ul style="list-style-type: none"> ■ 97 ページの「x86 プロセッサ割り込みの生成: システムステータスのデバッグ」
SPARC ホスト診断テスト	<ul style="list-style-type: none"> ■ 98 ページの「レガシー SPARC サーバー (M6, M5, T5 以前) でブート時の診断の実行を有効にする」
サービスプロセッサのスナップショットを取得するための Oracle ILOM スナップショット†	<ul style="list-style-type: none"> ■ 105 ページの「スナップショットの取得: Oracle ILOM SP の状態」
Oracle ILOM の障害管理の未解決の問題の出力	<ul style="list-style-type: none"> ■ 47 ページの「未解決の問題の管理」 ■ 111 ページの「ハードウェア障害からの保護: Oracle ILOM 障害マネージャー」
Oracle ILOM 障害管理シエール	
ホストオペレーティングシステムの管理のための Oracle ILOM CLI	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「Establishing a Host Serial Console Session to the Server」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』 <p>ホストコンソールを起動するためにサポートされる Oracle ILOM CLI ターゲットには、SP/console や HOST/console などがあります</p> <p>注記 - Oracle のマルチドメイン SPARC サーバーで、次のターゲットから、PDomain のホストコンソールセッションを開始できます。/Servers/PDomains/PDomain_/HOST/console</p>
Oracle ILOM x86 の回復タスク実行用の「Preboot」メニュー‡	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle ILOM を搭載するサーバー向け Oracle x86 サーバー診断ガイドの Oracle ILOM の問題解決に関する章

† Oracle ILOM スナップショットは、承認された Oracle の保守担当者用に設計された診断ツールです。

‡ x86 Preboot メニューは Oracle の Sun x86 サーバーでのみ使用可能です。

Oracle ILOM 診断ツールを有効にして実行する

Oracle ILOM は、管理対象デバイスの予期しないシステムパフォーマンスまたは障害のあるコンポーネントの動作の解決に役立つ診断ツールを提供します。これらのツールを使用する方法の詳細は、これらのトピックを参照してください。

- [90 ページの「ブート時の x86 診断の実行を有効にする」](#)
- [97 ページの「x86 プロセッサ割り込みの生成: システムステータスのデバッグ」](#)

- 98 ページの「レガシー SPARC サーバー (M6、M5、T5 以前) でブート時の診断の実行を有効にする」
- 101 ページの「新しい SPARC システム (M7 および T7 サーバー) でブート時の診断の実行を有効にする」
- 105 ページの「スナップショットの取得: Oracle ILOM SP の状態」

ブート時の x86 診断の実行を有効にする

Oracle ILOM では、診断を有効にして、Oracle x86 サーバー上のマザーボードコンポーネント、ハードディスクドライブ、ポート、およびスロットをテストできます。次の各セクションでは、Oracle ILOM で診断を有効にする方法に関するガイダンスを示します。

- 90 ページの「診断テストレベルの選択」
- 91 ページの「ブート時の UEFI 診断の実行を有効にする (Web)」
- 93 ページの「ブート時の PC-Check の実行を有効にする (Web)」
- 94 ページの「ブート時の UEFI 診断の実行を有効にする (CLI)」
- 96 ページの「ブート時の PC-Check の実行を有効にする (CLI)」

診断テストレベルの選択

Oracle ILOM で Oracle x86 サーバーの診断を有効にする前に、実行する診断のレベルを決定します。事前定義されたテストスイートを実行することも、オプションのリストから、実行する特定のテストを選択することもできます。次の表では、使用可能な診断レベルについて説明します。

注記 - 使用しているサーバーが PC-Check または UEFI 診断のどちらを実行しているかを調べるには、サーバー管理ガイド、または Oracle ILOM Web インタフェースの「Host Management」>「Diagnostics」ページを参照してください。

表 17 Oracle x86 サーバーの診断レベル

診断ツール	診断レベルの説明
PC-Check	<p>Disabled (デフォルト) - PC-Check はホストの起動時に診断テストを実行しません。サーバーは通常動作モードのままになります。</p> <p>Enabled - PC-Check はホストの起動時にユーザーの介入なしに、事前定義されたテストスイートを実行します。完了すると、ホストが BIOS の「Boot Device Priority」リストの次のデバイスからブートします。このモードは、はじめて現場にインストールしたときやミッションクリティカルアプリケーションのインストール前に、簡単な診断テストを実行して、システムの品質を検証するために使用します。基本 PC-Check テストの実行には通常、最大 5 分かかります。</p> <p>Extended - PC-Check はホストの起動時に包括的なテストスイートを実行します。このモードは、システムをはじめてインストールしたあと、システムを物理的に移動したあと、コン</p>

診断ツール	診断レベルの説明
	<p>ポーネントを追加したとき、および本番オペレーティングシステムおよびミッションクリティカルアプリケーションのインストール前に使用します。拡張 PC-Check テストの実行には通常、20 - 40 分かかります。</p> <p>Manual - ホストの起動時に PC-Check 診断テストメニューが表示されます。このモードを使用すると、PC-Check のメニューからテストを選択するか、または事前定義されたテストスイートを「Immediate Burn-in test」メニューから選択できます。テスト時間は選択したテストによって異なります。</p>
UEFI 診断	<p>Disabled (デフォルト) - サーバーは通常の操作モードに復帰します。診断テストは実行されません。</p> <p>Enabled - サーバーは自動的にブートし、ユーザーの介入なしで事前定義されたテストスイートを実行します。テスト出力はサービスプロセッサの <code>/var/log/uefidiag/</code> ディレクトリに記録され、Oracle ILOM の障害管理シェルで表示できます。診断テストが完了すると、システムは自動的にシャットダウンし、「Disabled」診断モードに戻ります。このモードは、はじめて現場にインストールしたときやミッションクリティカルアプリケーションのインストール前に、システムの品質を検証するためのクイックテストとして使用します。これらの基本テストには通常、システム構成に応じて 20 分から 2 時間かかります。</p> <p>Extended - サーバーは自動的にブートし、ユーザーの介入なしで包括的なテストスイートを実行します。テスト出力はサービスプロセッサの <code>/var/log/uefidiag/</code> ディレクトリに記録され、Oracle ILOM の障害管理シェルで表示できます。診断テストが完了すると、システムは自動的にシャットダウンし、「Disabled」診断モードに戻ります。このモードは、システムをはじめてインストールしたとき、システムを物理的に移動したあと、コンポーネントを追加したとき、および本番オペレーティングシステムおよびミッションクリティカルアプリケーションのインストール前に使用します。これらの拡張テストには通常、システム構成に応じて 30 分から 5 時間かかります。</p> <p>Manual - サーバーがテストの選択画面に自動的にブートします。テストの選択画面で、実行するテストを指定するか、または代わりに Esc キーを押して、UEFI シェル環境で UEFI 診断コマンドを発行できます。リモートコンソール、シリアルコンソール、または使用しているシステムに接続されたキーボード、ビデオ、およびマウスを使用して、テスト出力を表示します。テストが完了したら、診断モードを「Disabled」に手動で戻す必要があります。</p>

▼ ブート時の UEFI 診断の実行を有効にする (Web)

始める前に

- Oracle x86 システムハードウェアの問題を診断するには、Reset and Host Control (r) 役割を有効にする必要があります。
- 「Manual」モードで診断を実行することを選択した場合、または「Enabled」または「Extended」モードで診断テストの進行状況をモニタリングする場合は、次のいずれかを実行します。
 - ホストコンソールリダイレクションを開始します。
 - シリアルコンソールを設定します。
 - 使用しているシステムにキーボード、ビデオ、およびマウスを接続します。

注記 - 使用しているサーバーが PC-Check または UEFI 診断のどちらを実行しているかを調べるには、サーバー管理ガイド、または Oracle ILOM Web インタフェースの「Host Management」>「Diagnostics」ページを参照してください。

1. サーバーの電源を切ります。
 - a. Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」をクリックします。
 - b. 「Select Action」リストボックスで、「Power Off」オプションを選択してから「Save」をクリックします。
2. Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」>「Diagnostics」をクリックします。
「Diagnostics」ページが表示されます。
3. ホストサーバーで Oracle ILOM 3.2.4 またはそれ以降のリリースを実行している場合、次の手順を実行します。
 - a. 「Mode」リストボックスで、実行する診断のレベルを選択します。
診断レベルの詳細は、[90 ページの「診断テストレベルの選択」](#)を参照してください。
 - b. 「Save」をクリックします。
「Start Diagnostics」ボタンが有効になっています。
 - c. 「Start Diagnostics」をクリックします。
リモートコンソールアプリケーションからの診断の制御に関する情報メッセージが表示されます。
 - d. 「OK」をクリックして、メッセージをクリアし、診断テストを続行します。
「Manual」モードで診断テストを実行することを選択した場合は、ホストコンソールに UEFI 診断テスト選択画面が表示されます。
「Diagnostics Status」フィールドは、診断テストの進捗状況を示します。
 - e. 安全に診断テストを中断するには、「Stop Diagnostics」をクリックします。



注意 - サーバーの電源状態を変更することによって、テストの進行を中断しないでください。

4. サーバーが Oracle ILOM 3.2.1 または 3.2.2 を実行している場合、次のステップを実行します。
 - a. 「Run Diagnostics on Boot」リストボックスで、実行する診断のレベルを選択します。
診断レベルの詳細は、[90 ページの「診断テストレベルの選択」](#)を参照してください。
 - b. 「Save」をクリックします。

「Manual」モードで診断テストを実行することを選択した場合は、ホストコンソールに UEFI 診断テスト選択画面が表示されます。

- c. 「Manual」モードで UEFI 診断を実行している場合、テストが完了したあとに、診断テストレベルを「Disabled」に戻します。

診断モードを「Enabled」または「Extended」に設定する場合は、その前にサーバーを「Disabled」診断モードに戻す必要があります。

5. 「Enabled」または「Extended」モードで診断を実行することを選択した場合は、出力ファイルを表示します。

- a. Oracle ILOM コマンド行インタフェースで、`set SESSION mode=restricted` と入力し、Oracle ILOM 制限付きシェルにアクセスします。

- b. `/var/log/uefidiag` ディレクトリに移動します。

詳細は、『Oracle x86 サーバー診断、アプリケーション、およびユーティリティガイド』(http://docs.oracle.com/cd/E23161_01) を参照してください。

▼ ブート時の PC-Check の実行を有効にする (Web)

始める前に

- Oracle x86 システムハードウェアの問題を診断するには、Reset and Host Control (r) 役割を有効にする必要があります。
- 「Manual」モードで診断を実行することを選択した場合、または「Enabled」または「Extended」モードで診断テストの進行状況をモニタリングする場合は、次のいずれかを実行します。
 - ホストコンソールリダイレクションを開始します。
 - シリアルコンソールを設定します。
 - 使用しているシステムにキーボード、ビデオ、およびマウスを接続します。

1. Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」>「Diagnostics」をクリックします。

「Diagnostics」ページが表示されます。

2. 「Run Diagnostics on Boot」リストボックスで、実行する診断のレベルを選択します。

診断レベルの詳細は、90 ページの「診断テストレベルの選択」を参照してください。

3. 「Save」をクリックします。

4. サーバーの電源を再投入します。

- a. 「Host Management」>「Power Control」をクリックします。
「Server Power Control」ページが表示されます。
 - b. 「Select Action」リストボックスで、「Power Cycle」を選択してから「Save」をクリックします。
リダイレクションセッションを開始した場合は、リダイレクトされたディスプレイに最初にホスト起動メッセージが表示されたあと、診断テストの進行状況が表示されます。
 - c. ライセンス契約が表示された場合、「Enter」をクリックして続行します。
5. 「Manual」モードで診断を実行することを選択した場合は、PC-Check のメニューで「Show Results Summary」を選択して出力ファイルを表示します。
 6. 「Run Diagnostics on Boot」プロパティを「Disabled」に設定して、サーバーを通常の実行モードに戻します。
診断モードを「Enabled」または「Extended」に設定する場合は、その前にサーバーを「Disabled」診断モードに戻す必要があります。

▼ ブート時の UEFI 診断の実行を有効にする (CLI)

始める前に

- Oracle x86 システムのハードウェアの問題を診断するには、Reset and Host Control (r) 役割を有効にする必要があります。
 - 「Manual」モードで診断を実行することを選択した場合、または「Enabled」または「Extended」モードで診断テストの進行状況をモニタリングする場合は、次のいずれかを実行します。
 - ホストコンソールリダイレクションを開始します。
 - シリアルコンソールを設定します。
 - 使用しているシステムにキーボード、ビデオ、およびマウスを接続します。
リダイレクションセッションの開始方法の詳細は、「[Using Remote KVMs Consoles for Host Server Redirection](#)」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』. を参照してください。
1. Oracle ILOM CLI プロンプト (->) で、`stop/System` を入力し、サーバーの電源を切ります。
 2. `/HOST/diag` ターゲットに移動します。
`cd /HOST/diag`
 3. ホストサーバーで Oracle ILOM 3.2.4 またはそれ以降のリリースを実行している場合、次の手順を実行します。

- a. **set** コマンドを発行して、実行する診断のレベルを指定します。

```
set mode=[disabled|enabled|extended|manual]
```

診断レベルの詳細は、90 ページの「[診断テストレベルの選択](#)」を参照してください。
 - b. **start** コマンドを発行して、診断テストを開始します。

```
start /HOST/diag
```

「Manual」モードで診断テストを実行することを選択した場合は、ホストコンソールに UEFI 診断テスト選択画面が表示されます。
 - c. **show** コマンドを発行して、診断テストの進行状況を表示します。

```
show /HOST/diag status
```
4. ホストサーバーが Oracle ILOM 3.2.1 または 3.2.2 を実行している場合、次の手順を実行します。
- a. 次のコマンドを発行して、実行する診断のレベルを指定します。

```
set mode=[disabled|enabled|extended|manual]
```

診断レベルの詳細は、90 ページの「[診断テストレベルの選択](#)」を参照してください。
 - b. **show** コマンドを発行して、診断テストの進行状況を表示します。

```
show /HOST/diag status
```
 - c. **set /HOST/diag mode=disabled** と入力して、サーバーを通常の操作モードに戻します。
UEFI 診断を「Enabled」または「Extended」モードで実行していた場合、診断モードは自動的に「Disabled」にリセットされます。診断モードを「Enabled」または「Extended」に設定する場合は、その前にサーバーを「Disabled」診断モードに戻す必要があります。
5. 「Enabled」または「Extended」モードで診断を実行することを選択した場合は、出力ファイルを表示します。
- a. **set SESSION mode=restricted** と入力して、Oracle ILOM 制限付きシェルにアクセスします。
 - b. **/var/log/uefidiag** ディレクトリに移動します。
詳細は、『*Oracle x86 サーバー診断、アプリケーション、およびユーティリティーガイド*』（http://docs.oracle.com/cd/E23161_01）を参照してください。

▼ ブート時の PC-Check の実行を有効にする (CLI)

始める前に

- Oracle x86 システムのハードウェアの問題を診断するには、Reset and Host Control (r) 役割を有効にする必要があります。
- 「Manual」モードで診断を実行することを選択した場合、または「Enabled」または「Extended」モードで診断テストの進行状況をモニタリングする場合は、次のいずれかを実行します。
 - ホストコンソールリダイレクションを開始します。
 - シリアルコンソールを設定します。
 - 使用しているシステムにキーボード、ビデオ、およびマウスを接続します。
リダイレクションセッションの開始方法の詳細は、[「Using Remote KVMs Consoles for Host Server Redirection」](#) in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』. を参照してください。

1. **/HOST/diag** ターゲットに移動します。
`cd /HOST/diag`
2. Oracle ILOM CLI から、次のコマンドを入力して、実行する診断のレベルを指定します。
`set state=[disabled|enabled|extended>manual]`
診断レベルの詳細は、[90 ページの「診断テストレベルの選択」](#)を参照してください。
3. サーバーの電源を再投入します。
 - a. `stop /System` と入力します。
 - b. `start /System` と入力します。
サーバーの電源を入れると、診断テストが実行されます。
4. 「Manual」モードで診断を実行することを選択した場合は、PC-Check のメニューで「Show Results Summary」を選択して出力ファイルを表示します。
5. `set /HOST/diag state=disabled` と入力して、サーバーを通常の操作モードに戻します。
診断モードを「Enabled」または「Extended」に設定する場合は、その前にサーバーを「Disabled」診断モードに戻す必要があります。

x86 プロセッサ割り込みの生成: システムステータスのデバッグ

マスク不可能割り込み (NMI) をホストオペレーティングシステムに送信すると、ホストが応答を停止し、外部デバッガからの入力を待機します。そのため、この機能は、Oracle 保守担当者からのリクエストがあった場合にのみ使用してください。

▼ マスク不可能割り込みの生成

始める前に

- この手順を実行する前に、Oracle の保守担当者から許可を取得します。
- Oracle ILOM インタフェースから NMI を生成するには、Admin (a) 役割を有効にしておく必要があります。
- Oracle ILOM からマスク不可能割り込みを生成するための設定は、一部の Oracle サーバーではサポートされていないことがあります。



注意 - ホスト OS の構成によっては、マスク不可能割り込み (NMI) を生成すると、OS がクラッシュしたり、応答を停止したり、外部デバッガ入力を待機したりする場合があります。

- プロセッサ割り込みを生成するには、次のいずれかを行います:

- Oracle ILOM Web インタフェースから:

- a. 「Host Management」>「Diagnostics」をクリックします。
「Diagnostics」ページが表示されます。
- b. 「Generate NMI」ボタンをクリックします。
NMI がホストに送信されます。

- Oracle ILOM CLI で、次のように入力します。

```
set /HOST/diag generate_host_nmi=true
```

例:

```
-> set generate_host_nmi=true  
set ???generate_host_nmi' to ???true'
```

NMI がホストに送信されます。

レガシー SPARC サーバー (M6、M5、T5 以前) でブート時の診断の実行を有効にする

Oracle SPARC システムでは、診断モードを有効にし、トリガーと診断のレベルに加えて、診断出力の詳細レベルを指定できます。レガシー SPARC システム診断の詳細は、次のトピックを参照してください。

- [98 ページの「レガシー SPARC サーバーでホスト診断の実行を有効にする \(Web\)」](#)
- [99 ページの「レガシー SPARC サーバーでホスト診断の実行を有効にする \(CLI\)」](#)

▼ レガシー SPARC サーバーでホスト診断の実行を有効にする (Web)

始める前に

- SPARC システムで Oracle ILOM の SPARC 診断プロパティを変更するには、Reset and Host control (r) 役割が必要です。
- この手順のステップは、M6、M5、T5、および一部の以前の T シリーズサーバーなどのレガシー SPARC サーバーに適用します。

システムの電源投入時に SPARC 診断テストを実行できるようにするには、次を実行します。

1. Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」>「Diagnostics」をクリックします。
「Diagnostics」ページが表示されます。

2. 「Trigger」フィールドで、診断テストを実行する次のトリガーを 1 つまたは複数選択します。

- **Power On** — ルーチンの電源投入、電源再投入、またはリセット時に診断を実行します。

注記 - この設定は、AC 電源再投入、ハードウェア変更、またはエラーによるリセット時には適用されません。

- **HW Change** — AC 電源再投入、サーバーの上部カバーの取り外し、または FRU (現場交換可能ユニット) の交換時に診断を実行します。
- **Error Reset** — エラーによるリセット時に診断を実行します。

3. ステップ 2 で選択した各トリガーの「Level」リストボックスで、次のテストレベルのいずれかを選択します。

- **Min** — 基本診断テストスイートを実行します。

- Max - 基本診断テストスイートに加えて、広範囲なプロセッサおよびメモリーテストを実行します。
4. ステップ 2 で選択した各トリガーの「Verbosity」リストボックスで、診断出力の詳細レベルの次のオプションのいずれかを選択します。
- None - 障害が検出されないかぎり、診断の実行時に出力をシステムコンソールに表示しません。
 - Min - 診断の実行時に、限定的な出力をシステムコンソールに表示します。
 - Normal - 診断の実行時に、各テストの名前と結果を含む中程度の量の出力をシステムコンソールに表示します。
 - Max - 診断テストプロセスのステップごとに出力を表示します。
 - Debug - 診断の実行時に、テスト対象のデバイスと各テストのデバッグ出力を含む詳細なデバッグ出力をシステムコンソールに表示します。
5. 「Mode」リストボックスで、次のいずれかのオプションを選択します。
- Normal (デフォルト) - ステップ 2 で指定されたトリガーに基づき診断テストを実行します。
 - Off - ブート時に診断テストを実行するすべてのトリガーを無効にします。
6. 「Save」をクリックします。

▼ レガシー SPARC サーバーでホスト診断の実行を有効にする (CLI)

始める前に

- SPARC システムで Oracle ILOM の SPARC 診断プロパティを変更するには、Reset and Host control (r) 役割が必要です。
- この手順のステップは、M6、M5、T5、および一部の以前の T シリーズサーバーなどのレガシー SPARC サーバーに適用します。

システムの電源投入時に SPARC サーバー診断テストを実行できるようにするには、次を実行します。

注記 - マルチドメイン SPARC サーバーの CLI パスについては、次の手順で説明していません。PDomain 固有の診断を設定するには、次に示す CLI パスの先頭に `/Servers/PDomains/PDomain_n/` を追加します。

1. Oracle ILOM CLI で、`set` コマンドを発行して、テストを実行するためのホスト診断トリガーを構成します。

```
set /HOST/diag trigger=[none, power-on-reset, error-reset, all-reset]
```

ここで `trigger = [none, power-on-reset, error-reset, all-reset]`

- **none** — 診断テストを実行しません。
- **power-on-reset** — ルーチンの電源投入、電源再投入、またはリセット時に診断を実行します。

注記 - この設定は、AC 電源再投入、ハードウェア変更、またはエラーによるリセット時には適用されません。

- **error-reset** — エラーによる電源リセット時に診断を実行します。
- **all-resets** — 電源リセットが発生するたびに診断を実行します。

2. 手順 1 で指定した診断トリガーの診断テストレベルを設定します。

- **power-on-reset** または **all-resets** を指定した場合、次のように入力します。

```
set /HOST/diag power_on_level=[min, max]
```

- **error-on-reset** または **all-resets** を指定した場合、次のように入力します。

```
set /HOST/diag error_reset_level=[min, max]
```

ここで `level = [min, max]`

- **min** — 最小セットの診断を実行してシステムの健全性を部分的に検証します。
- **max** (デフォルト) — 最大セットの診断を実行してシステムの健全性を完全に検証します。

3. ステップ 1 で指定した診断トリガーの詳細出力を設定します。

- **power-on-reset** または **all-resets** を指定した場合、次のように入力します。

```
set /HOST/diag power_on_verbosity=[none, min, max, normal, debug]
```

- **error-on-reset** または **all-resets** を指定した場合、次のように入力します。

```
set /HOST/diag error_reset_verbosity=[none, min, max, normal, debug]
```

ここで `verbosity = [none, min, max, normal, debug]`

- **none** — 障害が検出されないかぎり、診断の実行中に出力をシステムコンソールに表示しません。
- **min** — 診断の実行中に、限定的な出力をシステムコンソールに出力します。
- **max** — 診断の実行中に、各テストの名前と結果を含む完全な出力をシステムコンソールに表示します。
- **normal** (デフォルト) — 診断の実行中に、中程度の量の出力をシステムコンソールに表示します。
- **debug** — 診断の実行中に、デバイスのテストと各テストのデバッグ出力を含む詳細なデバッグの出力をシステムコンソールに表示します。

4. 診断モードを次のいずれかに設定します。1) ブート時に診断テストを実行するか、または 2) ブート時の診断テストの実行を無効にします。

```
set /HOST/diag mode=[off, default]
```

ここで `mode = [off, default]`

- **off** — ステップ 1 で指定された診断テストを実行しません。
- (デフォルト) — ステップ 1 で指定された診断テストを実行します。

新しい SPARC システム (M7 および T7 サーバー) でブート時の診断の実行を有効にする

Oracle ILOM は、システム管理者が起動時にシステム診断テストを実行するかどうかを制御できるようにする一連のサーバー固有の診断プロパティを備えています。SPARC プラットフォームの診断の詳細は、次の手順を参照するか、またはプラットフォーム固有のサービスマニュアルを参照してください。

- [101 ページの「新しい SPARC システムでホスト診断の実行を有効にする \(Web\)」](#)
- [102 ページの「新しい SPARC システムでホスト診断の実行を有効にする \(CLI\)」](#)
- [104 ページの「新しい SPARC システムで SP 診断の実行を有効にする \(Web\)」](#)

▼ 新しい SPARC システムでホスト診断の実行を有効にする (Web)

始める前に

- SPARC システムで Oracle ILOM の SPARC 診断プロパティを変更するには、Reset and Host control (r) 役割が必要です。
- この手順のステップは、T7、M7、および以降の SPARC シリーズサーバーなどの新しい SPARC に適用します。
- Oracle ILOM ファームウェア 3.2.5.5 以降。

SPARC 診断テストを実行できるようにするには、次を実行します。

1. **Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」>「Diagnostics」をクリックします。**
「Diagnostics」ページが表示されます。
2. 「Diagnostics」ページで、次の各プロパティのレベルと詳細レベルを指定します。
 - **Default** — ルーチンの電源投入、電源再投入、またはリセット時に診断を実行します。

注記 - この設定は、AC 電源再投入、ハードウェア変更、またはエラーによるリセット時には適用されません。

- **HW Change** — AC 電源再投入、サーバーの上部カバーの取り外し、または FRU (現場交換可能ユニット) の交換時に診断を実行します。
- **Error Reset** — エラーによるリセット時に診断を実行します。

Levels:

レベルによって、実行する診断テストのタイプが決定します。「Level」プロパティを次のように設定できます。

- **Off** — POST を実行しません
- **Min** — 基本診断テストスイートを実行します。
- **Max** — 基本診断テストスイートに加えて、広範囲なプロセッサおよびメモリーテストを実行します。

Verbosity:

詳細レベルによって、システムコンソールに出力されるデバッグ出力の量が決まります。「Verbosity」プロパティを次のように設定できます。

- **None** — システムコンソールにデバッグ出力を表示しません。
- **Min** — 制限された量のデバッグ出力を表示します。
- **Normal** — テストの名前と結果を含む中程度の量のデバッグ出力を表示します。
- **Max** — すべての POST ステップのデバッグ出力を表示します。
- **Debug** — テスト対象のデバイス名のほか、各テストのデバッグ出力を含む広範囲量のデバッグ出力を表示します。詳細レベルによって、システムコンソールに出力されるデバッグ出力の量が決まります。「Verbosity」プロパティを次のように設定できます。

3. 「Save」をクリックします。

▼ 新しい SPARC システムでホスト診断の実行を有効にする (CLI)

始める前に

- SPARC システムで Oracle ILOM の SPARC 診断プロパティを変更するには、Reset and Host control (r) 役割が必要です。
- この手順のステップは、T7、M7、および以降の SPARC シリーズサーバーなどの新しい SPARC に適用します。
- Oracle ILOM ファームウェア 3.2.5.5 以降。

SPARC サーバー診断テストを実行できるようにするには、次を実行します。

注記 - マルチドメイン SPARC サーバーの CLI パスについては、次の手順で説明していません。PDomain 固有の診断を設定するには、次に示す CLI パスの先頭に /Servers/PDomains/PDomain_n/ を追加します。

- **set コマンドを発行して、該当するホスト診断プロパティを構成します。**

```
set /HOST/diag default_level=[off, min, max] default_verbosity=[none, min, normal,
max debug] error_level=[off, min, max] error_verbosity=[none, min, normal,max debug]
hw_change_level=[off, min, max] hw_change_verbosity=[none, min, normal, max, debug]
```

ここでは:

- **default_level** は、ルーチンの電源投入、電源再投入、またはリセット時に実行する診断テストのタイプを決定します。デフォルトで、default_level は off です。

注記 - この設定は、AC 電源再投入、ハードウェア変更、またはエラーによるリセット時には適用されません。

- **default_verbosity** は、ルーチンの電源投入時にシステムコンソールに表示されるデバッグ出力の量を決定します。デフォルトで、default_verbosity は normal です。
- **error_level** は、エラーによるリセット時に実行する診断テストのタイプを決定します。デフォルトで、error_level は max です。
- **error_verbosity** は、エラーによるリセット時にシステムコンソールに表示されるデバッグ出力の量を決定します。デフォルトで、error_verbosity は normal です。
- **hw_change_level** は、サーバーの電源再投入、サーバーの上部カバーの取り外し、または FRU (現場交換可能ユニット) の交換時に実行する診断テストのタイプを決定します。デフォルトで、hw_change_level は max です。
- **hw_change_verbosity** は、サーバーの電源再投入、サーバーの上部カバーの取り外し、または FRU (現場交換可能ユニット) の交換時に、システムコンソールに出力されるデバッグ出力の量を決定します。デフォルトで、hw_change_verbosity は normal です。

ここで level = [off, min, max]

- **off** — POST を実行しません
- **Min** — 基本診断テストスイートを実行します。

- **max** — 基本診断テストスイートに加えて、広範囲なプロセッサおよびメモリーテストを実行します。

ここで verbosity= [none, min, normal, max, debug]

- **none** — システムコンソールにデバッグ出力を表示しません。
- **min** — 制限された量のデバッグ出力を表示します。
- **normal** — テストの名前と結果を含む中程度の量のデバッグ出力を表示します。
- **max** — すべての POST ステップのデバッグ出力を表示します。
- **debug** — テスト対象のデバイス名のほか、各テストのデバッグ出力を含む広範囲の量のデバッグ出力を表示します。

プロパティの詳細は、**help /Host/diag** と入力します。

▼ 新しい SPARC システムで SP 診断の実行を有効にする (Web)

始める前に

- SPARC システムで Oracle ILOM の SPARC 診断プロパティを変更するには、Reset and Host control (r) 役割が必要です。
- この手順のステップは、T7、M7、および以降の SPARC シリーズサーバーなどの新しい SPARC に適用します。
- Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.2.5.5 以降。

SPARC 診断テストを実行できるようにするには、次を実行します。

1. SP 診断プロパティに移動します。

■ Web:

Oracle ILOM Web インタフェースで、「System Management」>「Diagnostics」をクリックします。

「Diagnostics」ページが表示されます。

■ CLI

CLI では、**cd /SP/diag** と入力します。

2. 次のいずれかを実行します。

■ Web:

「Diagnostics」ページで、次のプロパティを構成し、「Save」をクリックします。

- **Default Level** [Off (default), Min, or Max] — ルーチンサーバーの電源再投入 (電源オフ/オン) またはサーバーリセット時の適切な診断動作を指定します。

注記 - POST Default Level プロパティは、エラーによるリセットまたはハードウェア変更時に適用されません。

- **HW Change** [*Off, Min, or Max (default)*] — サーバーの電源コードサイクル、サーバーの上部カバーの取り外し、または FRU (現場交換可能ユニット) の交換時の適切な診断動作を指定します。
-

注記 - サーバーの電源コードサイクルとは、電源コードが取り外されるか、交換されるか、またはサーバーに電源が最初に適用されたときを表します。

ここでは: [*Off, Min, and Max*]

- **Off** — POST を実行しません
- **Min** — 基本診断テストスイートを実行します。
- **Max** — 基本診断テストスイートに加えて、広範囲なプロセッサおよびメモリーテストを実行します。

■ CLI:

CLI で、`set` コマンドを発行して、該当するホスト診断プロパティを構成します。

```
set default_level=[off, min, max] hw_change=[off, min, max]
```

プロパティの詳細は、`help /sp/diag` と入力します。

スナップショットの取得: Oracle ILOM SP の状態



注意 - Oracle ILOM スナップショット機能の目的は、Oracle の保守担当者がシステムの問題の診断に使用するデータを収集することです。お客様は、Oracle の保守担当者からリクエストがないかぎり、このユーティリティーを実行しないでください。

Oracle ILOM のスナップショット機能は、サービスプロセッサ (SP) またはシャーシモニタリングモジュール (CMM) の現在の状態に関する情報を収集できます。この情報には、環境データ、ログ、サーバーにインストールされている現場交換可能ユニットに関する情報を含めることができます。さらに、スナップショットを使用してホストで診断を実行し、診断ログファイルを取得できます。

スナップショットからの出力は標準 zip ファイルまたは指定した場所に暗号化された zip ファイルとして保存されます。

スナップショット機能を使用するには、次の手順を参照してください。

- 106 ページの「Oracle ILOM SP 状態のスナップショットの取得 (Web)」
- 107 ページの「Oracle ILOM SP 状態のスナップショットの取得 (CLI)」
- 109 ページの「暗号化されたスナップショットの出力ファイルの復号化」

▼ Oracle ILOM SP 状態のスナップショットの取得 (Web)

始める前に

- スナップショット機能を使用して SP または CMM データを収集するには、Admin (a) の役割が必要です。



注意 - Oracle ILOM スナップショット機能の目的は、Oracle の保守担当者がシステムの問題の診断に使用するデータを収集することです。お客様は、Oracle の保守担当者からリクエストがないかぎり、このユーティリティーを実行しないでください。

1. **Oracle ILOM Web インタフェースで、ILOM 「Administration」>「Maintenance」>「Snapshot」の順にクリックします。**
「Snapshot」ページが表示されます。
2. **「Data Set」リストボックスで、次のいずれかのオプションを選択します。**
 - Normal - Oracle ILOM、ホストオペレーティングシステム、およびハードウェア構成に関する情報を収集します。
 - FRUID - Normal について収集されるデータセットに加えて、取り付けられている FRU に関する情報を収集します。FRUID オプションにより、Oracle の保守担当者は FRU に関するバイナリ形式のデータを分析できます。
 - Full (ホストをリセットすることがある) - ホストから最大量のデータを収集し、ホストで診断を開始します。このオプションによって、サーバーがリセットされることがあります。
 - Custom - 次のうち取得するデータセットを指定します。
 - Oracle ILOM データ
 - ハードウェアデータ
 - 診断データ

注記 - このオプションは、ホストのリセットが必要になる場合があります。

- 基本的な OS データ
 - FRUID データ
3. **次の出力プロパティを構成します。**

- **Collect Only Log Files From Data Set** - ログファイルのみを収集するには、このオプションを有効 (選択) にします。ログファイルと SP または CMM の状態に関する追加の情報を取得するには、このオプションを無効 (選択解除) にします。
- **Encrypt Output File** - 出力ファイルを暗号化するには、このオプションを有効 (選択) にします。暗号化が有効にされている場合、暗号化パスフレーズの入力を求められます。暗号化された出力ファイルを復号化するには、パスフレーズを知っている必要があります。暗号化されていない出力ファイルを生成するには、このオプションの選択を解除します。暗号化された出力ファイルを復号化するには、[109 ページの「暗号化されたスナップショットの出力ファイルの復号化」](#)を参照してください。

4. 「Transfer Method」リストボックスで、次のいずれかのオプションを選択します。

注記 - Oracle ILOM ファームウェア 3.2.5 現在、FTPS、TFTP、および HTTPS のプロトコルのサポートが追加されました。

- **Browser** - ブラウザウィンドウ内の出力先を指定します。
- **SFTP** - SFTP ホスト、ホストでのユーザー名とパスワード、出力ファイルの宛先を指定します。
- **FTP** - FTP ホスト、ホストでのユーザー名とパスワード、出力ファイルの宛先を指定します。
- **FTPS** - FTP ホスト、ホストでのユーザー名とパスワード、出力ファイルの宛先を指定します。
- **TFTP** - TFTP ホストおよび出力ファイルの宛先を指定します。
- **HTTP** - HTTP ホスト、ホストでのユーザー名とパスワード、出力ファイルの宛先を指定します。
- **HTTPS** - HTTPS ホスト、ホストでのユーザー名とパスワード、出力ファイルの宛先を指定します。

5. 「Run」をクリックします。

スナップショットが完了すると、出力ファイルの保存を求める「Save As」ダイアログボックスが表示されます。

6. 「Save As」ダイアログボックスで、出力ディレクトリを指定して「OK」をクリックします。

▼ Oracle ILOM SP 状態のスナップショットの取得 (CLI)



注意 - Oracle ILOM サービススナップショットユーティリティの目的は、Oracle の保守担当者がシステムの問題の診断に使用するデータを収集することです。お客様は、Oracle の保守担当者からリクエストがないかぎり、このユーティリティを実行しないでください。

始める前に

- スナップショット機能を使用して SP または CMM データを収集するには、Admin (a) の役割が必要です。

1. Oracle ILOM CLI から、次のコマンドを発行して、スナップショットユーティリティーで収集するデータの種類の種類を指定します。

```
set /SP/diag/snapshot dataset=value
```

ここで、*value* は次のいずれかを指定できます。

- *normal* – Oracle ILOM、ホストオペレーティングシステム、およびハードウェア構成に関する情報を収集します。
- *normal-logonly* – ログファイルだけを収集します。
- *FRUID* – Normal について収集されるデータセットに加えて、取り付けられている FRU に関する情報も収集します。
- *fruid-logonly* – ログファイルだけを収集します。
- *full* – サーバーに関する最大限の情報を収集します。このオプションによって、サーバーがリセットされることがあります。
- *full-logonly* – ログファイルだけを収集します。

2. スナップショットデータを暗号化するかどうかを指定するには、次のように入力します。

```
set /SP/diag/snapshot encrypt_output=[true|false]
```

注記 - *encrypt_output* プロパティが *true* に設定されている場合、データ収集を開始するには、プロンプトに暗号化パスワードを入力する必要があります。その後、出力ファイルを復号化するには、プロンプトで暗号化パスワードを入力する必要があります。暗号化された出力ファイルを復号化するには、[109 ページの「暗号化されたスナップショットの出力ファイルの復号化」](#)を参照してください。

3. データ収集を開始するには、次のように入力します。

```
set /SP/diag/snapshot dump_uri=protocol://username:password@host/directory
```

ここで転送 *protocol* は *sftp* または *ftp* のいずれかです。

たとえば、ホスト上で *data* という名前のディレクトリに *ftp* 経由でスナップショット情報を格納するには、次のように入力します。

```
set /SP/diag/snapshot dump_uri=ftp://username:mypasswd@host-ip-address/data
```

注記 - *directory* はユーザーのログインに相対的であるため、前の例で、*data* のフルパスは */home/username/data* などになります。

▼ 暗号化されたスナップショットの出力ファイルの復号化

1. `openssl` コマンドをサポートしている端末ウィンドウを使用して、スナップショット出力ファイルを格納するディレクトリに移動します。
2. 復号化コマンドを発行します。

- ホストサーバーで Oracle ILOM 3.2.4 またはそれ以降のリリースを実行している場合は、次のように入力します。

```
openssl aes-128-cbc -d -md sha1 -in encryptedSnapshotFilename.zip.e -out  
snapshotFilename.zip
```

- ホストサーバーで Oracle ILOM 3.2.1 または 3.2.2 を実行している場合は、次のように入力します。

```
openssl aes-128-cbc -d -in encryptedSnapshotFilename.zip.e -out  
snapshotFilename.zip
```

3. プロンプトが表示されたら、暗号化パスワードを入力します。

Oracle ILOM 障害管理シェルによる Oracle ハードウェア障害の管理

説明	リンク
ハードウェア障害の通知、修正アクション、および障害の自動クリアについて学習します。	■ 111 ページの「ハードウェア障害からの保護: Oracle ILOM 障害マネージャー」
Oracle ILOM 障害管理シェルから障害管理コマンドを起動して実行します。	■ 113 ページの「Oracle ILOM 障害管理シェル」 ■ 115 ページの「fmadm を使用したアクティブな Oracle ハードウェア障害の管理」 ■ 116 ページの「障害のあるアクティブなコンポーネントについての情報の表示 (fmadm faulty)」 ■ 119 ページの「fmdump を使用した障害管理履歴ログの表示」 ■ 121 ページの「fmstat を使用した障害管理統計レポートの表示」

関連情報

- [Oracle ILOM を搭載するサーバー向け Oracle x86 サーバー診断ガイド](#)
- [Oracle サーバーのサービスマニュアル](#)

ハードウェア障害からの保護: Oracle ILOM 障害マネージャー

Oracle ILOM の障害マネージャーは、Oracle ILOM 管理対象デバイス上で発生する可能性がある問題に役立てることを目的としています。たとえば、障害マネージャーはエラーを検出して解釈し、管理対象システムに障害や欠陥が存在するかどうかを判断します。判断が下されると、障害マネージャーは、問題の原因となっている可能性があるハードウェアコンポーネントの一覧を発行します。

デバイスでハードウェア障害が検出されたときに Oracle ILOM によって稼働時間を延ばすための方法の詳細は、次を参照してください。

- [112 ページの「ハードウェア障害通知」](#)

- [112 ページの「ハードウェア障害の修正アクション」](#)
- [112 ページの「障害イベントのクリア: 修復されたハードウェア」](#)

ハードウェア障害通知

ハードウェアの障害または欠陥が診断されたことを示す通知が、Oracle ILOM インタフェースから表示できる「Open Problems」表出力に表示されます。「Open Problems」出力で提供されるハードウェア障害通知に加えて、障害マネージャーはイベントログおよび障害管理ログにもイベントメッセージを記録します。ユーザーは Oracle ILOM インタフェースからイベントログを表示できます。Oracle の保守担当者は Oracle ILOM 障害管理シェルから障害管理ログを表示できます。

注記 - Simple Network Management Protocol (SNMP) または Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) を使用することによって、障害イベントの通知を構成することも可能です。SNMP 構成の詳細は、「[Configuring SNMP Settings in Oracle ILOM](#)」 in 『[Oracle ILOM Protocol Management Reference for SNMP and IPMI](#)』を参照してください。SMTP 構成の詳細は、「[Configure SMTP Client for Email Alerts](#)」 in 『[Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x](#)』を参照してください。

ハードウェア障害の修正アクション

診断された問題についての通知を受けたら、必ず推奨されるナレッジ記事で詳細を確認してください。「Open Problems」出力内のイベント通知とログファイル内のイベントメッセージには、推奨されるナレッジ記事への [http://](#) 参照が提供されています。

障害イベントのクリア: 修復されたハードウェア

Oracle ILOM の障害イベントと通知は、修復または交換されたリソースが現場交換可能ユニット (FRU) に関連付けられたときに自動的にクリアされます。ただし、修復または交換されたリソースが FRU に関連付けられていない場合、Oracle ILOM は変更を検出できないため、「Open Problems」出力またはログファイル内の障害イベント通知は自動的にクリアされません。Oracle ILOM での検出されない修復または交換についての障害イベントのクリアについては、[116 ページの「修復または交換についての障害のクリア」](#)を参照してください。

Oracle ILOM 障害管理シェル

Oracle ILOM 障害管理シェルを使用すると、Oracle の保守担当者は管理対象デバイス上の障害動作を表示および管理できます。

Oracle ILOM 障害管理シェルを使用する方法の詳細は、これらのトピックを参照してください。

- [113 ページの「障害管理の用語」](#)
- [114 ページの「障害管理シェルセッションの起動 \(CLI\)」](#)



注意 - Oracle ILOM 障害管理シェルの目的は、Oracle の保守担当者がシステムの問題を診断しやすくすることです。お客様は、Oracle の保守担当者からリクエストがないかぎり、このシェルを起動したり、シェルで障害管理コマンドを実行したりしないでください。

障害管理の用語

用語	説明
予防自己修復	予防自己修復とは、ソフトウェアとハードウェアの障害条件の診断、レポート、および処理を自動的に行うための障害管理アーキテクチャーおよび手法です。予防的自己修復によって、ハードウェアまたはソフトウェアの問題をデバッグするために必要な時間が削減され、各障害の詳細データがシステム管理者または Oracle の保守担当者に提供されます。このアーキテクチャーは、イベント管理プロトコル、障害マネージャー、障害処理エージェント、および診断エンジンで構成されます。
診断エンジン	Oracle ILOM の障害管理アーキテクチャーには、検出されたシステムエラーについての障害イベントをブロードキャストする診断エンジンが含まれています。Oracle ILOM の障害管理アーキテクチャーでサポートされる診断エンジンのリストについては、 122 ページの「fmstat レポートの例および説明」 を参照してください。
健全性の状態	Oracle ILOM は、遠隔測定情報を受信した各リソースに、次の健全性状態を関連付けます。Oracle ILOM インタフェースに表示される可能性のある状態は、次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ok - ハードウェアリソースはシャーン内に存在して使用中です。既知の問題は検出されていません。 ■ unknown - ハードウェアリソースは存在しないか使用できませんが、既知の問題は検出されていません。この管理状態は、疑わしいリソースがシステム管理者によって無効にされていることを示している可能性があります。 ■ faulted - ハードウェアリソースはシャーン内に存在しますが、1 つ以上の問題が検出されたため使用できません。システムに対する追加の損害を回避するために、ハードウェアリソースは無効 (オフライン) にされています。 ■ degraded - ハードウェアリソースは存在して使用できますが、1 つ以上の問題が検出されています。影響を受けるすべてのハードウェアリソースが同じ状態の

用語	説明
	場合、このステータスはそのリストの末尾のイベントメッセージに反映されます。それ以外の場合、影響を受けるリソースごとに別の健全性状態が表示されます。
障害	障害とは、ハードウェアコンポーネントが存在するが、Oracle ILOM 障害マネージャーによって 1 つ以上の問題が診断されたために使用できないか機能が低下していることを示します。システムに対する追加の損害を回避するために、コンポーネントは無効にされています。
管理対象デバイス	管理対象デバイスには、Oracle ラックマウントサーバー、ブレードサーバー、またはブレードシャーシなどがあります。
FRU	FRU は現場交換可能ユニット (ドライブ、メモリー DIMM、プリント回路基板など) です。
CRU	CRU は顧客交換可能ユニット (Oracle ブレードシャーシの NEM など) です。
汎用一意識別子 (UUID)	UUID は、任意のシステムのセット全体で問題を一意に識別するために使用されます。

▼ 障害管理シェルセッションの起動 (CLI)

始める前に

- Oracle ハードウェアユーザーはこの手順を実行する前に、Oracle の保守担当者から許可を求めてください。
- Oracle ILOM CLI から障害管理シェルを起動するには、Admin (a) 役割権限が必要です。

Oracle ILOM CLI から Oracle ILOM 障害管理シェルを起動するには、次を実行します。

1. Oracle ILOM CLI から次のコマンドを入力して、Oracle ILOM 障害管理シェルを起動します。

```
start /SP|CMM/faultmgmt/shell
```

次のいずれかの障害管理シェルコマンドプロンプトが表示されます:

- Oracle SP 管理対象デバイスの場合は `faultmgmtsp>` と表示されます。
- Oracle CMM 管理対象デバイスの場合は `faultmgmtcmm>` と表示されます。

注記 - 障害管理シェルを起動したあと、障害管理シェルを終了するまでは、障害管理シェルに固有のコマンドのみを実行できます。

2. 次のいずれかの障害管理シェルコマンドを実行します。

- `fmadm` - 障害のあるコンポーネントを表示するか、検出されない修復または交換についての障害をクリアします。詳細は、115 ページの「[fmadm を使用したアクティブな Oracle ハードウェア障害の管理](#)」を参照してください。

- `fmdump` – 障害管理アクティビティの履歴を表示します。詳細は、119 ページの「[fmdump を使用した障害管理履歴ログの表示](#)」を参照してください。
- `fmstat` – 障害管理操作の統計レポートを表示します。詳細は、121 ページの「[fmstat を使用した障害管理統計レポートの表示](#)」を参照してください。

3. 障害管理シェルコマンドのヘルプ情報を表示するには、次のように入力します。

`help command`

ここで `command` は次のいずれかを指定できます。

- `fmadm`
- `fmdump`
- `fmstat`

4. 障害管理シェルを終了するには、`faultmgmt` プロンプトで次のように入力します。

`exit`

注記 - 標準の Oracle ILOM CLI コマンドを発行するには、まず障害管理シェルを終了する必要があります。

関連情報

- 115 ページの「[fmadm を使用したアクティブな Oracle ハードウェア障害の管理](#)」
- 119 ページの「[fmdump を使用した障害管理履歴ログの表示](#)」
- 121 ページの「[fmstat を使用した障害管理統計レポートの表示](#)」

fmadm を使用したアクティブな Oracle ハードウェア障害の管理

Oracle ILOM 障害マネージャーによって従来より管理されているアクティブな Oracle ハードウェア障害を表示および管理するには、障害管理シェルの `fmadm` ユーティリティを使用します。`fmadm` ユーティリティを使用して障害動作を表示および管理する方法の詳細は、これらのトピックを参照してください。

- 116 ページの「[障害のあるアクティブなコンポーネントについての情報の表示 \(fmadm faulty\)](#)」
- 116 ページの「[修復または交換についての障害のクリア](#)」

▼ 障害のあるアクティブなコンポーネントについての情報の表示 (fmadm faulty)

注記 - Oracle ハードウェアのユーザーが、障害のあるコンポーネントに関するアクティブな情報を表示するための推奨される方法は、Oracle ILOM の CLI および Web インタフェースで提供されている「Open Problems」表出力でコンポーネントの健全性状態を表示する方法です。

障害のあるアクティブなコンポーネントについての情報を Oracle ILOM 障害管理シェルから表示するには、次を実行します。

1. Oracle ILOM CLI から、[114 ページの「障害管理シェルセッションの起動 \(CLI\)」](#)の説明に従って、障害管理シェルを起動します。
faultmgmtsp> または faultmgmtcmm> プロンプトが表示されます。
2. 管理対象デバイスについて報告された、障害のあるアクティブなハードウェアコンポーネントについての情報を表示するには、次のように入力します。
fmadm faulty display_option
ここで、*display_option* は次のいずれかにできます。
 - -a - アクティブで障害のあるコンポーネントを表示します。
 - -f - アクティブで障害のある FRU を表示します。
 - -r - アクティブで障害のある FRU と、それらの障害管理状態を表示します。
 - -s - 障害イベントごとに障害のサマリーが 1 行で表示されます。
 - -u *uuid* - 特定の汎用一意識別子 (*uuid*) に一致する障害診断イベントを表示します。
3. 該当する場合、報告された問題を解決するための追加の指示については、fmadm faulty 出力内にある [http://](#) で参照されるナレッジ記事を参照してください。

関連情報

- [113 ページの「障害管理の用語」](#)
- [118 ページの「交換または修復された未検出のハードウェアコンポーネントについての障害のクリア」](#)
- [47 ページの「未解決の問題の管理」](#)

修復または交換についての障害のクリア

管理対象デバイスの障害のあるコンポーネントを交換するか修復すると、Oracle ILOM 障害マネージャーが修復や交換を自動的に検出し、関連付けられた障害メッセージをシステムからク

リアします。ただし、交換または修復されたハードウェアコンポーネントが FRU シリアル番号に関連付けられていない場合、修正保守アクションは Oracle ILOM によって検出されず、検出されない修復に関連付けられた障害イベントメッセージは Oracle ILOM インタフェースからクリアされません。

注記 - Oracle ILOM 障害マネージャーは、Oracle ブレードシャーシの顧客交換可能ユニット (CRU) 用の修復または交換の保守アクションを検出できません。

Oracle の保守担当者からの許可があれば、ユーザーは Oracle ILOM 障害管理シェルから `fmadm` 修復コマンドを実行して、検出されていない修復または交換の保守アクションについての障害メッセージを手動でクリアできます。詳細は、これらのトピックを参照してください。

- [117 ページの「fmadm コマンドの使用法と構文」](#)
- [118 ページの「交換または修復された未検出のハードウェアコンポーネントについての障害のクリア」](#)

fmadm コマンドの使用法と構文

fmadm 修復コマンド	用途:
<code>acquit [fru/cru]</code>	<p>Oracle ILOM Fault Manager に、指定された障害のあるコンポーネントが、検出されたどの障害イベントでも疑わしいとは見なされないことを通知します。<code>fmadm acquit</code> コマンドは、ドキュメントに記載されている Oracle ハードウェア修復手順で指示された場合にのみ使用するようにしてください。</p> <p>構文の例:</p> <p>ラックマウントサーバーのシャーシ内の疑わしいファンモジュールを無視するよう障害マネージャーに指示するには、次のように入力します。</p> <p>fmadm acquit /SYS/FANBD/FM1</p>
<code>acquit uuid</code>	<p><code>uuid</code> リソースによって識別される障害イベントを無視しても問題がないことを Oracle ILOM 障害マネージャーに通知します。<code>fmadm acquit</code> コマンドは、ドキュメントに記載されている Oracle ハードウェア修復手順で指示された場合にのみ使用するようにしてください。</p> <p>構文の例:</p> <p>6d76a0f4-b5f5-623c-af8b-9d7b53812ea1 によって識別されるイベントを無視するよう障害マネージャーに指示するには、次のように入力します。</p> <p>fmadm acquit 6d76a0f4-b5f5-623c-af8b-9d7b53812ea1</p>
<code>repaired [fru/cru]</code>	<p>指定された現場交換可能ユニットまたは顧客交換可能ユニットが修復されたことを Oracle ILOM の障害マネージャーに通知します。<code>fmadm repaired</code> コマンドは、Oracle ILOM 障害マネージャーが、修復された FRU を検出できない場合に使用するようにしてください。</p> <p>構文の例:</p> <p>ラックマウントサーバーのシャーシ内のファンモジュールが修復されたことを障害マネージャーに通知するには、次のように入力します。</p>

fmadm 修復コマンド	用途:
	<code>fmadm repaired /SYS/FANBD/FM\bar{n}</code>
<code>replaced [fru cru]</code>	指定された障害の発生した現場交換可能ユニットまたは顧客交換可能ユニットが交換されたことを Oracle ILOM 障害マネージャーに通知します。このコマンドは、Oracle ILOM 障害マネージャーが交換を検出できない場合に使用するようになっています。
	構文の例:
	ラックマウントサーバーのシャーシ内のファンモジュールが交換されたことを障害マネージャーに通知するには、次のように入力します。
	<code>fmadm replaced /SYS/FANBD/FM\bar{n}</code>

▼ 交換または修復された未検出のハードウェアコンポーネントについての障害のクリア

始める前に

- Oracle ハードウェアユーザーはこの手順を実行する前に、Oracle の保守担当者から許可を求めてください。
- [117 ページの「fmadm コマンドの使用法と構文」](#)を確認します。
- 障害のあるコンポーネントに必要な修正保守アクションが完了する前に障害イベントがクリアされた場合、Oracle ILOM 障害マネージャーは障害を診断し、その障害イベントを、Oracle ILOM の「Open Problems」テーブルと Oracle ILOM 障害管理ログファイルに再度表示します。

検出されないハードウェアの修復または交換についての障害を Oracle ILOM 障害管理シェルからクリアするには、次を実行します。

1. Oracle ILOM CLI から、[114 ページの「障害管理シェルセッションの起動 \(CLI\)」](#)の説明に従って、障害管理シェルを起動します。
`faultmgmtsp>` または `faultmgmtcmm>` プロンプトが表示されます。
2. 疑わしいアクティブなコンポーネントを特定して情報を表示します。
 詳細は、[116 ページの「障害のあるアクティブなコンポーネントについての情報の表示 \(fmadm faulty\)」](#)を参照してください。
3. 次のいずれかの `fmadm` コマンドを入力して、障害を手動でクリアします。
 - `fmadm replaced [fru|cru]` – 疑わしいコンポーネントが置換されるか取り外されました。
 - `fmadm repaired [fru|cru]` – 疑わしいコンポーネントが物理的に修復され、報告されていた問題が解決しました。たとえば、コンポーネントが再設置されたり、曲がったピンが修理されたりしました。
 - `fmadm acquit [fru|cru] [uuid]` – 疑わしいコンポーネントまたは `uuid` リソースは問題の原因ではありません。

[fru/cru] [uuid] と表示されている場所には、疑わしいシャーシ FRU または CRU へのシステムパスを入力するか、問題で報告されたリソースに関連付けられた汎用一意識別子 (uuid) を入力します。

注記 - 交換は修復よりも優先され、交換と修復は赦免よりも優先されます。したがって、コンポーネントを赦免したあとで修復することはできませんが、すでに修復されたコンポーネントを赦免することはできません。

構文の説明および例については、117 ページの「[fmadm コマンドの使用法と構文](#)」を参照してください。

4. 最後に実行した障害管理コマンドの終了コードを表示するには、次のように入力します。

```
echo $?
```

次のいずれかの echo コードが表示されます。

コード	説明
0	正常に完了しました。
1	エラーが発生しました。エラーには、Oracle ILOM との通信の失敗や、要求された操作を実行するための権限の不足などがあります。

関連情報

- [113 ページの「障害管理の用語」](#)
- [116 ページの「障害のあるアクティブなコンポーネントについての情報の表示 \(fmadm faulty\)」](#)
- [47 ページの「未解決の問題の管理」](#)

fmdump を使用した障害管理履歴ログの表示

Oracle ILOM 障害マネージャーでは、システムの問題についての履歴情報を 2 セットのログファイルに保持し、Oracle の保守担当者が使用できるようにします。ログファイルのセットは、アクティブなシステムイベントといくつかの古いシステムイベントによって構成されることがあります。

- [120 ページの「ログファイル表示コマンドおよびログの説明」](#)
- [120 ページの「障害管理ログファイルの表示 \(fmdump\)」](#)

ログファイル表示コマンドおよびログの説明

表示コマンド	ターゲットログ	説明
fmdump	障害ログ	障害管理障害ログは人間が読み取り可能な障害診断情報と障害の兆候に関連する問題を記録します。 記録されたイベントごとにタイムスタンプと説明が示されます。
fmdump -e	エラーログ	障害管理エラーログは、エラーの遠隔測定と、システムによって検出された問題の兆候を記録します。記録された問題ごとに、次の情報が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 問題が検出されたタイムスタンプ。 ■ 任意のシステムのセット全体で特定の問題を一意に識別する汎用一意識別子 (UUID)。 ■ Oracle サポート Web サイトに送信された対応するナレッジ記事にアクセスする <code>http:// 識別子</code>。



注意 - 管理保守アクションは、障害管理ログファイルの内容ではなく、アクティブな `fmadm faulty` 出力に基づくようにしてください。障害管理ログファイルに含まれているのは履歴イベントであるため、ログファイル内の障害および欠陥に関する情報がアクティブであると見なさないでください。

▼ 障害管理ログファイルの表示 (fmdump)

始める前に

- Oracle ハードウェアユーザーはこの手順を実行する前に、Oracle の保守担当者から許可を求めてください。
- [120 ページの「ログファイル表示コマンドおよびログの説明」](#)を確認します。

障害管理ログファイルを Oracle ILOM 障害管理シェルから表示するには、次を実行します。

1. Oracle ILOM CLI から、[114 ページの「障害管理シェルセッションの起動 \(CLI\)」](#)の説明に従って、障害管理シェルを起動します。
`faultmgmtsp>` または `faultmgmtcmm>` プロンプトが表示されます。
2. 障害管理ログファイルセット内の内容を表示するには、次のいずれかの `fmdump` コマンドを入力します。
 - `fmdump` – 障害ログを表示します。
 - `fmdump -u uuid`– 特定の汎用一意識別子 (`uuid`) についての障害ログを表示します。

- `fmddump -e` - エラーログを表示します。

注記 - 障害ログの場合、`fmddump` によって表示されるのは今までに診断されたすべての問題であり、診断されたアクティブな問題に限らないことを理解しておくことが特に重要です。アクティブな障害のみを表示するには、`fmddm faulty` コマンドを実行します。

3. ログ表示をローテーションするには、次のいずれかを実行します。

- 障害ログ表示をローテーションするには、次のように入力します:

```
fmddm rotate fltlog
```

- エラーログ表示をローテーションするには、次のように入力します。

```
fmddm rotate errlog
```

4. 最後に実行した障害管理コマンドの終了コードを表示するには、次のように入力します。

```
echo $?
```

次のいずれかの echo コードが表示されます。

コード	説明
0	正常に完了しました。ログファイル内のすべてのレコードが正常に検査されました。
1	無効なコマンド行オプションが指定されました。

関連情報

- [113 ページの「障害管理の用語」](#)
- [116 ページの「障害のあるアクティブなコンポーネントについての情報の表示 \(fmddm faulty\)」](#)
- [47 ページの「未解決の問題の管理」](#)

fmstat を使用した障害管理統計レポートの表示

Oracle ILOM 障害マネージャーは、障害管理処理に参加している診断エンジンおよびエージェントに関する表示可能な統計レポートを管理します。このレポートの詳細は、次を参照してください。

- [122 ページの「fmstat レポートの例および説明」](#)
- [123 ページの「障害管理統計レポートの表示 \(fmstat\)」](#)

fmstat レポートの例および説明

- [122 ページの「fmstat レポートの例」](#)
- [122 ページの「fmstat レポートプロパティの説明」](#)

fmstat レポートの例

```

faultmgmtsp> fmstat
fdd statistics      2011-02-03/19:12:51

engine              status   evts_in  evts_out  errors
repair              empty    8        0        0
hysteresis          empty    0        0        0
SERD                empty    0        0        0
simple               empty    12       0        0
    
```

fmstat レポートプロパティの説明

プロパティ	説明
engine	<p>fmstat 表出力の engine 列は、診断エンジンの名前を識別します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ repair – 指定した ereport が記録された場合、障害は修復済みと見なすようにすることを示す規則。たとえば、ereport.chassis.boot.power-off-requested@system が記録された場合、fault.chassis.power.inadequate@sys という障害は修復済みと見なされます。 ■ hysteresis – ereport A (開始) が記録され、そのあと、指定した時間内に B (キャンセル) が記録されない場合、障害と診断する規則。開始/キャンセル間の時間制限は 10 秒以下です。 たとえば、ereport.fan.speed-low-asserted が記録された 13 秒後に ereport.fan.speed-low-deasserted が記録されると、障害として診断されます。 ■ SERD – 複数出現した ereport の追跡には Soft Error Rate Discrimination (SERD) が使用されます。N を超える数の ereports が期間 T 以内に出現した場合、障害と診断されます。たとえば、指定した期間内に記録された修正可能なメモリーエラーの ereport が多すぎる場合、DIMM 障害と診断されます。 ■ simple – 1 つの ereport で複数の障害の診断を出力できる規則。たとえば、修正不可能なメモリーエラーに関する 1 つの ereport は、1 つの DIMM ペアの 2 つの DIMM に関する障害診断となる可能性があります。
status	<p>fmstat 表出力の status 列は診断エンジンの現在の状態を識別し、uninit、empty、enqueued、busy、または exiting が含まれることがあります。</p>
evts_in	<p>fmstat 表出力の evts_in 列は、診断に関してエンジンが受け取ったイベントの数を識別します。</p>
evts_out	<p>fmstat 表出力の evts_out 列は、エンジンによって検出および送信された障害の数を示します。</p>

プロパティ	説明
errors	fmstat 表出力の errors 列は、エンジンによって検出された内部エラーの数を識別します。

▼ 障害管理統計レポートの表示 (fmstat)

始める前に

- Oracle ハードウェアユーザーはこの手順を実行する前に、Oracle の保守担当者から許可を求めてください。
- [122 ページの「fmstat レポートの例および説明」](#)を確認します。

障害管理操作に関する統計を Oracle ILOM 障害管理シェルから表示するには、次を実行します。

1. Oracle ILOM CLI から、[114 ページの「障害管理シェルセッションの起動 \(CLI\)」](#)の説明に従って、障害管理シェルを起動します。

faultmgmtsp> または faultmgmtcmm> プロンプトが表示されます。

2. 障害管理統計レポートを表示するには、次のコマンドを発行します。

```
fmstat
```

関連情報

- [113 ページの「障害管理の用語」](#)
- [115 ページの「fmadm を使用したアクティブな Oracle ハードウェア障害の管理」](#)
- [116 ページの「修復または交換についての障害のクリア」](#)
- [119 ページの「fmdump を使用した障害管理履歴ログの表示」](#)
- [47 ページの「未解決の問題の管理」](#)

コマンド行インタフェースの使用

説明	リンク
Distributed Management Task Force コマンド行プロトコルについて学習します。	125 ページの「コマンド行インタフェース (CLI) について」
サポートされている CLI 構文、コマンド、オプションを確認します。	126 ページの「サポートされている DMTF 構文、コマンド動詞、およびオプションについての CLI リファレンス」
ターゲットプロパティを変更するコマンドを実行します。	131 ページの「プロパティを変更するコマンドの実行の CLI リファレンス」
サーバー管理、シャーシ管理、フレームの管理に使用される個別の CLI 名前空間について学習します。	134 ページの「CLI デバイス管理名前空間サマリー」
ターゲット名前空間階層内の管理タスクが実行される場所について学習します。	136 ページの「CLI ターゲットへの管理タスクのマッピングの CLI リファレンス」

関連情報

- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)

コマンド行インタフェース (CLI) について

Oracle ILOM CLI は Distributed Management Task Force (DMTF) の *Server Management Command-Line Protocol Specification (SM CLP), version 11.0a.8 Draft* に基づいています。この仕様全体は、次のサイトで参照できます。

<http://www.dmtf.org/>

Oracle ILOM で、SM CLP は、サーバーの状態、アクセス方法、またはインストールされているオペレーティングシステムにかかわらず、サーバーを管理するためのユーザーインタフェースを提供します。

SM CLP アーキテクチャーは、システム管理下にあるすべてのオブジェクトを含む事前定義されたツリーである階層的な名前空間をモデル化しています。このモデルでは、少数のコマンドでターゲットの大きな名前空間を操作し、ターゲットは、オプションやプロパティで変更できます。この名前空間は、各コマンド動詞のターゲットを定義します。

SM CLP は、スクリプト環境にも適しています。Expect などのスクリプトツールを使用することで、複数のサーバーでテストを自動化し、プロビジョニング (共通の構成およびファームウェア更新など) を容易にできます。

Oracle ILOM CLI 名前空間でのオブジェクトの管理の詳細は、[30 ページの「管理対象デバイス上の Oracle ILOM 3.2.x CLI 名前空間ターゲット」](#)を参照してください。

関連情報

- [131 ページの「プロパティを変更するコマンドの実行の CLI リファレンス」](#)
- [134 ページの「CLI デバイス管理名前空間サマリー」](#)
- [136 ページの「CLI ターゲットへの管理タスクのマッピングの CLI リファレンス」](#)

サポートされている DMTF 構文、コマンド動詞、およびオプションについての CLI リファレンス

- [126 ページの「サポートされている CLI 構文」](#)
- [127 ページの「基本的な CLI コマンドおよびオプション」](#)
- [129 ページの「基本的なコマンド行編集キーストローク」](#)

サポートされている CLI 構文

コマンドを実行するために、Oracle ILOM CLI に入力するサポートされている構文は、次の形式になります。

```
<verb> [<-option>] [<target>] [<property>=<property_value>]
```

ここでは:

- **<verb>** — verb (動詞) という語は、実行される特定のコマンドまたはアクションを表します。たとえば、コマンド verb を使用して、データの取得と管理 (**set**、**show**)、データの作成または削除 (**create**、**delete**)、管理対象のコンポーネントの状態の変更 (**set**、**reset**、**start**、**stop**)、現在の CLI セッションの管理 (**cd**、**version**、**exit**)、およびコマンド情報の表示 (**help**) を実行できます。

注記 - コマンド行に発行できるコマンド verb は 1 つだけです。

- **<-option>** — option (オプション) という語は、コマンド verb のアクションや動作を変更するために使用するコマンド **-option** を表します。たとえば、オプションの使用により、CLI

出力形式を変更したり、コマンドをネストしたレベルに適用したり、1 つまたは複数のアクションを実行するようにスクリプトを実行したりする機能が可能になります。

コマンド行にオプションを入力する場合、コマンド verb の直後に配置することができ、常に直前にハイフン (-) を付ける必要があります。

注記 - すべてのコマンド verb がオプションをサポートしているわけではありません。そのため、発行されたコマンド verb でサポートされているオプションは 0 個以上です。

- **<target>** — target (ターゲット) という語は、発行されたコマンド verb のアドレスやパスを表します。たとえば、ターゲットは、個々の管理対象のコンポーネント (ディスク、電源、メモリーモジュールなど) や管理対象のコンポーネントのコレクション (システムなど) を参照することができます。

コマンド行にターゲットを入力する場合、コマンド verb のあとに配置することができますが、発行される各コマンド verb で参照できるターゲットは 1 つだけです。

- **<property>** — property (プロパティ) という語は、コマンドの処理に必要な値を含めることができるターゲットの属性です。プロパティは、コマンドによって取得される、または動作するターゲットのクラスを識別します。
- **=<property_value>** — 代入演算子 (=) は、指定したプロパティに割り当てる目的の値を示すために使います。

関連情報

- [30 ページの「Oracle ILOM 3.1 および 3.2.x CLI の大文字と小文字の区別なし」](#)

基本的な CLI コマンドおよびオプション

Oracle ILOM CLI では、次の基本的なコマンドおよびオプションをサポートしています。

注記 - 角括弧 ([]) で囲まれているオプションは省略可能、山括弧 (<>) で囲まれているものはキーワード、パイプ (|) で区切られているものはキーワードまたはオプションの選択を示します。

コマンド	コマンドのオプション	説明
cd	[-default] <target>	ターゲットの名前空間をナビゲートします。 -default — 初期デフォルトターゲットを選択します。
create	<target> [<property>=<value>]	名前空間にターゲットおよびプロパティ値を作成します (ユーザーを追加し、ユーザーの role と password を指定するためなど)。
delete	[-script] <target>	名前空間からオブジェクトを削除します (ユーザーアカウントを削除するためなど)。

コマンド	コマンドのオプション	説明
		-script — コマンドに通常関連付けられている警告およびプロンプトをスキップします (プロンプトに対して「yes」を前提)。
dump	-destination <URI> [-force] [<target>]	URI で指定されるリモートロケーションにターゲットからファイルを転送します (構成やサービススナップショットなど)。 -f -force — 内部チェックをオーバーライドし、リクエストされたファイルをダンプします。 -destination <URI> — URI (Uniform Resource Identifier) 形式を使用して必須の宛先パスを指定します。
exit	なし。	CLI セッションを終了します。
help	[-format wrap nowrap] [-output terse verbose]	コマンド、ターゲット、ターゲットのプロパティに関するヘルプ情報を表示します。 -format wrap nowrap — ヘルプテキストの画面形式を指定します。 -o -output terse verbose — 表示されるヘルプテキストの量を指定します。
load	[-output verbose] [-force] [-script] -source <URI>	指定されたソースから指定されたターゲットにファイルを転送します (構成やファームウェアイメージなど)。 -o -output verbose — 表示される情報テキストの量を指定します。 -f -force — 内部チェックをオーバーライドし、リクエストされたファイルをダンプします。 -script — コマンドに通常関連付けられている警告およびプロンプトをスキップします (プロンプトに対して「yes」を前提)。 -source <URI> — URI (Uniform Resource Identifier) 形式を使用して必須のソースパスを指定します。
reset	■ X86 の場合: [-script] <target> ■ SPARC の場合: [-script] [-force] <target>	ターゲットをリセットします (ホストサーバーやサービスプロセッサへの電力など)。 -f -force — アクションをただちに実行するように指定します。 -script — コマンドに通常関連付けられている警告およびプロンプトをスキップします (プロンプトに対して「yes」を前提)。
set	[<target>] <property>=<value> [<property>=<value>]	ターゲットのプロパティを指定した値に設定します。
show	[-display targets properties commands all] [-a] [-level 1 2 3...255 all] [-format wrap nowrap] [-output table] [-t] [<target>] [<property> <property>]	ターゲットとプロパティについての情報を表示します。 -d -display — 表示される情報を指定します。 -a — -display all と同じ。 -l -level — ターゲット階層内でアクションが適用される相対レベルを指定します。 -format wrap nowrap — 画面形式を指定します。

コマンド	コマンドのオプション	説明
		<p>-o -output table — 出力を表形式で表示することを指定します。</p> <p>-t -level all -output table と同じ。</p>
start	<code>[-script] [-force] <target></code>	<p>ターゲット (ホストシステムや Oracle ILOM 内部シェルなど) を起動します。</p> <p>-script — コマンドに通常関連付けられている警告およびプロンプトをスキップします (プロンプトに対して「yes」を前提)。</p> <p>-f -force — 内部チェックをオーバーライドし、アクションをすぐに実行します。</p>
stop	<code>[-script] [-force] <target></code>	<p>ターゲット (ホストシステムなど) を停止します。</p> <p>-script — コマンドに通常関連付けられている警告およびプロンプトをスキップします (プロンプトに対して「yes」を前提)。</p> <p>-f -force — 内部チェックをオーバーライドし、アクションをすぐに実行します。</p>
version	なし。	サービスプロセッサのファームウェアバージョンを表示します。

関連情報

- [127 ページの「基本的な CLI コマンドおよびオプション」](#)
- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)
- [131 ページの「プロパティを変更するコマンドの実行の CLI リファレンス」](#)
- [136 ページの「CLI ターゲットへの管理タスクのマッピングの CLI リファレンス」](#)
- [134 ページの「CLI デバイス管理名前空間サマリー」](#)

基本的なコマンド行編集キーストローク

Oracle ILOM CLI では、次のコマンド行編集キーストロークをサポートしています。

- [表18「カーソル移動用の CLI 編集キーストローク」](#)
- [表19「テキスト削除用の CLI 編集キーストローク」](#)
- [表20「テキスト入力用の CLI 編集キーストローク」](#)
- [表21「コマンド履歴用の CLI 編集キーストローク」](#)

表 18 カーソル移動用の CLI 編集キーストローク

目的:	使用するキー:
カーソルを右に移動します。	右矢印
	- または -

目的:	使用するキー:
カーソルを左に移動します。	Ctrl+F Left arrow -または- Ctrl+B
カーソルをコマンド行の先頭に移動します。	Ctrl+A
カーソルをコマンド行の末尾に移動します。	Ctrl+E
カーソルを 1 語だけ前方に移動します。	Esc+F
カーソルを 1 語だけ後方に移動します。	Esc+B

表 19 テキスト削除用の CLI 編集キーストローク

目的:	使用するキー:
カーソルの前にある文字を削除します。	Backspace -または- Ctrl+H
カーソル位置の文字を削除します。	Ctrl+D
カーソル位置から始まり、コマンド行の末尾までの文字を削除します。	Ctrl+K
カーソルの前にある語を削除します。	Ctrl+W -または- Esc+H -または- Esc+Backspace
カーソル位置の語を削除します。	Esc+D

表 20 テキスト入力用の CLI 編集キーストローク

目的:	使用するキー:
ターゲットまたはプロパティ名の入力を完了します。	Tab
コマンド行の入力を中止します。	Ctrl+C
load -source console または set load_uri=console のコマンド使用時に複数行の入力の終了を実行します。	Ctrl+Z

表 21 コマンド履歴用の CLI 編集キーストローク

目的:	使用するキー:
コマンド行の履歴を表示します。	Ctrl+L
コマンド行の履歴を後方にスクロールします。	上矢印

目的:	使用するキー:
	- または -
	Ctrl+P
コマンド行の履歴を前方にスクロールします。	Down arrow
	- または -
	Ctrl+N

関連情報

- [127 ページの「基本的な CLI コマンドおよびオプション」](#)
- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)
- [131 ページの「プロパティを変更するコマンドの実行の CLI リファレンス」](#)
- [136 ページの「CLI ターゲットへの管理タスクのマッピングの CLI リファレンス」](#)

プロパティを変更するコマンドの実行の CLI リファレンス

コマンド、ターゲット、および変更するプロパティ値を指定することによって、ほとんどの CLI コマンドを実行できます。同一コマンド行で単一のプロパティまたは複数のプロパティを変更するようにコマンド実行を選択できます。Oracle ILOM 接続を中断する可能性がある一部のプロパティでは、Oracle ILOM で変更が有効になる前に、変更を確認する必要があります。

CLI コマンドの実行に関する詳細は、次のトピックを参照してください。

- [131 ページの「ターゲットプロパティを変更するためのコマンドの実行」](#)
- [132 ページの「確認が必要なコマンドの実行」](#)

ターゲットプロパティを変更するためのコマンドの実行

次のいずれかの方法で、ターゲットプロパティを変更するコマンドの実行を選択できます。

- ターゲットに移動し、そのプロパティを調べて、コマンドを実行します。
たとえば、Oracle ILOM Web サーバーの HTTP ユーザーセッションタイムアウトを 30 分に設定するには、次のように入力します。

```
-> cd /SP/services/http
```

```
/SP/services/http
```

```
-> show
```

```
/SP/services/http
```

```
Targets:
```

```
Properties:
```

```
port = 80  
secureredirect = disabled  
servicestate = enabled  
sessiontimeout = 15
```

```
Commands:
```

```
cd  
set  
show
```

```
-> set sessiontimeout=30
```

- ネームスペースの任意の場所から、コマンドとターゲットへのフルパスを入力し、1 つのプロパティを変更します。

例:

```
-> set /SP/services/http sessiontimeout=30
```

- 名前空間の任意の場所から、コマンドとターゲットへのフルパスを入力し、複数のプロパティを変更します。

例:

```
-> set /SP/services/http servicestate=disable secureredirect=enabled
```

関連情報

- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)
- [131 ページの「ターゲットプロパティを変更するためのコマンドの実行」](#)
- [132 ページの「確認が必要なコマンドの実行」](#)

確認が必要なコマンドの実行

プロパティの変更によって現在のユーザーセッションが中断される可能性があるターゲットの場合、構成には保留中の変更をコミットして有効にすることが含まれます。

たとえば、Oracle ILOM で SP の IP ネットワーク設定を変更すると、現在のユーザーセッションの中断が発生します。そのため、IP プロパティに行なったすべての変更を Oracle ILOM で有効にする前に、コミットする必要があります。

IP プロパティの変更をコミットするために使用するプロセスの例は次のようになります。

1. 現在のネットワーク設定を表示します。

```
-> show /SP/network

/SP/network
Targets:
  interconnect
  ipv6
  test

Properties:
  commitpending = (Cannot show property)
  dhcp_clientid = none
  dhcp_server_ip = none
  ipaddress = 192.0.2.22
  ipdiscovery = static
  ipgateway = 192.0.2.1
  ipnetmask = 10.255.255.0
  macaddress = 00:28:25:E7:18:0C
  managementport = MGMT
  outofbandmacaddress = 00:28:25:E7:18:0C
  pendingipaddress = 192.0.2.22
  pendingipdiscovery = static
  pendingipgateway = 192.0.2.1
  pendingipnetmask = 10.255.255.0
  pendingmanagementport = MGMT
  sidebandmacaddress = 00:28:25:E7:18:0D
  state = enabled

Commands:
  cd
  set
  show
```

2. 設定を変更するには、最初に新しい (保留中の) 情報を入力します。

```
->set /SP/network pendingipdiscovery=static pendingipaddress=
nnn.nn.nn.nn pendingipgateway=nnn.nn.nn.nn pendingipnetmask=nnn.nn.nn.nn
```

3. 次に、新しい設定が正しいことを確認したあと、新しい設定をコミットして、設定がただちに有効になるようにします。

-> set /SP/network commitpending=true

注記 - コミットプロパティと保留中の情報を単一コマンド内で組み合わせることもできます。

注記 - LAN 経由で Oracle ILOM に接続している場合、任意の IP プロパティの変更のコミット後に、Oracle ILOM に再接続する必要があります。

関連情報

- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)
- [131 ページの「ターゲットプロパティを変更するためのコマンドの実行」](#)
- [「Setting Up a Management Connection to Oracle ILOM and Logging In」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)

CLI デバイス管理名前空間サマリー

Oracle ILOM は、サーバー管理、シャーシ管理、およびフレーム管理用の個別の CLI 名前空間を提供します。

管理対象デバイス	デバイス管理名前空間	該当するデバイスおよびファームウェア
Oracle サーバー	<p>サービスプロセッサ (SP) にアクセスして、1) システムの健全性をモニターし、2) サーバーコンポーネントインベントリを表示し、3) Oracle ILOM 管理プロパティを構成して表示します。</p> <p>サーバー SP CLI から、次の名前空間にアクセスできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ /SP - /SP ターゲットを使用して、Oracle ILOM 管理プロパティを構成し、ログファイルを表示します。 ■ /HOST - /HOST ターゲットを使用して、HOST 関連プロパティをモニターし、管理します。 ■ /Servers - /Servers ターゲットを使用して、マルチホスト SPARC サーバー上の既存の PDomain 構成 (/Servers/PDomains/PDomain_n) を表示し、管理します。 ■ /System - /System ターゲットを使用して、コンポーネントインベントリおよび環境センサーをモニターします。 	<p>x86 サーバー</p> <p>SPARC T および M シリーズサーバー</p> <p>Oracle ILOM 3.1 以降</p>
Oracle ブレードシャーシシステム	<p>シャーシモニタリングモジュール (CMM) にアクセスして、1) システムの健全性をモニターし、2) シャーシコンポーネントインベントリを表示し、3) シャーシコンポーネント (ブレードサーバーモジュール、電源装置、ストレージなど) に移動し、5) Oracle ILOM 管理プロパティを構成して表示します。</p>	<p>Oracle Blade 6000 シャーシ</p> <p>CMM</p>

管理対象デバイス	デバイス管理名前空間	該当するデバイスおよびファームウェア
	<p>CMM CLI から、次の名前空間にアクセスできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ /CMM - /CMM ターゲットを使用して、1) サーバー SP にアクセスし、2) Oracle ILOM SP 管理プロパティを構成し、3) 監査およびイベントログファイルを表示します。 ■ /Storage (3.0 レガシーターゲット、有効にすると表示される) - /Storage ターゲットを使用して、1) SAS ゾーンのインタフェースにアクセスし、2) シャーシストレージコンポーネントまたはストレージブレードサーバーモジュールを管理します。 ■ /Servers - /Servers ターゲットを使用して、SP レベルでブレードサーバーにログインした場合と同様に、ブレードサーバーモジュールをモニターし、管理します。 ■ /Systems - /Systems ターゲットを使用して、システムインベントリの最上位レベルのサマリー、コンポーネント健全性ステータス、およびシステムログを表示します。 ■ /CH (3.0 レガシーターゲット、有効にした場合にのみ表示) - /CH ターゲットを使用して、シャーシレベルで、コンポーネントインベントリ、環境の健全性ステータス、ハードウェア管理をモニターします。このターゲットの下のターゲットは、ハードウェアコンポーネントの名前に直接対応します。 <p>注記 - CMM の下の 3.0 レガシーターゲットは、既存の Oracle ILOM ユーザースクリプトとの下位互換性を確保するために、(表示されていなくても) 使用できます。</p>	<p>x86 および SPARC ブレードサーバーモジュール</p> <p>Oracle ILOM 3.1 以降</p>
Oracle Netra フレームモジュラーシステム	<p>フレームモニタリングモジュール (FMM) にアクセスし、1) システム健全性をモニターし、2) コンポーネントインベントリを表示し、3) コンピュータノードに移動し、5) Oracle ILOM 管理プロパティを構成して表示します。</p> <p>FMM CLI から、次の名前空間にアクセスできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ /FMM - /FMM ターゲットを使用して、Oracle ILOM ユーザーおよび管理プロパティを構成するほか、監査およびイベント FMM ログファイルを表示します。 ■ /Networking - /Networking ターゲットを使用して、SP レベルでネットワークノードにログインした場合と同様に、ネットワークノードを管理します。 <p>注記 - /Networking ターゲットは、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.2.5 を実行しているすべての FMM でサポートされていないことがあります。以降のファームウェアバージョンが必要になることがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ /Servers - /Servers ターゲットを使用して、SP レベルで計算ノードにログインした場合と同様に、計算ノードを管理します。 ■ /Systems - 未解決の問題、計算およびネットワークインベントリと健全性の詳細、システムログ内のイベントの最上位レベルのサマリービューに /Systems ターゲットを使用します。 ■ /Frame (レガシーターゲット) - /Frame ターゲットを使用して、フレームレベルでインベントリのステータス、環境 (ア 	<p>Netra フレームシャーシ</p> <p>X5-2 サーバー計算ノード</p> <p>FMM</p> <p>Oracle ILOM ファームウェア 3.2.5 以降。</p>

管理対象デバイス	デバイス管理名前空間	該当するデバイスおよびファームウェア
	ラーム、LED、センサーなど) を表示し、ハードウェアコンポーネントを管理します。	

関連情報:

- [32 ページの「Oracle ILOM 3.2 x ターゲットの CLI 階層」](#)
- [136 ページの「CLI ターゲットへの管理タスクのマッピングの CLI リファレンス」](#)

CLI ターゲットへの管理タスクのマッピングの CLI リファレンス

このセクションのトピックを参照して、次の Oracle ILOM 管理タスクに適用可能な CLI 名前空間ターゲットの特定に役立てます。

- [137 ページの「管理接続タスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [139 ページの「ネットワーク配備タスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [141 ページの「ユーザー管理タスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [142 ページの「システム電源投入ポリシータスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [143 ページの「システム電力使用ポリシータスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [145 ページの「ファームウェア更新タスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [147 ページの「ファームウェアバックアップおよび復元タスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [148 ページの「x86 BIOS バックアップおよび復元タスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [149 ページの「システム健全性ステータスタスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [150 ページの「イベント、監査、およびシステムログタスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [151 ページの「アラート通知タスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [152 ページの「ホスト管理タスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [153 ページの「リモート KVMS サービス状態タスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [154 ページの「ホストシリアルコンソールセッションタスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [155 ページの「ホスト診断タスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [156 ページの「障害管理シェルセッションタスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [157 ページの「NEM 保守アクションタスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [158 ページの「SAS ブレードゾーン管理と適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [159 ページの「CMM ブレード管理タスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)
- [160 ページの「CLI レガシーサービス状態タスクと適用可能な CLI ターゲット」](#)

管理接続タスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、Oracle ILOM 管理接続タスクに適用可能な CLI 名前空間ターゲットの特定に役立てます。

次の表では、すべての管理対象デバイスの /SP ターゲットへの完全な CLI パスは示していません。たとえば、マルチドメイン SPARC サーバー、ブレードシステム CMM、または Netra FMM から /SP ターゲットにアクセスするには、/SP ターゲットの先頭に該当する CLI プロパティを追加します。

- SPARC マルチドメインサーバーでは、該当する場合に、/Servers/PDomains/PDomain_n を追加します。
- ブレードシステム CMM では、該当する場合に、/Servers/Blades/Blade_n を追加します。
- Netra フレームシステム FMM では、該当する場合に、/Servers/ComputeNodes/ComputeNode_n を追加します。

注記 - すべての管理対象のデバイスで、すべての CLI 管理接続ターゲットが使用できるわけではありません。管理対象デバイスでサポートされている名前空間ターゲットを表示するには、**help** コマンドを使用します。たとえば、**help /SP/network** | **help /CMM/network** | **help FMM/network** などです

Oracle ILOM への管理接続の設定方法の詳細は、表のあとにある「関連情報」セクションに示すトピックを参照してください。

管理接続タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
サーバー SP、CMM、または FMM でネットワークサービス状態プロパティを表示または変更します。	/SP CMM FMM/network ■ state	■ Admin (a)
サーバー SP、CMM、または FMM で IPv4 ネットワークプロパティを表示または変更します。	/SP CMM FMM/network ■ ipdiscovery ■ ipaddress ■ ipnetmask ■ ipgateway ■ dhcp_clientid	■ Admin (a)
サーバー SP、CMM、または FMM で IPv6 ネットワークプロパティを表示または変更します。	/SP CMM FMM/network/ipv6 ■ state ■ autoconfig= ■ autoconfig ■ static_ipaddress	■ Admin (a)
IPv4 および IPv6 ネットワーク接続をテストします。	/SP CMM FMM/network/test	■ Operator (o)

管理接続タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
	<ul style="list-style-type: none"> ■ ping 	
SP ネットワーク管理ポートのプロパティを表示または変更します。	<p>/SP/network</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ managementport <p>注記 - すべてのサーバー SP がサイドバンド管理を有効にするために、Netn プロパティをサポートしているわけではありません。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ Admin (a)
Oracle ILOM SP とホスト OS 間のローカル相互接続アクセスプロパティを表示または変更します。	<p>/SP/network/interconnect</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ host_managed <p>注記 - その他の相互接続プロパティは、SP とホスト OS 間の接続を手動で構成することを選択した場合に構成できます。</p> <p>ほかの相互接続プロパティについて知るには、help コマンドを使用します。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ Admin (a)
サーバー SP、CMM、または FMM でドメインネームサービス (DNS) 解決プロパティを表示または変更します。	<p>/SP CMM FMM/clients/dns</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ auto_dns ■ nameserver ■ /retries ■ searchpath ■ timeout 	<ul style="list-style-type: none"> ■ Admin (a)
サーバー SP、CMM、または FMM でシリアル管理ポートプロパティを表示または変更します。	<p>/SP CMM FMM/serial</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ external ■ host ■ portsharing <p>注記 - シリアルポートプロパティはシステムごとに異なります。管理対象デバイスでサポートされているシリアルポートプロパティを特定するには、help コマンドを使用します。例: help /SP/serial</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ Admin (a)

関連情報

- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)
- [「Setting Up a Management Connection to Oracle ILOM and Logging In」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Configure a Dedicated Network Management Connection to Oracle ILOM」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Configure a Sideband Management Connection to Oracle ILOM」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)

- 「Manually Configure the Local Interconnect」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- 「Configure a Dedicated Local Management Connection to Oracle ILOM」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』

ネットワーク配備タスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、Oracle ILOM ネットワーク配備タスクに適用可能な CLI 名前空間ターゲットの特定に役立てます。

次の表では、すべての管理対象デバイスの /SP ターゲットへの完全な CLI パスは示していません。たとえば、マルチドメイン SPARC サーバー、ブレードシステム CMM、または Netra FMM から /SP ターゲットにアクセスするには、/SP ターゲットの先頭に該当する CLI プロパティを追加します。

- SPARC マルチドメインサーバーでは、該当する場合に、/Servers/PDomains/PDomain_n を追加します。
- ブレードシステム CMM では、該当する場合に、/Servers/Blades/Blade_n を追加します。
- Netra フレームシステム FMM では、該当する場合に、/Servers/ComputeNodes/ComputeNode_n を追加します。

注記 - すべての管理対象デバイスで、すべてのネットワーク配備 CLI ターゲットがサポートされているわけではありません。管理対象デバイスでサポートされている名前空間ターゲットを表示するには、**help** コマンドを使用します。例:

```
help /SP/network/services | help /CMM/network/services | help /FMM/network/
services
```

Oracle ILOM でのデフォルトのネットワーク配備プロパティの変更方法の詳細は、表のあとにある「関連情報」セクションに示すトピックを参照してください。

ネットワーク配備タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
サーバー SP、CMM、または FMM でネットワーク管理サービスプロパティを表示または変更します。	/SP /CMM /FMM/services /http /https /ssh ■ generate_new_key_type ■ generate_new_key_action /sso	■ Admin (a)

ネットワーク配備タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
	<ul style="list-style-type: none"> /fips /ipmi /snmp 	
サーバー SP、CMM、または FMM で CLI セッションタイムアウトプロパティを表示または変更します。	/SP/CMM/FMM/cli <ul style="list-style-type: none"> ■ timeout ■ legacy_targets 	Admin (a)
サーバー SP、CMM、または FMM でユーザーセッションを表示または終了します。	/SP/CMM/FMM/sessions	削除操作の場合 Admin (a)
サーバー SP、CMM、または FMM でシステム識別情報を表示または設定します。	/SP/CMM/FMM <ul style="list-style-type: none"> ■ hostname ■ system_contact ■ system_description ■ system_location 	Admin (a)
サーバー SP、CMM、または FMM でバナーメッセージを作成および表示します。	/SP/CMM/FMM/preferences/banner <ul style="list-style-type: none"> ■ connect ■ login 	Admin (a)
サーバー SP、CMM、または FMM 上 Oracle ILOM の日付と時間のプロパティを表示または変更します。	/SP/CMM/FMM/clock <ul style="list-style-type: none"> ■ datetime ■ timezone ■ usentpserver 注記 - usentpserver では、時間情報プロトコルサービスを有効にする必要があります (この表の時間情報プロトコルサービスの管理についての説明を参照してください)。	Admin (a)
サーバー SP、CMM、または FMM で時間情報プロトコルサービスプロパティを表示または設定します。	/SP/CMM/FMM/clients/ntp/server <ul style="list-style-type: none"> ■ /1 address ■ /2 address 	Admin (a)

関連情報

- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)
- 「Modifying Default Settings for Network Deployment and Administration」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- 「Network Management Service Deployment Options」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- 「Network Connectivity Deployment Options」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』

- 「Use of Web Server Certificates and SSH Server-Side Keys」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- 「Default Timeout for CLI and Web Sessions」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- 「Serial Management Port Owner」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』

ユーザー管理タスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、Oracle ILOM ユーザー管理タスクに適用可能な CLI 名前空間ターゲットの特定に役立っています。

次の表では、すべての管理対象デバイスの /SP ターゲットへの完全な CLI パスは示していません。たとえば、マルチドメイン SPARC サーバー、ブレードシステム CMM、または Netra FMM から /SP ターゲットにアクセスするには、/SP ターゲットの先頭に該当する CLI プロパティを追加します。

- SPARC マルチドメインサーバーでは、該当する場合に、/Servers/PDoamins/PDomain_n を追加します。
- ブレードシステム CMM では、該当する場合に、/Servers/Blades/Blade_n を追加します。
- Netra フレームシステム FMM では、該当する場合に、/Servers/ComputeNodes/ComputeNode_n を追加します。

注記 - すべての管理対象デバイスで、すべてのユーザー管理 CLI ターゲットがサポートされているわけではありません。管理対象デバイスでサポートされている名前空間ターゲットを表示するには、**help** コマンドを使用します。例:

help /SP/users | help /CMM/users | help /FMM/users

Oracle ILOM でのローカルまたはリモートディレクトリユーザーアカウントの設定方法の詳細は、表のあとにある「関連情報」セクションに示すトピックを参照してください。

ユーザー管理タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
Oracle ILOM ユーザーをローカルで管理します (サービスプロセッサ当たり 10 まで)。	<p>/SP/CMM/FMM/users</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ /username password= role= ■ create または delete コマンドを使用して、ローカルアカウントを管理します。 ■ /set load=uri 	<ul style="list-style-type: none"> ■ ほかのユーザーを管理する場合は User Management (u) ■ 自分用のアカウントを管理する場合は Read only (o)

ユーザー管理タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
	ユーザー生成の SSH 鍵をアップロードするためのコマンド構文。	
リモート認証ディレクトリサービスを構成します。	/SP CMM FMM/clients ■ /activedirectory ■ /ldap ■ /ldaps1 ■ /radius	User Management (u)
Oracle ILOM のデフォルトパスワードを回復するために物理的プレゼンスのセキュリティを設定します。	/SP CMM FMM ■ check_physical_presence 注記 - Oracle ILOM のデフォルトパスワードのリセットは、システムの SER MGT ポートへの接続を介して実行する必要があります。	User Management (u)

関連情報

- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)
- [「Setting Up and Maintaining User Accounts」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Supported User Authentication Configuration Options」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Assignable Oracle ILOM User Roles」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Single Sign-On Service \(Enabled by Default\)」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「CLI Authentication Using Local User SSH Key 」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Password Recovery for Default root Account」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)

システム電源投入ポリシータスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、Oracle ILOM SP 電源投入および CMM 電源ポリシータスクに適用可能な CLI 名前空間ターゲットの特定に役立てます。

注記 - 管理対象デバイス (SP、CMM、または FMM) でサポートされている電源投入ターゲットを表示するには、**help** コマンドを使用します。たとえば、SP から **help /SP/policy** と入力します。

Oracle ILOM での電源ポリシーの設定の詳細は、表のあとにある「関連情報」セクションに示すトピックを参照してください。

電源投入ポリシータスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
システムの電源投入ポリシーを管理します。	/SP/CMM/policy ■ HOST_AUTO_POWER_ON ■ HOST_LAST_POWER_STATE ■ ENHANCED_PCIE_COOLING_MODE 注記 - このセクションに一覧表示されているすべての CLI 電源投入ポリシープロパティが、すべての管理対象デバイス (SP/FMM/CMM) でサポートされているわけではありません。デバイスでサポートされているポリシープロパティを特定するには、 help コマンド (help /SP/CMM/FMM/policy) を使用します。	Admin (a)

関連情報

- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)
- [「Power-On and Cooling-Down Policies Configurable From the Server SP」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)
- [「System Management Power Supply Policies Configurable From CMM」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)

システム電力使用ポリシータスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、Oracle ILOM システムの電力使用ポリシータスクおよびアラート通知タスクに適用可能な CLI 名前空間ターゲットの特定に役立てます。

次の表では、すべての管理対象デバイスの /SP ターゲットへの完全な CLI パスは示していません。たとえば、マルチドメイン SPARC サーバー、ブレードシステム CMM、または Netra FMM から /SP ターゲットにアクセスするには、/SP ターゲットの先頭に該当する CLI プロパティを追加します。

- SPARC マルチドメインサーバーでは、該当する場合には、/Servers/PDomains/PDomain_1 を追加します。

- ブレードシステム CMM では、該当する場合に、/Servers/Blades/Blade_n を追加します。
- Netra フレームシステム FMM では、該当する場合に、/Servers/ComputeNodes/ComputeNode_n を追加します。

注記 - すべての管理対象デバイスで、すべての電源ポリシー CLI ターゲットがサポートされているわけではありません。管理対象デバイスでサポートされている名前空間ターゲットを表示するには、**help** コマンドを使用します。例:

help /SP/powermgmt または **help /CMM/powermgmt**

Oracle ILOM での電力使用ポリシーおよびアラート通知の設定方法の詳細は、表のあとにある「関連情報」セクションに示すトピックを参照してください。

電源ポリシータスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
サーバー SP からシステムコンポーネントの電源を管理します。該当する場合、アラート通知しきい値および電力割り当て量のプロパティを設定します。	/SP/powermgmt ■ actual_power permitted_power allocated_power available_power ■ threshold1/2= ■ /powerconf ■ /budget	■ Admin (a)
CMM からブレードシステムシャーシの電源を管理します。該当する場合、電源装置冗長性およびアラート通知しきい値のプロパティを設定します。	/CMM/powermgmt ■ actual_power permitted_power allocated_power available_power redundancy redundant_power ■ threshold1/2= ■ /powerconf ■ /advanced	■ Admin (a)

関連情報

- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)
- [「Setting Power Consumption Alert Notifications」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)

- 「Set SP Power Target Limit Properties」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- 「Setting SP Advanced Power Capping Policy to Enforce Power Limit」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- 「Set Power Management Settings for Power Policy on SPARC Servers」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- 「Set CMM Power Supply Redundancy Policy」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』

ファームウェア更新タスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、Oracle ILOM ファームウェア更新タスクおよび CLI ターゲットの特定に役立っています。

次の表では、すべての管理対象デバイスの /SP ターゲットへの完全な CLI パスは示していません。たとえば、マルチドメイン SPARC サーバー、ブレードシステム CMM、または Netra FMM から /SP ターゲットにアクセスするには、/SP ターゲットの先頭に該当する CLI プロパティを追加します。

- SPARC マルチドメインサーバーでは、該当する場合に、/Servers/PDomains/PDomain_n を追加します。
- ブレードシステム CMM では、該当する場合に、/Servers/Blades/Blade_n を追加します。
- Netra フレームシステム FMM では、該当する場合に、/Servers/ComputeNodes/ComputeNode_n を追加します。

注記 - すべての管理対象デバイスで、すべてのファームウェア CLI ターゲットがサポートされているわけではありません。管理対象デバイスでサポートされている名前空間ターゲットを表示するには、**help** コマンドを使用します。例:

```
help /SP/Firmware | help /CMM/Firmware | help /FMM/Firmware
```

Oracle ILOM ファームウェア更新の実行方法の詳細は、表のあとにある「関連情報」セクションに示すトピックを参照してください。

ファームウェアタスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
システム BIOS プロパティを表示するか、システム BIOS イメージを更新します (x86 のみ)。	/System/BIOS ■ system_bios_version	■ Read only (o) ■ 新しいイメージをロードする場合 Admin (a)。

ファームウェアタスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
	<ul style="list-style-type: none"> ■ boot_mode <p>注記 - BIOS ブートモードを変更するには、サーバーに提供されている管理ガイドを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ reset_to_defaults ■ /Config load_uri 	
インストールされている Oracle ILOM ファームウェアバージョンを表示します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ /System/Firmware ■ system_fw_version 	■ Read only (o)
SP、CMM、または FMM ファームウェアイメージを更新します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ /SP/CMM/FMM/Firmware ■ load_uri ■ /host/miniroot ■ /keys ■ /backupimage <p>注記 - すべての管理対象デバイスで、この表に一覧表示されているすべてのファームウェア更新プロパティがサポートされているわけではありません。サポートされているプロパティを特定するには、help コマンド (help /SP/CMM/FMM/firmware) を使用します。</p> <p>注記 - SPARC サーバープラットフォームでは、ファームウェアの更新を実行する前に、ホストオペレーティングシステムの電源を切断する必要があります。</p>	■ Admin (a)
CMM から NEM ファームウェアを表示または更新します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ /System/Firmware/Other_Firmware/ ■ Firmware_n (関連する NEM を選択します) ■ load_uri ■ version <p>注記 - サービスプロセッサをサポートしていない NEM はファームウェアターゲットの下に一覧表示されません。</p>	■ Admin (a)
FMM からスイッチファームウェアバージョンを表示します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ /System/Networking/Switches/Switch_n ■ firmware_version 	■ Admin (a)
レガシー CLI ターゲットからブレードシャーシコンポーネントファームウェアを更新します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ /CH/BLn/SP/NEMn ■ load_uri <p>注記 - ファームウェアの更新を実行する前に SPARC サーバーのホストオペレーティングシステムの電源を切断する必要があります。</p>	■ Admin (a)

関連情報

- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)
- [「Performing Firmware Updates」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)
- [「Firmware Upgradable Devices」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』](#)

ファームウェアバックアップおよび復元タスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、Oracle ILOM バックアップまたは復元構成タスクに適用可能な CLI 名前空間ターゲットを特定したり、Oracle ILOM 構成を出荷時のデフォルトにリセットしたりする場合に役立てます。

次の表では、すべての管理対象デバイスの /SP ターゲットへの完全な CLI パスは示していません。たとえば、マルチドメイン SPARC サーバー、ブレードシステム CMM、または Netra FMM から /SP ターゲットにアクセスするには、/SP ターゲットの先頭に該当する CLI プロパティを追加します。

- SPARC マルチドメインサーバーでは、該当する場合に、/Servers/PDomains/PDomain_n を追加します。
- ブレードシステム CMM では、該当する場合に、/Servers/Blades/Blade_n を追加します。
- Netra フレームシステム FMM では、該当する場合に、/Servers/ComputeNodes/ComputeNode_n を追加します。

注記 - すべての管理対象デバイスで、すべてのファームウェアバックアップおよび復元 CLI ターゲットがサポートされているわけではありません。管理対象デバイスでサポートされている名前空間ターゲットを表示するには、**help** コマンドを使用します。例:

```
help /SP/Config | help /CMM/Config | help /FMM/Config
```

Oracle ILOM での SP 構成のバックアップや復元の詳細は、表のあとにある「関連情報」セクションに示すトピックを参照してください。

ファームウェアバックアップおよび復元タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
SP、CMM、または FMM から Oracle ILOM 構成をバックアップまたは復元します。	/SP/CMM/FMM/Config ■ dump_uri 構成を xml ファイルにバックアップします。 ■ load_uri 構成を xml ファイルから復元します。	■ Admin (a) ■ User Management (u) ■ Console (c) ■ Reset and HostControl (r) ■ Read Only (o)
次回の SP、CMM、または FMM のリブート時に Oracle ILOM 構成プロパティをデフォルトにリセットします。	/SP/CMM/FMM reset_to_defaults = ■ all すべてのプロパティをリセットします。 ■ factory すべてのプロパティおよび erasess ログデータをリセットします。 ■ none リセット操作を取り消します。次回のリブート前に行う必要があります。	■ Admin (a)

関連情報

- 29 ページの「コマンド行インタフェース (CLI) の名前空間ターゲットのナビゲート」
- 「Backing Up, Restoring, or Resetting the Oracle ILOM Configuration」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- 「Password Recovery for Default root Account」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』

x86 BIOS バックアップおよび復元タスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、Oracle ILOM x86 BIOS 構成タスクに適用可能な CLI 名前空間ターゲットの特定に役立てます。

注記 - 次の表では、計算ノード BIOS プロパティを管理するための完全な Netra FMM CLI パスは示していません。FMM から計算ノード BIOS プロパティを表示または構成するには、`/System/BIOS` ターゲットの先頭に `/Servers/ComputeNodes/ComputeNode_n` を追加します。

Oracle ILOM での x86 BIOS 構成のバックアップや復元の詳細は、表のあとにある「関連情報」セクションに示すトピックを参照してください。

BIOS 管理タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
x86 サーバー SP からシステム BIOS 構成をバックアップまたは復元します。	<code>/System/BIOS/Config</code>	<ul style="list-style-type: none"> ■ 保存または復元の場合は Admin (a) ■ 復元の場合は Reset and Host Control (r)
x86 サーバー SP からシステム BIOS 構成を出荷時のデフォルトにリセットします。	<code>/System/BIOS</code> <ul style="list-style-type: none"> ■ <code>reset_to_defaults</code> 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 保存または復元の場合は Admin (a) ■ 復元の場合は Reset and Host Control (r)
該当する場合は、x86 サーバー SP から BIOS ブートモードを変更します。	<code>/System/BIOS</code> <ul style="list-style-type: none"> ■ <code>boot_mode</code> 	Admin (a)

関連情報

- 29 ページの「コマンド行インタフェース (CLI) の名前空間ターゲットのナビゲート」

- 「Maintaining x86 BIOS Configuration Parameters」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』
- 「Requirements for BIOS Configuration Tasks」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』

システム健全性ステータスタスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、Oracle ILOM システムおよびコンポーネントレベルの健全性ステータスタスクに適用可能な CLI ターゲットの特定に役立てます。

Oracle ILOM でのシステムの健全性のモニター方法の詳細は、表のあとにある「関連情報」セクションに示すトピックを参照してください。

健全性ステータスタスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
サーバー SP からシステムの詳細を表示します。	/System/ ■ Open_Problems ■ Processors ■ Memory ■ Power ■ Cooling ■ Storage ■ Networking ■ PCI_Devices ■ Firmware ■ BIOS ■ IO_Modules	■ Read only (o)
ブレードシャーシ CMM からシステムの詳細を表示します。	/System/ ■ Open_Problems ■ Blades ■ Power ■ Cooling ■ Storage ■ IO_Modules ■ Firmware	■ Read only (o)
Netra FMM からシステムプロパティを表示します。	/System/ Open_Problems ComputeNodes	■ 表示する場合は Read only (o)

健全性ステータスタスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
	Networking ■ Ethernet_NICs ■ Infiniband_HCAs ■ Switches Firmware Log	
マルチドメイン SPARC サーバーからシステムの詳細を表示します。	/System/ ■ Open_Problems ■ DCU ■ Processors ■ Memory ■ Power ■ Cooling ■ Log	■ 表示する場合は Read only (o)

関連情報

- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)
- 「システムインベントリ、健全性、およびサービスと管理アクションの実行」

イベント、監査、およびシステムログタスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、Oracle ILOM でのログエントリの管理に適用可能な CLI 名前空間ターゲットの特定に役立てます。

Oracle ILOM ログの管理の詳細は、この表のあとにある「関連情報」セクションに示すログ管理トピックを参照してください。

ログ管理タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
サーバー SP、CMM、または FMM から監査ログまたはイベントログのエントリを表示、フィルタ、またはクリアします。	/SP/CMM/FMM/logs/ ■ audit ■ event 注記 - フィルタプロパティ値の一覧については、Oracle ILOM Web インタフェースの「Administration」>「Logs」ページの「More details...」リンクをクリックします。	■ 表示する場合は Read only (o) ■ クリアする場合は Admin (a)
サーバー SP、CMM、または FMM からシステムログエントリを表示またはクリアします。	/System/Log	■ 表示する場合は Read only (o) ■ クリアする場合は Admin (a)

ログ管理タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
syslog サーバーを使用してログの集中管理を設定します。 Oracle ILOM ログのコピーを維持するプライマリおよびセカンダリ syslog サーバーのアドレスまたはドメイン名を設定します。	<code>/SP/CMM/FMM/clients/syslog</code>	■ Admin (a)

関連情報

- [53 ページの「Oracle ILOM のログエントリの管理」](#)
- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)

アラート通知タスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、Oracle ILOM アラート通知規則の管理に適用可能な CLI 名前空間ターゲットの特定に役立てます。

Oracle ILOM でのアラート通知の設定方法の詳細は、この表のあとにある「関連情報」セクションに示すトピックを参照してください。

アラート通知タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
サーバー SP、CMM、または FMM から最大 15 個のアラート通知規則を管理します。 各規則のアラートタイプ、レベル、およびポートの宛先を設定します。	<code>/SP/CMM/FMM/alertmgmt/rules</code> 注記 - SNMP および IPMI アラート通知を処理するために SNMP および IPMI サービスを有効にする必要があります。これらの両方のサービスは、デフォルトで有効になっています。 注記 - 電子メールアラート通知を処理するには、SMTP サーバーを有効にする必要があります。	■ Admin (a)
SMTP サーバーでサーバー SP、CMM、または FMM からの電子メールアラートを構成します。 IP または DNS ホスト名を設定して、電子メールアラートを有効にします。	<code>/SP/CMM/FMM/clients/smt</code>	■ Admin (a)

関連情報

- [「Configure SMTP Client for Email Alerts」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)
- [「Setting Power Consumption Alert Notifications」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)
- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)

ホスト管理タスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、管理対象サーバーでのホスト管理タスクの実行に適用可能な CLI ターゲットの特定に役立てます。

Oracle ILOM でのホスト管理アクションの実行方法の詳細は、表のあとにある「関連情報」セクションに示すトピックを参照してください。

ホスト管理タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
サーバー SP、CMM、または FMM の電源を投入 (起動) または電源を切断 (停止) します。	/System	■ Reset and Host Control (r)
サーバー SP、CMM、または FMM の電源投入をリセットします。	/SP /CMM /FMM	■ Reset and Host Control (r)
サーバー SP、CMM、FMM からシステムロケータ LED をオンまたはオフにします。	/System/locator_indicator	■ Admin (a)
x86 サーバー SP から次のホストブートのブートデバイスを設定します。	/HOST/boot_device 注記 - FMM CLI から完全なブートデバイスパスを発行するには、/HOST/boot_device ターゲットの先頭に /Servers/ComputeNodes/ComputeNode_n を追加します。	■ Reset and Host Control (r)
SPARC サーバー SP からドメインブートデバイスを管理します。 起動時にホストコントローラとゲストドメインの両方に自動ブートを設定します。 起動時にゲストドメインブートを有効または無効にするようにブートゲストを設定します。	/HOST/domain/ ■ configs ■ control 注記 - マルチドメイン SPARC サーバーでホストドメインの完全な CLI パスを発行するには、/HOST ターゲットの先頭に /Servers/PDomains/PDomain_n を追加します。	■ Reset and Host Control (r)
ホスト SPARC サーバーでブート方法プロパティを設定します。	/HOST ■ autostart ■ autorunonerror ■ bootfailrecovery ■ bootrestart ■ bootimeout ■ maxbootfail 注記 - マルチドメイン SPARC サーバーでブート方法の完全な CLI パスを発行するには、/HOST ターゲットの先頭に /Servers/PDomains/PDomain_n を追加します。	■ Reset and Host Control (r)
SPARC サーバーで Trusted Platform Module (TPM) デバイスを設定します。	/HOST/tpm ■ activate ■ enable	■ Reset and Host Control (r)

ホスト管理タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
	<ul style="list-style-type: none"> ■ forceclear ■ mode <p>注記 - TPM プロパティはシステムごとに異なります。サーバーでサポートされている TPM プロパティを特定するには、Help コマンドを使用します。例: help /HOST/tpm</p> <p>注記 - マルチドメイン SPARC サーバーでホスト TPM の完全な CLI パスを発行するには、/HOST/tpm ターゲットの先頭に /Servers/PDomains/PDomain_n を追加します。</p>	

関連情報

- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)
- [「Configuring Host Server Management Actions」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)

リモート KVMS サービス状態タスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、Oracle ILOM KVMS タスクに適用可能な CLI 名前空間ターゲットの特定に役立てます。

Oracle ILOM での KVMS サービスの構成の詳細は、表のあとにある「関連情報」セクションに示すトピックを参照してください。

リモート KVMS タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
SP リモート KVMS サービスを構成します。	<p>/SP/services/kvms</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ servicestate ■ mousemode ■ display_quality ■ lockmode ■ custom_lock_key ■ custom_lock_modifiers <p>注記 - マルチドメイン SPARC サーバーから KVMS サービスの完全な CLI パスを発行するには、/SP/services/kvms ターゲットの先頭に /Servers/PDomains/PDomain_n を追加します。</p>	Admin (a)

リモート KVMS タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
	<p>注記 - CMM から KVMS サービスの完全な CLI パスを発行するには、/SP/services/kvms ターゲットの先頭に /Servers/Blades/Blade_<i>n</i> を追加します。</p> <p>注記 - FMM から KVMS サービスの完全な CLI パスを発行するには、/SP/services/kvms ターゲットの先頭に /Servers/ComputeNodes/ComputeNode_<i>n</i> を追加します。</p>	

関連情報

- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)
- [「Configuring Host Server Management Actions」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)

ホストシリアルコンソールセッションタスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、ホストシリアルコンソールセッションの開始と終了に適用可能な CLI 名前空間ターゲットの特定に役立てます。

注記 - この機能は、テキストのみのシリアルコンソールのリダイレクト用です。Oracle ILOM からのリモートグラフィカルコンソールリダイレクトには、該当するリモートシステムコンソール (Oracle ILOM リモートシステムコンソールまたは Oracle ILOM リモートシステムコンソールプラス) を使用します。

ホストシリアルコンソールタスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
リモートシリアルホストコンソールセッションを表示、開始、または停止します。	<p>/HOST/console</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ bootlog ■ history ■ start ■ stop ■ show <p>注記 - ホストコンソールプロパティはシステムごとに異なります。サーバーでサポートされているホストコンソールプロパティを特定するには、Help コマンドを使用します。例: help /HOST/console</p> <p>注記 - マルチドメイン SPARC サーバーからホストコンソールの完全な CLI パスを発行するには、/HOST/</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ Console (c)

ホストシリアルコンソールタスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
	<p>console ターゲットの先頭に /Servers/PDomains/PDomain_n を追加します。</p> <p>注記 - CMM から KVMS サービスの完全な CLI パスを発行するには、/HOST/console ターゲットの先頭に /Servers/Blades/Blade_n を追加します。</p> <p>注記 - FMM から KVMS サービスの完全な CLI パスを発行するには、/HOST/console ターゲットの先頭に /Servers/ComputeNodes/ComputeNode_n を追加します。</p>	

関連情報

- 29 ページの「コマンド行インタフェース (CLI) の名前空間ターゲットのナビゲート」
- 「Using Remote KVMS Consoles for Host Server Redirection」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x 』

ホスト診断タスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、Oracle ILOM ホスト診断タスクに適用可能な CLI 名前空間ターゲットの特定に役立てます。

ホスト診断の詳細は、表のあとにある「関連情報」セクションに示すトピックを参照してください。

ホスト診断タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
x86 サーバーでホスト診断プロパティを表示または変更します。	<p>/HOST/diag state</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ enabled ■ disabled ■ extended ■ manual ■ set <p>注記 - 診断を実行して表示するには、リモートシステムコンソールを Web インタフェースから起動したあとに、サーバーを再起動します。</p> <p>注記 - CMM からホスト診断の完全な CLI パスを発行するには、/HOST/diag ターゲットの先頭に /Servers/Blades/Blade_n を追加します。</p> <p>注記 - FMM からホスト診断の完全な CLI パスを発行するには、/HOST/diag state ターゲットの先頭に /Servers/ComputeNodes/ComputeNode_n を追加します。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ Reset and Host Control (r)
SPARC サーバーでホスト診断プロパティを表示または変更します。	/HOST/diag	<ul style="list-style-type: none"> ■ Reset and Host Control (r)

ホスト診断タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
	<ul style="list-style-type: none"> ■ error_reset_level ■ error_reset_verbosity ■ hw_change_level ■ hw_change_verbosity ■ level ■ max ■ power_on_level ■ power_on_verbosity ■ trigger ■ verbosity ■ set <p>注記 - SPARC ホスト診断プロパティはシステムごとに異なります。サーバーでサポートされているホスト診断プロパティを特定するには、Help コマンドを使用します。例: help /HOST/diag</p> <p>注記 - マルチドメイン SPARC サーバーからホスト診断の完全な CLI パスを発行するには、/HOST/diag ターゲットの先頭に /Servers/PDomains/PDomain_n を追加します。</p> <p>注記 - 診断を実行して表示するには、リモートシステムコンソールを Web インタフェースから起動したあとに、システムを再起動します。</p>	
M7 または T7 シリーズの SPARC サーバーで SP 診断プロパティを表示または変更します。	<p>/SP/diag</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ default_level ■ hw_change_level <p>注記 - 診断を実行して表示するには、リモートコンソールを Web インタフェースから起動したあとに、システムを再起動します。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ Reset and Host Control (r)

関連情報

- [「Setting Diagnostic Tests to Run」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)
- [「Oracle ILOM 管理対象デバイスのトラブルシューティング」](#)
- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)

障害管理シェルセッションタスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、Oracle ILOM 障害管理シェルの CLI 名前空間ターゲットの特定に役立っています。この表では、すべての管理対象デバイスの /SP ターゲットへの完全な CLI パスは示していません。たとえば、マルチドメイン SPARC サーバー、ブレードシステム CMM、または Netra

FMM から /SP ターゲットにアクセスするには、/SP ターゲットの先頭に該当する CLI プロパティを追加します。

- SPARC マルチドメインサーバーでは、該当する場合に、/Servers/PDomains/PDomain_n を追加します。
- ブレードシステム CMM では、該当する場合に、/Servers/Blades/Blade_n を追加します。
- Netra フレームシステム FMM では、該当する場合に、/Servers/ComputeNodes/ComputeNode_n を追加します。

Oracle ILOM で報告されたすべてのコンポーネントの障害は、サービスを修復するか、コンポーネントを交換すると自動的にクリアされます。Oracle ILOM 障害管理シェルまたは Oracle ILOM で報告された未解決の問題の詳細は、表のあとにある「関連情報」セクションに示すトピックを参照してください。

注記 - Oracle ILOM 障害管理シェルの目的は、Oracle の保守担当者がシステムの問題を診断しやすくすることです。お客様は、Oracle の保守担当者からリクエストがないかぎり、このシェルでコマンドを実行しないでください。

障害管理タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
サーバー SP、CMM、または FMM で障害管理シェルを起動してシステムの問題を診断します (Oracle の保守担当者の指示に従います)。	/SP CMM FMM/faultmgmt/shell	■ Admin (a)

関連情報

- [「Oracle ILOM 障害管理シェルによる Oracle ハードウェア障害の管理」](#)
- [47 ページの「未解決の問題の管理」](#)
- [29 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\) の名前空間ターゲットのナビゲート」](#)

NEM 保守アクションタスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、NEM を取り外すか、サービスに復帰させるための準備に適用可能な CLI 名前空間ターゲットの特定に役立てます。

Oracle ILOM での NEM 保守アクションの実行の詳細は、表のあとにある「関連情報」セクションに示すトピックを参照してください。

NEM 管理タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
ブレードシステムシャーシから NEM の健全性とインベントリの詳細を表示します。	/System/IO_Modules/NEMs ■ health	■ Admin (a)

NEM 管理タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
	<ul style="list-style-type: none"> ■ health_details ■ installed_nems ■ installed_nems ■ max_nems 	
ブレードシステムシャーシから NEM の保守アクションを実行します。	<p>/System/IO_Modules/NEMs/NEM_ <i>n</i></p> <ul style="list-style-type: none"> ■ health ■ model ■ location ■ part_number ■ serial_number ■ action <p>注記 - NEM の取り外しまたはサービスへの復帰のための保守アクションの状態は、Oracle ILOM で管理されるすべてのブレードシステムシャーシ NEM でサポートされているわけではありません。</p>	

関連情報

- [「Reset Power to Server SP, NEM SP, or CMM」 in 『Oracle ILOM Administrator's Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』](#)
- [49 ページの「NEM 保守アクションプロパティ」](#)

SAS ブレードゾーン管理と適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、Oracle ILOM ブレードシャーシ SAS ゾーン管理機能の使用に適用可能な CLI 名前空間ターゲットの特定に役立てます。

Oracle ILOM での SAS ストレージゾーン作成の実行方法の詳細は、表のあとにある「関連情報」セクションに示すトピックを参照してください。

ブレード SAS ゾーンタスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
ブレードシャーシシステムから SAS ストレージを管理します。	<p>/storage/sas_zoning</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ zone_management_state ■ reset_password_action ■ reset_access_action 	Admin (a)

ブレード SAS ゾーンタスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
	注記 - ゾーン作成構成は CMM 構成の一部として保存されます。	

関連情報

- 「SAS Zoning Chassis Blade Storage Resources」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』

CMM ブレード管理タスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、CMM からのブレードサーバーのモニタリングと管理に適用可能な CLI 名前空間ターゲットの特定に役立てます。

Oracle ILOM でのブレードサーバーの管理の詳細は、表のあとにある「関連情報」セクションに示すトピックを参照してください。

ブレード管理タスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
CMM からブレードサーバーをモニターおよび管理します。	/Servers/Blades/Blade_n <ul style="list-style-type: none"> ■ SP ■ SYS ■ ERR ■ PRSNT ■ State ■ VPS 注記 - レガシープロパティは、レガシーサービス状態が有効にされている場合、または ILOM 3.1 以前のファームウェアがインストールされている場合にのみ表示されます。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 役割は管理タスクによって異なります

関連情報

- 29 ページの「コマンド行インタフェース (CLI) の名前空間ターゲットのナビゲート」
- 「Configuring Host Server Management Actions」 in 『Oracle ILOM Administrator’s Guide for Configuration and Maintenance Firmware Release 3.2.x』

CLI レガシーサービス状態タスクと適用可能な CLI ターゲット

次の表を使用して、レガシー Oracle ILOM 3.0 CLI 名前空間ターゲットの特定に役立てます。

注記 - 管理に使用可能なシャーシ SAS-2 ストレージが存在しない場合のみ、/STORAGE ターゲットは CMM 内でレガシーと見なされます。シャーシ内に SAS-2 ストレージが存在する場合、/STORAGE ターゲットが表示されます。

CLI レガシータスク	管理対象デバイス上の CLI プロパティ	必要なユーザーの役割
サーバー SP でレガシー CLI ターゲットを表示します。	/SP/cli ■ legacy_targets 注記 - /SYS および /STORAGE ターゲットは /System ターゲットと同様です。詳細は、Oracle ILOM 3.0 のドキュメントを参照してください。	■ Admin (a)
ブレードシャーシのレガシーターゲットを表示します。	/CMM/cli ■ legacy_targets 注記 - /CH ターゲットは /System ターゲットと同様です。詳細は、Oracle ILOM 3.0 のドキュメントを参照してください。	Admin (a)
FMM レガシーターゲットを表示します。	/FMM/cli ■ legacy_targets	Admin (a)

用語集

A

アクセス制御リスト (ACL)	サーバーにアクセス権限を持つユーザーを制御するソフトウェア承認の仕組み。単独あるいは複数のユーザーまたはグループへアクセスを許可したり拒否したりすることにより、特定のファイルやディレクトリに特化した ACL ルールを定義できます。
Active Directory	Microsoft Windows Server オペレーティングシステムに導入されている分散ディレクトリサービス。ユーザー証明書の認証と、ネットワーク化されたリソースへのユーザーアクセスレベルの認証の両方を提供します。
actual power consumption (実消費電力)	管理対象デバイス (ブレードシャーシ、ラック搭載型サーバー、またはブレードサーバー) によって使用される電力量 (ワット)。
address resolution (アドレス解決)	インターネットアドレスを、物理メディアアクセス制御 (MAC) アドレスまたはドメインアドレスにマップする手段。
address (アドレス)	ネットワークにおいて、ネットワーク内のノードを識別する固有のコード。「host1.companyname.com」などの名前は、ドメインネームサービス (DNS) によって「168.124.3.4」のような、ドットの付いた Quad 表記のアドレスに翻訳されます。
Administrator	管理対象ホストシステムへの完全なアクセス (root) 権限を持っている人。
agent (エージェント)	通常は特定のローカル管理対象ホストに対応しているソフトウェアプロセスで、管理者リクエストを実行し、ローカルのシステムおよびアプリケーション情報をリモートユーザーが使用できるようにします。
alert (警告)	エラーイベントの収集および分析によって生成されたメッセージまたはログ。警告が出た場合、ハードウェアまたはソフトウェアの修正を行う必要があることを意味します。
allocated power (割り当て電力)	管理対象デバイスに割り当てられた最大入力電力 (ワット)。
ARP (アドレス解決プロトコル)	インターネットプロトコル (IP) アドレスをネットワークハードウェアアドレス (MAC アドレス) と関連づけるために使われるプロトコル。

ASF	プリブートまたは帯域外プラットフォーム管理仕様。これにより、インテリジェント Ethernet コントローラなどのデバイスが、マザーボード上の ASF 準拠センサーの電圧や温度その他について自立的にスキャンし、Remote Management and Control Protocol (RMCP) に Platform Event Trap (PET) 仕様に準じた警告を送ることができるようになります。ASF は、そもそも、クライアントデスクトップの帯域外管理機能のためのものでした。ASF は Distributed Management Task Force (DMTF) によって定義されています。
audit log (監査ログ)	ユーザーのログイン、ログアウト、構成変更、パスワード変更など、インタフェース関連のすべてのユーザーアクションを追跡するログ。ユーザー操作を監視するユーザーインタフェースには、Oracle ILOM Web インタフェース、CLI、障害管理シェル (captive shell)、制限付きシェル、SNMP および IPMI クライアントインタフェースが含まれます。
authenticated user (認証されたユーザー)	認証プロセスに合格し、特定のシステムリソースへのアクセス権限を付与されたユーザー。
authentication (認証)	通信セッションにおけるユーザー、または、コンピュータシステムにおけるデバイスやほかのエンティティの属性を、システムリソースへアクセス可能になる前に検証するプロセス。セッション認証は 2 方向に動作します。サーバーは、アクセス制御を判断するためにクライアントの認証を行います。クライアントがサーバーを認証することもできます。クライアントは Secure Sockets Layer (SSL) を使ってサーバーを常に認証します。
authorization (承認)	ユーザーに特定のアクセス権を与えるプロセス。承認は、認証およびアクセス制御に基づいています。
available power (使用可能電力)	ラック搭載型サーバーの場合、使用可能電力は、電源装置が供給できる電力すべての合計です。サーバーモジュールの場合、使用可能電力は、シャーシがサーバーモジュールに供給する用意のある電力の量です。
 B	
bandwidth (帯域幅)	通信リンク上で送信可能な情報量の尺度。通常、あるネットワークが配信可能な秒ごとのビット数として記述されます。
Baseboard Management Controller (ベースボード管理コントローラ)	シャーシ環境や構成、サービス機能を管理し、システムのほかの部品からイベントデータを受信するのに使うデバイス。センサーインタフェースからデータを受信し、そのデータを、インタフェースを提供している SDR を使用して解釈します。BMC を使うことにより、システムイベントログ (SEL) へのまた別のインタフェースができます。BMC の典型的な機能には、プロセッサの温度や電源値、冷却ファンのステータスの測定があります。BMC は、システムの完全性を保つために自立的に動作できます。
baud rate (ボーレート)	たとえば端末とサーバーの間といったデバイス間で送信される情報の速度。
bind (バインド)	LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) において、ユーザーが LDAP ディレクトリにアクセスする際に LDAP が必要とする認証プロセスのこと。認証は、LDAP クライアントが LDAP サーバーに接続する際に行われます。

BIOS (Basic Input/Output System)	システム電源投入時にオペレーティングシステムの読み込みおよびハードウェアのテストを制御するシステムソフトウェア。BIOS は読み取り専用メモリー (ROM) に格納されています。
bits per second (bps)	データ転送速度の単位。
blade server power consumption (ブレードサーバー消費電力)	ローカルコンポーネントによって消費されている電力の合計。
boot loader (ブートローダー)	読み取り専用メモリー (ROM) に格納されているプログラムで、システム電源投入時に自動的に実行され、システム初期化およびハードウェアテストの最初の段階を制御します。その結果、ブートローダーは、オペレーティングシステムの読み込みを行うもっと複雑なプログラムへ制御を移管します。
C	
キャッシュ	ローカルに格納されている元のデータの複製。通常、命令やもっとも頻繁にアクセスされた情報です。キャッシュされたデータは、要求されたときに再度リモートサーバーから読み出す必要がありません。キャッシュによってメモリー転送速度およびプロセッサ速度が上がります。
シャーシ監視モジュール (CMM)	完全なシャーシ管理システムを形成するために、各ブレードのサービスプロセッサ (SP) と連携して動作する、一般に冗長でホットプラグ可能なモジュール。
証明書	エンティティーのアイデンティティーを検証するために、信頼できる認証局 (CA) が割り当てた公開鍵データ。デジタル署名されたドキュメントです。クライアントおよびサーバーの両方が証明書を持つことができます。「公開鍵証明書」とも呼ばれます。
認証局 (CA)	公開鍵証明書を発行しその証明書の所有者の身分証明書を提供する、信頼された組織。公開鍵認証局は、証明書に記載されたエンティティーと、そのエンティティーに属しかつその証明書に記載されている公開鍵との関係を示す証明書を発行します。
CLI (コマンド行インタフェース)	テキストベースのインタフェースで、ユーザーはこれを使用してコマンドプロンプトから実行命令を入力できます。
client (クライアント)	クライアントサーバーモデルにおいて、ネットワーク上のサーバーリソースにリモートでアクセスする、ネットワーク上のシステムまたはソフトウェア。
CMM power consumption	ブレードシャーシの電源装置によって消費されている入力電力の合計。

(CMM 消費電力)

Common Information Model (CIM)	Common Information Model (CIM) は、デバイスおよびアプリケーションの特性を定義するためのコンピュータ業界標準であり、システム管理者と管理プログラムがメーカーやソースの異なるデバイスおよびアプリケーションを同じ方法で制御できるようにします。
console (コンソール)	システムメッセージが表示される、端末または画面上の専用ウィンドウ。コンソールウィンドウによって、数々のサーバーソフトウェアコンポーネントの構成や監視、保守、トラブルシューティングができます。
core file (コアファイル)	プログラムが機能不全となり終了したときに Solaris または Linux オペレーティングシステムが生成するファイル。コアファイルには、障害発生時にとらえられたメモリのスナップショットが入っています。「クラッシュダンプファイル」とも呼ばれます。
critical event (クリティカルイベント)	サービスに深刻な障害を及ぼし早急な対処を必要とするシステムイベント。
CRU (顧客交換可能ユニット)	ユーザーが特別なトレーニングやツールなしで交換できるシステム部品。
UTC (協定世界時)	世界標準時間。UTC は、以前はグリニッジ標準時 (GMT) と呼ばれていました。UTC は、ネットワーク上のシステムとデバイスを同期させるために NTP サーバーが使用します。

D

識別名 (DN)	LDAP において、ディレクトリ内のエントリの名前および位置を識別する、固有のテキスト文字列。DN は、ツリーのルートからの完全なパスを持った完全修飾ドメイン名 (FQDN) である場合もあります。
ディレクトリサーバー	LDAP において、組織内の人員およびリソースに関する情報を論理的な中心位置から格納および提供するサーバー。
ドメイン	名前によって識別する、ホストの系列化。こういったホストは通常、同一インターネットプロトコル (IP) ネットワークアドレスに属します。また、ドメインは、そのドメインを所有している団体または組織を識別する完全修飾ドメイン名 (FQDN) の最後の部分のことを指します。たとえば、「oracle.com」は、Oracle Corporation がドメインの所有者であることを示します。
DDNS (動的ドメインネームサービス)	ドメインネームサーバー (DNS) がドメイン名に関連する動的または静的な IP アドレスを常に把握できるようにするサービス。
DES	データを暗号化および復元する共通アルゴリズム。

DHCP (動的ホスト構成プロトコル)	DHCP サーバーが、TCP/IP ネットワーク上のシステムにインターネットプロトコル (IP) アドレスを動的に割り当てられるようにするプロトコル。
digital signature (デジタル署名)	デジタルデータの情報源の証明書。デジタル署名は、公開鍵暗号化プロセスから導き出される番号です。署名が作成されたあとにデータが改ざんされた場合、その署名は無効となります。このことにより、デジタル署名はデータの完全性およびデータ改ざんの発見を保證できません。
Distributed Management Task Force (DMTF)	200 以上の団体によるコンソーシアムで、コンピュータシステムをリモート管理する能力を高めることを目的とした標準を記述および推進します。DTMF からの仕様には、DMI、CIM、ASF などがあります。
DMA (ダイレクトメモリアクセス)	プロセッサの指示なしで直接メモリーにデータ転送すること。
DMI	コンピュータハードウェアおよびソフトウェアについての技術サポート情報にアクセスするための標準を定めた仕様。DMI は、ハードウェアおよびオペレーティングシステム (OS) から独立で、ワークステーションやサーバー、その他のコンピュータシステムを管理できます。DMI は Distributed Management Task Force (DMTF) によって定義されています。
DNS (ドメインネームサーバー)	ドメインにおいて通常はホスト名を管理するサーバー。DNS サーバーは「www.example.com」などのホスト名を「030.120.000.168」などのインターネットプロトコル (IP) アドレスに変換します。
DNS (ドメインネームシステム)	コンピュータがドメイン名によってネットワークあるいはインターネット上のほかのコンピュータを検索できるようにする、分散型名前解決システム。このシステムでは、「00.120.000.168」などの標準のインターネットプロトコル (IP) アドレスを、「www.oracle.com」などのホスト名と関連付けます。コンピュータは通常、この情報を DNS サーバーから取得します。
domain name (ドメイン名)	インターネット上のシステムあるいはシステムグループに与えられた固有の名前。グループ内のすべてのシステムのホスト名は、「oracle.com」のような、同一のドメイン名接頭辞を含みます。ドメイン名は、右から左に向かって解釈されます。たとえば、「oracle.com」は Oracle Corporation のドメイン名であり、かつ、トップレベルの「.com」ドメインのサブドメインです。
DSA (デジタル署名アルゴリズム)	DSS が規定する暗号化アルゴリズム。DSA は、デジタル署名の作成に使用する標準アルゴリズムです。
E	
EPP (拡張パラレルポート)	標準パラレルポートの 2 倍の速度でシステムがデータを転送できるようにする、ハードウェアおよびソフトウェアの標準。

Ethernet	ケーブルで直接接続されたシステム間のリアルタイム通信を可能にするローカルエリアネットワーク (LAN) の業界標準形式。Ethernet では、アクセス方法として CSMA/CD アルゴリズムを使用しており、全ノードが待機していて、かつ、いずれのノードもデータ転送を開始できます。複数のノードが同時にデータ転送をしようとする場合には (衝突)、転送しようとしているノードが任意の時間待ってからふたたび転送を試みます。
event log (イベントログ)	コンポーネントの追加または削除、あるいはコンポーネントの障害など、管理対象デバイスに関する情報、警告、またはエラーメッセージを追跡するログ。ログに記録されるイベントのプロパティには、イベントの重要度、イベントプロバイダ (クラス)、イベントが記録された日付と時間などがあります。
event (イベント)	管理対象オブジェクトの状態の変化。イベント処理サブシステムは通知を出すことができます。ソフトウェアシステムは、この通知に応答する必要がありますが、通知の要求や制御は行いません。
exhaust temperature (排気温度)	サーバーまたはシャーシの背面から出る空気の温度。
external serial port (外部シリアルポート)	サーバーの RJ-45 シリアルポート。
XIR	ドメインのプロセッサに「ソフト」リセットを送る信号。XIR はドメインのリブートは行いません。XIR は通常、ハングしたシステムから脱出してユーザーがコンソールプロンプトにたどり着くために使用されます。そうすることにより、ユーザーはコアダンプファイルを作成して、それをシステムがハングした原因の診断に役立てることができます。
F	
完全修飾ドメイン名 (FQDN)	「www.oracle.com」のような、システムの完全かつ一意のインターネット名。FQDN には、ホストサーバー名 (www) とそのトップレベルドメイン名 (.com) および第 2 レベルドメイン名 (.oracle) が含まれます。FQDN はシステムのインターネットプロトコル (IP) アドレスにマップすることができます。
ファームウェア	通常、システムの初期ブート段階およびシステム管理をサポートするのに使用されるソフトウェア。ファームウェアは読み取り専用メモリー (ROM) またはプログラム可能 ROM (PROM) に組み込まれています。
failover (フェイルオーバー)	冗長機能を提供するために、あるシステム、または多くの場合サブシステムから、別のシステムへコンピュータサービスを自動的に移管すること。
Fast Ethernet	最大 100 Mbps でデータを転送する Ethernet 技術。Fast Ethernet は 10 Mbps Ethernet 機器と下位互換性があります。

Fault Manager shell (障害管理プログラムシェル)	Oracle の保守担当者がシステムの問題を診断できるようにするユーザーインターフェース。Oracle の保守担当者からリクエストされた場合にのみ、ユーザーはこのシェルでコマンドを実行できます。
Fault Manager (障害管理プログラム)	ハードウェア障害の発生時にそれらを診断するだけでなく、システムハードウェアの健全性を予防保守的に監視できるようにする、Oracle ILOM の機能。コンポーネントが障害状態のときに、障害イベントが Oracle ILOM の「Open Problems」テーブルとイベントログに収集されます。
fault (障害)	ハードウェアまたはソフトウェアで検出されたエラー条件。
faulted state (障害状態)	コンポーネントは存在しているが、Oracle ILOM で 1 つ以上の問題が診断されたために使用できないか機能低下していることを示すインジケータ。システムにそれ以上の損害を与えないために、Oracle ILOM は自動的にコンポーネントを無効にします。
file system (ファイルシステム)	情報を物理メディアに整理して格納する、安定した方法。通常、ファイルシステムはオペレーティングシステムごとに異なります。ファイルシステムは、ファイルおよびディレクトリのツリー構造ネットワークであることが多く、最上位にはルートディレクトリが、ルート以下には親および子ディレクトリがあります。
firewall (ファイアウォール)	通常はハードウェアおよびソフトウェア両方のネットワーク構成で、組織内のネットワークコンピュータを外部アクセスから保護します。ファイアウォールは、特定のサービスやホスト間で行き来する接続を監視または禁止できます。
FMA (障害管理アーキテクチャー)	ハードウェアまたはソフトウェアの障害が発生してもコンピュータが機能し続けられるようにするアーキテクチャー。
FRU (現場交換可能ユニット)	顧客サイトで交換可能なシステム部品。
FTP	TCP/IP に基づいた基本的なインターネットプロトコル。これを使うと、ファイル転送に関連するシステムのオペレーティングシステムやアーキテクチャーにこだわることなく、インターネット上のシステム間でファイルの読み取りや保存ができます。
G	
ゲートウェイ	2 つのネットワークを相互接続し、そのネットワーク間でデータパケットを渡すコンピュータまたはプログラム。ゲートウェイには 2 つ以上のネットワークインターフェースがあります。
Gigabit Ethernet (ギガビット Ethernet)	最大 1000 Mbps でデータを転送する Ethernet 技術。

grant limit (許可制限)	CMM がブレードスロットに許可できる電力 (ワット) の最大合計。
grantable power (許可可能電力)	許可制限を超えることなく CMM から Oracle ブレードシャーシスロットに割り当て可能な残りの電力 (ワット) の合計。
granted power (許可された電力)	電力を必要としているすべてのブレードスロットまたは電力を必要としている個別のブレードスロットに CMM が許可した電力 (ワット) の最大合計。
GUI (グラフィカルユーザーインターフェース)	アプリケーションを使いやすくするために、キーボードおよびマウスに加えてグラフィックスを使用したインターフェース。

H

health status states (健全性の状態)	管理対象デバイスの健全性を示すインジケータ。示す可能性があるステータスは、「OK」、「Service Required」、「Not Available」、および「Offline」です。
host ID (ホスト ID)	ネットワーク上のホストを識別するのに使用する 32 ビットのインターネットプロトコル (IP) アドレスの一部。
host name (ホスト名)	ドメイン内の特定のコンピュータの名前。ホスト名は常に特定のインターネットプロトコル (IP) アドレスへマップします。
host (ホスト)	インターネットプロトコル (IP) アドレスおよびホスト名を割り当てられた、バックエンドサーバーなどのシステム。ホストは、ネットワーク上のほかのリモートシステムからアクセスされます。
hot-plug (ホットプラグ)	システム稼働中に取り外しをしても安全な部品のこと。ただし、部品を取り外す前に、システム管理者はシステムに対してホットプラグ操作の準備を行う必要があります。新しい部品を挿入したあとで、システム管理者はそのデバイスを含めてシステムを再構成するよう、システムに指示する必要があります。
hot-swap (ホットスワップ)	稼働中のシステムから部品を取り外したり新しい部品を取り付けたりするだけで、取り付けまたは取り外しができる部品のこと。部品が変更されたことをシステムが自動的に認識して構成を行うか、システムの構成をユーザーが対話的に行う必要があるかのどちらかです。ただし、いずれの場合もリブートの必要はありません。ホットスワップ可能なコンポーネントはすべてホットプラグ可能ですが、ホットプラグ可能なコンポーネントがすべてホットスワップ可能であるとは限りません。
HTTP (ハイパーテキスト転送プロトコル)	リモートホストからハイパーテキストオブジェクトを取り込むインターネットプロトコル。HTTP メッセージは、クライアントからサーバーへのリクエストおよびサーバーからクライアントへの応答から構成されます。HTTP は TCP/IP に基づいています。

Hypertext Transfer Protocol Secure (HTTPS)	Secure Sockets Layer (SSL) を使用した HTTP の拡張。TCP/IP ネットワーク上でのセキュア転送を可能にします。
I	
インターネットプロトコル (IP)	インターネットの基本的ネットワークレイヤープロトコル。IP は、あるホストから別のホストに対し、信頼性が低い状態での個々のパケットの送信を可能とします。IP では、パケットが配信されるかどうかや配信にかかる時間、また、複数のパケットが送信されたとおりの順序で配信されるかどうかについて、保証していません。IP の上に階層化されたプロトコルにより、接続の信頼性が高まります。
ICMP	ルーティング、信頼性、フロー制御、データの順序づけなどを提供する、インターネットプロトコル (IP) に対する拡張機能。ICMP は、IP で使用されるエラーおよび制御メッセージを指定します。
in-band system management (帯域内システム管理)	オペレーティングシステムが初期化されていて、かつ、サーバーが正常に機能している場合のみ使用可能な、サーバー管理機能。
inlet air temperature (吸気温度)	サーバーまたはシャーシの前面に入る温度。
input power (入力電力)	外部電源からシャーシの電源ユニットに入る電力。
installed hardware minimum (取り付けられているハードウェアの最小値)	サーバーに取り付けられているハードウェアコンポーネントによって消費されている入力電力 (ワット) の最小量。
Integrated Lights Out Manager (ILOM)	シャーシ内またはブレード内でのシステム管理のための、ハードウェアやファームウェア、ソフトウェアの統合ソリューション。
internal serial port	Oracle ILOM ユーザーがホストのシリアルコンソールにアクセスできるようになる、ホストサーバーと Oracle ILOM 間の接続。Oracle ILOM の内部シリアルポートの速度は、ホストサーバーのシリアルコンソールポート (多くの場合シリアルポート 0、COM1、または /dev/

(内部シリアルポート) ttyS0 と呼ばれる) の速度と同じである必要があります。通常、ホストのシリアルコンソール設定は、Oracle ILOM のデフォルト設定 (9600 ボー、8N1 (データビット 8、パリティなし、ストップビット 1)、フロー制御なし) に一致しています。

Internet Protocol (IP) address (インターネットプロトコル (IP) アドレス) TCP/IP において、ネットワーク上の各ホストまたはほかのハードウェアシステムを認識する、固有の 32 ビットの数字。IP アドレスは、「192.0.2.1」のようにドットで区切られた数字のセットで、イントラネットまたはインターネット上でのコンピュータの実際の位置を指定します。

IPMI 多くの異なる物理的相互接続上のサーバーシステムの帯域外管理のために主に設計された、ハードウェアレベルのインタフェース仕様。IPMI 仕様には、センサーに関する幅広い抽象概念が記載されています。これによって、オペレーティングシステム (OS) 上またはリモートシステム内で実行されている管理アプリケーションは、システム的环境構成を把握でき、システムの IPMI サブシステムに登録してイベントを受信できるようになります。IPMI は異なるベンダー製の管理ソフトウェアと互換性があります。IPMI の機能には、現場交換可能ユニット (FRU) インベントリのレポート、システムモニタリング、ロギング、システム復旧 (ローカルおよびリモートシステムのリセットと電源投入/電源切断の機能も含む)、警告などがあります。

IPMItool IPMI デバイスの管理に使用するユーティリティ。IPMItool では、ローカルシステムまたはリモートシステムのどちらの IPMI 機能も管理できます。機能には、現場交換可能ユニット (FRU) 情報やローカルエリアネットワーク (LAN) 構成、センサー読み取り、リモートシステム電源制御の管理などがあります。

J

Java Remote Console (Java リモートコンソール) 実行中のアプリケーションにユーザーをアクセスできるようにする、Java で記述されたコンソール。

Java Web Start application (Java Web Start アプリケーション) Web アプリケーション起動ツール。Java Web Start では、Web リンクをクリックすることによってアプリケーションを起動します。そのアプリケーションが手元のシステムにない場合には、Java Web Start はアプリケーションをダウンロードし手元のシステム上にキャッシュします。アプリケーションは、いったんキャッシュにダウンロードすれば、デスクトップアイコンまたはブラウザから起動できるようになります。

K

kernel (カーネル) オペレーティングシステム (OS) の核心で、ハードウェアを管理し、ファイリングおよびリソース割り当てといった、ハードウェアが提供していない基本的サービスを管理します。

Keyboard Controller Style (KCS) interface (KCS インタフェース) レガシーパーソナルコンピュータ (PC) のキーボードコントローラに実装されているインタフェースの形式。データは、バイトごとのハンドシェイクを使って KCS インタフェース全体に転送されます。

KVMS (キーボード、ビデオ、マウス、ストレージ) キーボードやビデオ、マウス、ストレージイベントにシステムが応答できるようにする一連のインタフェース。

L

LAN (ローカルエリアネットワーク) 接続するハードウェアおよびソフトウェア経由で通信できる、至近距離にあるシステムの集まり。LAN 技術では Ethernet がもっとも広範に使われます。

LDAP ユーザープロファイルや配布一覧、構成データなどの情報の格納、取り出し、配布に使用するディレクトリサービスプロトコル。LDAP は TCP/IP 上で複数のプラットフォームに渡って動作します。

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) server (LDAP サーバー) LDAP ディレクトリおよびそのディレクトリへのサービスクエリーを保守するソフトウェアサーバー。Oracle Directory Services および Netscape Directory Services は、LDAP サーバーの実装です。

local host (ローカルホスト) ソフトウェアアプリケーションが動作しているプロセッサまたはシステム。

LOM オペレーティングシステムが動作していなくてもサーバーとの帯域外通信を可能にする技術。これによってシステム管理者は、サーバーの電源オン/オフをしたり、システム温度やファン速度などを見たり、リモートロケーションからシステムを再起動できます。

M

管理対象システム ドキュメント内で使用する場合は次のいずれかの Oracle ハードウェアシステムを指します。Oracle ラックマウントサーバー、Oracle ブレードサーバー、Oracle ブレードシャーシ。

最大許容電力 「許容ピーク」を参照してください。

マニュアルページ	オンライン UNIX ドキュメント。
メディアアクセス制御 (MAC) アドレス	各ローカルエリアネットワークインタフェースカード (NIC) に製造時にプログラムされる、世界で唯一の 48 ビットハードウェアアドレス番号。
major event (メジャーイベント)	システムイベントのうち、深刻ではないがサービスに障害を与えるもの。
Message Digest 5 (MD5)	任意の長いデータ文字列を一意で固定サイズの短いダイジェストデータに変換する、セキュアなハッシュ関数。
MIB (管理情報ベース)	ネットワークのリソースについての情報を分類する、ツリーに似た階層システム。MIB では、マスター SNMP エージェントがアクセス可能な変数を定義しています。MIB によって、サーバーのネットワーク構成やステータス、統計データにアクセスできる。SNMP を使うと、こういった情報をネットワーク管理ステーション (NMS) から見るすることができます。業界協定により、各ディベロッパーにはツリー構造の一部分が割り当てられ、そこにディベロッパー独自のデバイスに特化した記述を加えることもできます。
minor event (マイナーイベント)	システムイベントのうち、現時点でサービスに障害は発生していないが、さらに深刻になる前に修正を必要とするもの。
N	
namespace (ネームスペース)	LDAP ディレクトリのツリー構造における固有の名前のセットで、この名前からオブジェクト名が由来して解釈されます。たとえば、ファイルはファイルネームスペース内で命名され、プリンタはプリンタネームスペース内で命名されます。
network mask (ネットワークマスク)	ローカルサブネットアドレスをほかの既知のインターネットプロトコル (IP) アドレスから区別するためにソフトウェアが使用する番号。
NFS	ユーザーに気づかせることなく、各種ハードウェア構成を協調して機能させるプロトコル。
NIC (ネットワークインタフェースカード)	ワークステーションやサーバーをネットワークデバイスに接続する内部回路基盤またはカード。
NIS	UNIX システムが使用する、プログラムおよびデータファイルのシステム。コンピュータシステムネットワーク全体のコンピュータ、ユーザー、ファイルシステム、およびネットワークパラメータに関する特定の情報の収集、照合、および共有のために使用します。

NMS (ネットワーク管理ステーション)	1 つまたは複数のネットワーク管理アプリケーションがインストールされた高性能なワークステーション。NMS はネットワークをリモート管理するのに使用されます。
node (ノード)	ネットワーク上でアドレス参照可能なポイントまたはデバイス。ノードにより、コンピュータシステムや端末、各種周辺機器をネットワークに接続できます。
nonvolatile memory (非揮発性メモリ)	システム電源がオフになったときにデータが失われないことを保証するメモリの種類。
notification threshold (通知しきい値)	警告通知をトリガーする消費電力量 (ワット) を定義する値。
NTP	TCP/IP ネットワークのインターネット標準。NTP は、UTC を使用して、ネットワークデバイスのクロック時間を NTP サーバーのミリ秒に同期します。
O	
オブジェクト識別子 (OID)	グローバルオブジェクト登録ツリーにおけるオブジェクトの位置を識別する番号。ツリーのノードにはそれぞれ番号が割り当てられ、OID は一連の番号となっています。インターネットでの使用では、OID 番号はたとえば「0.128.45.12」といったようにドットで区切られます。LDAP において、OID は、オブジェクトクラスおよび属性タイプなどのスキーマ要素を一義的に識別するために使用されます。
open problem (未解決の問題)	管理対象デバイスに問題または障害状態が検出されたことを示すインジケータ。Oracle ILOM は、「Open Problems」Web ページまたは表形式の「Open Problems」CLI 出力で問題を特定します。
OpenBoot PROM	電源投入時の自己診断テスト (POST) が部品のテストを問題なく終了したあとに、初期化されたシステムを制御するソフトウェアレイヤー。OpenBoot PROM は、メモリーにデータ構造を構築してオペレーティングシステムをブートします。
OpenIPMI	Intelligent Platform Management Interface (IPMI) へのアクセスを容易にする、オペレーティングシステムから独立したイベント駆動型ライブラリ。
Operator (オペレータ)	管理対象ホストシステムへの制限付き権限を持つユーザー。
Oracle ILOM Remote System Console (Plus)	ユーザーがデバイス (キーボード、マウス、ビデオディスプレイ、ストレージメディア) をデスクトップからリモートホストサーバーにリダイレクトできるようにするグラフィカルリモートコンソール機能。

out-of-band (OOB) system management (帯域外 (OOB) システム管理) オペレーティングシステムのネットワークドライバまたはサーバーが正常に機能していないときに使用可能なサーバー管理機能。

output power (出力電力) 電源ユニットからシャーシコンポーネントに供給される電力量。

P

アクセス権 ユーザーまたはグループに許可あるいは拒否される権限のセットで、ファイルまたはディレクトリへの読み込みや書き込み、実行といったアクセスを指定します。アクセス制御のために、アクセス権には、そのディレクトリ情報へのアクセスが許可されているのか拒否されているのか、および、許可あるいは拒否されているアクセスのレベルが記載されています。

許容消費電力 任意の時点でサーバーに使用を許可される最大電力 (ワット)。

電源投入時自己診断 (POST) システムの起動時に初期化されていないシステムハードウェアおよびプローブを受け取り、部品を丹念に調べてテストするプログラム。POST は、有用な部品を首尾一貫した初期化済みシステムとして構成し、そのシステムを OpenBoot PROM に渡します。POST は、テストが成功した部品のみの一覧を OpenBoot PROM に渡します。

物理アドレス メモリーの位置と一致する実際のハードウェアアドレス。仮想アドレスを参照するプログラムは、あとで物理アドレスへとマップされます。

プラットフォームイベントフィドルタ (PEF) サービスプロセッサが、たとえば電源切断やシステムのリセット、警告のトリガーなどといったイベントメッセージを受信したときに、特定の動作をするように構成する仕組み。

プロトコル ネットワーク上のシステムまたはデバイスが情報を交換する方法を記述した規則セット。

parity (パリティ) 受信したデータが送信されたデータと一致するかどうかを検査するのにコンピュータが使用する方法。また、ディスク上のデータと一緒に格納されている情報も指し、これを使用すると、ドライブ障害発生後にコントローラがデータを再構築できます。

Pc-Check Eurosoft (UK) Ltd. によって作成された、コンピュータハードウェア上で診断テストを実行するアプリケーション。

peak permitted (許容ピーク) 管理対象デバイスが消費できる最大電力 (ワット)。

PET	ハードウェアまたはファームウェア (BIOS) イベントによってトリガーされる構成済み警告。PET は Intelligent Platform Management Interface (IPMI) 仕様の SNMP トラップで、オペレーティングシステムから独立で動作します。
port number (ポート番号)	ホストマシン上の個別の TCP/IP アプリケーションを指定する番号で、送信データの宛先を定めます。
port (ポート)	TCP/IP 接続が確立される場所 (ソケット)。Web サーバーは従来からポート 80 を使用し、ファイル転送プロトコル (ftp) はポート 21 を、Telnet はポート 23 を使用します。ポートによって、クライアントプログラムは、ネットワーク上のコンピュータの特定のサーバプログラムを指定できます。サーバプログラムは、はじめて起動したときに、指定されたポート番号にバインドします。そのサーバを使用しようとするすべてのクライアントは、指定されたポート番号にバインドするためにリクエストを送る必要があります。
power allocation plan (電力割り当て計画)	単一の管理対象デバイスまたは管理対象デバイスに取り付けられている個々のコンポーネントに割り当てられた正確な電力メトリックをユーザーが効果的に監視および取得できるようにする機能。これはエネルギー効率の高いデータセンターを計画するのに役立ちます。
power consumption (消費電力)	管理対象デバイスによって消費される入力電力または電源ユニット (PSU) から供給される出力電力を示す値。
power cycling (電源の再投入)	システムの電源をオフにしてからふたたびオンにするプロセス。
Power Monitoring interface (電源監視インタフェース)	ユーザーが電力消費をリアルタイムで監視できるようにするインタフェース。この電力消費には、使用可能電力、実電力、および許容電力が含まれ、サービスプロセッサ (SP) または個別の電源装置について、電力使用の発生から 1 秒以内の精度で監視できます。
power supply maximum (電源装置の最大値)	電源装置が消費できる入力電力 (ワット) の最大量。
Preboot Execution Environment (PXE)	業界標準クライアントサーバインタフェースで、Dynamic Host Configuration Protocol (DHCP) を使用して Transmission Control Protocol/Internet Protocol (TCP/IP) ネットワーク上のオペレーティングシステム (OS) をサーバがブートできるようにします。PXE 仕様には、プライマリブートストラッププログラムに基本的なネットワーク機能を提供するように、ネットワークアダプタカードおよび BIOS を協調して動作させる方法が記述されており、これによって、プライマリブートストラッププログラムが、OS イメージの TFTP を介したロードなど、ネットワーク上でセカンダリブートストラップを実行できるようになります。したがって、プライマリブートストラッププログラムは、PXE 標準に従ってコーディングされている場合、システムのネットワークハードウェアについての情報を必要としません。

Privacy Enhanced Mail (PEM)	プライバシーとデータの完全性を保証するようにデータを暗号化した、インターネット電子メールの標準。
proxy (プロキシ)	プロトコルのリクエストに応答して、あるシステムがほかのシステムの代理として動作する仕組み。
public key encryption (公開鍵暗号)	公開および非公開のコンポーネントで作成された 2 つの部分からなる鍵 (コード) を使用する暗号方式。メッセージを暗号化するには、受取人の公表された公開鍵を使用します。メッセージを解読するには、受取人は、受取人のみが知っている非公開の秘密鍵を使用します。公開鍵を知っていても、対応する秘密鍵を推測することはユーザーにはできません。

R

rackmount server power consumption (ラック搭載型サーバー消費電力)	ラック搭載型シャーシ電源装置によって消費されている入力電力の合計。
real-time power monitoring (リアルタイム電力監視)	ハードウェアインタフェース (CMM、SP、PSU など) をポーリングすることによって、1 秒以内の精度で消費電力メトリックを継続的に更新する機能。
reboot (リブート)	システムを停止してブートする、オペレーティングシステムレベルの操作。電源が入っていることが前提条件です。
redirection (出力先変更)	システムの標準入出力へではなく、ファイルまたはデバイスへの入出力のチャネリング。出力先変更の結果、システムが通常表示する入出力をほかのシステムのディスプレイに送ります。
redundant power (冗長電力)	ブレードシャーシ電源装置に現在割り当てられていない使用可能電力 (ワット)。
Remote Authentication Dial-In User Service (RADIUS)	サーバー上のデータベースに含まれている情報に照らしてユーザーを認証し、承認されたユーザーにリソースへのアクセス権限を付与するプロトコル。
Remote Management and Control	システムの電源の投入または切断、あるいはリブートを強制することにより、管理者がリモートで警告に応答できるようにするネットワークプロトコル。

**Protocol
(RMCP)**

remote system (リモートシステム)	ユーザーが作業しているシステム以外のシステム。
required power (必要電力)	すべてのブレードスロットまたは個別のブレードスロットに必要な電力 (ワット) の最大合計。
reset (リセット)	システムの電源を切断してから投入する、ハードウェアレベルの操作。
role (役割)	ユーザーのアクセス権利を決定する、ユーザーアカウントの属性。
root	UNIX オペレーティングシステムのスーパーユーザー (root) の名前。root ユーザーは、全ファイルへのアクセス、および、一般ユーザーには許可していないほかの操作を実行することが許可されています。大まかに言うと、Windows Server オペレーティングシステムの管理者 (Administrator) ユーザー名と同等です。
root directory (ルートディレクトリ)	ベースディレクトリで、ほかのすべてのディレクトリは直接あるいは間接的にここから生じます。
router (ルーター)	ネットワークパケットまたはその他のインターネットトラフィックを送るパスを割り当てるシステム。ホストとゲートウェイの両方がルーティングを行いますが、通常、「ルーター」という用語は、2つのネットワークを接続するデバイスを指します。
RPC (リモート手続き呼び出し)	クライアントシステムがリモートサーバーの関数を呼び出せるようにする、ネットワークプログラミングの方法。クライアントがサーバーでプロシージャールを開始すると、その結果がクライアントに転送されて戻ります。
RSA algorithm (RSA アルゴリズム)	RSA Data Security 社が開発した暗号化アルゴリズム。暗号およびデジタル署名の両方に使用できます。
RTC (リアルタイムクロック)	システムの電源オフ時にできえもシステムの時間と日付を維持する、バッテリーバックアップ式の部品。

S

サブネット	組織のネットワークを識別可能な方法で分割した部分。サブネットを使用すると、ルーティングを単純化するために、単一の論理ネットワークを複数の小さな物理ネットワークに分割できます。
--------------	---

	サブネットはホスト ID のブロックを認識するインターネットプロトコル (IP) アドレスの部分です。
スナップショットユーティリティー	サーバープロセッサ (SP) の状態に関するデータを収集するアプリケーション。Oracle Services では、このデータを診断目的で使用します。
schema (スキーマ)	ディレクトリにエントリとして格納できる情報の種類を記述している定義。スキーマと一致しない情報がディレクトリに格納されている場合、ディレクトリにアクセスしようとしているクライアントは正しい結果を表示できないことがあります。
SDR (センサーデータレコード)	機能の動的発見を容易にするために、Intelligent Platform Management Interface (IPMI) には、このレコードセットがあります。これには、存在するセンサー数、センサーの種類、センサーのイベント、しきい値情報などのソフトウェア情報が含まれます。センサーデータレコードによって、ソフトウェアは、プラットフォームについての予備知識がなくてもセンサーデータの解釈および提示ができます。
Secure Shell (SSH)	セキュアでないネットワーク上のリモートシステムで、セキュアで暗号化されたログインおよびコマンドの実行を可能にする、UNIX シェルプログラムおよびネットワークプロトコル。
Secure Sockets Layer (SSL)	ネットワーク上のクライアントサーバー通信をプライバシーのために暗号化するプロトコル。SSL は、環境を確立するために鍵交換方式を使い、この方式では、交換されたデータすべては、盗聴や改ざんから保護するために暗号で暗号化されかつハッシュ化されています。SSL は Web サーバーと Web クライアントの間にセキュアな接続を作り出します。HTTPS では SSL を使用しています。
SEL (システムイベントログ)	システムイベント用の非揮発性ストレージを供給するログで、サービスプロセッサにより自発的に記録されるか、またはイベントメッセージと一緒にホストに直接送付されます。
serial console (シリアルコンソール)	サービスプロセッサのシリアルポートに接続された端子または導線。シリアルコンソールは、システムがほかの管理タスクを行うように構成するために使用されます。
serial port (シリアルポート)	シリアルポートリダイレクトを使用して、コマンド行インタフェース (CLI) およびシステムコンソールストリームへのアクセスを提供するポート。
server certificate (サーバー証明書)	Web アプリケーションを認証するために Hypertext Transfer Protocol Secure (HTTPS) で使用する証明書。証明書は、自身で署名したものあるいは認証局 (CA) が発行したものと なります。
Server Message Block (SMB) protocol (サーバーメッセージブロック)	ファイルおよびプリンタをネットワーク全体で共有できるようにするネットワークプロトコル。SMB プロトコルによって、クライアントアプリケーションが、ネットワーク内のサーバープログラムのファイルの読み書きおよびサーバープログラムからのサービスのリクエストができるようになります。SMB プロトコルを使うと、Windows と UNIX システムの間でファイルシステムをマウントできます。SMB プロトコルは、IBM によって設計されたあとにマイクロソフトによって変更が加え

(SMB) プロトコル	られ、マイクロソフトは、このプロトコルの名前を共通インターネットファイルシステム (CIFS) に変更しました。
session time-out (セッションタイムアウト)	サーバーがユーザーセッションを無効にするまでの一定の時間。
SMTP	メール送受信に使用する TCP/IP。
SNMP	ネットワークの動作状態についてのデータ交換に使用する簡単なプロトコル。SNMP では、管理対象デバイスとネットワーク管理ステーション (NMS) との間でデータがやりとりされます。管理対象デバイスには、ホストやルーター、Web サーバー、またはネットワーク上のその他のサーバーなどの、SNMP が動作しているいずれのデバイスも含まれます。
SP (サービスプロセッサ)	シャーシ環境や構成、サービス機能を管理し、システムのほかの部品からイベントデータを受信するのに使うデバイス。センサーインタフェースからデータを受信し、そのデータを、インタフェースを提供している SDR を使用して解釈します。SP を使用すると、システムイベントログ (SEL) への別のインタフェースが提供されます。SP の典型的な機能には、プロセッサの温度や電源値、冷却ファンのステータスの測定があります。SP は、システムの完全性を保つために自立的に動作できます。
SSO (シングルサインオン)	ユーザーが複数のアプリケーションにアクセスするために証明書を 1 回入力する認証形式。
subnet mask (サブネットマスク)	サブネットアドレッシングのためにインターネットアドレスからビットを選択するのに使うビットマスク。マスクは 32 ビット長で、インターネットアドレスのネットワーク部分およびローカル部分の 1 つまたは複数のビットを選択します。「アドレスマスク」とも呼ばれます。
Sun Blade Modular System (Sun Blade モジュラーシステム)	複数の Oracle ブレードサーバーモジュールを保持するシャーシ。
Sun blade server module (Sun ブレードサーバーモジュール)	シャーシに差し込むことができるサーバーモジュール (ブレード) で、モジュラーシステムとも呼ばれます。
superuser (スーパーユーザー)	UNIX システムですべての管理機能を実行する権限を持っている特別なユーザー。「ルート (root)」とも呼ばれます。
syslog	ログメッセージをサーバーに送信できるプロトコル。
system identifier (システム識別子)	ホストシステムを識別しやすくするテキスト文字列。この文字列は、SUN-HW-TRAP-MIB から生成される SNMP トラップに varbind として含まれています。システム識別子は任意の文字列に設定できますが、ホストシステムを識別しやすくするために使用するのがもっとも一般

的ですが、ホストシステムは、場所の説明によって識別するか、ホストのオペレーティングシステムが使用するホスト名を参照することによって識別できます。

T

しきい値	センサーが温度や電圧、電流、ファン速度を監視する際にこの範囲内で使用する最大値および最小値。
ターゲット制限	Oracle サーバーに設定され、そのサーバーで許可される電力バジェットパラメータを (ワットまたはパーセントで) 決定する値。
ターゲット名前空間	Oracle ILOM コマンド行インタフェースにおいて、システム内のすべての管理対象オブジェクトを含む階層型の定義済みツリー。詳細は、 namespace (ネームスペース) を参照してください。
target (ターゲット)	Oracle ILOM コマンド行インタフェースにおいて、CLI ネームスペース内のすべてのオブジェクト。
TCB	接続状態についての情報を記録して保守する TCP/IP の一部。
TCP/IP	あるホストから別のホストへデータストリームを確実に送信できるインターネットプロトコル。TCP/IP は、Oracle Solaris や Microsoft Windows、Linux ソフトウェアシステムといった各種のネットワークシステム間でデータを転送します。TCP はデータ配信を保証し、パケットは送信されたときのままのシーケンスで配信されます。
Telnet	あるホストのユーザーがリモートホストにログインできるようにする仮想端末プログラム。リモートホストにログインしているあるホストの Telnet ユーザーは、そのリモートホストの通常の端末ユーザーのように対話できます。
TFTP	システムにファイルを転送する簡単なトランスポートプロトコル。TFTP は UDP を使用しています。
time-out (タイムアウト)	サーバーが、この時間を過ぎたら、ハングアップしたサービスルーチンを終了しようとする試みを停止するように指定された時間。
trap (トラップ)	特定の状態が検知されたときに SNMP エージェントが自らの主導権で作成するイベント通知。SNMP には形式的に 7 種のトラップが定義されていて、サブタイプを定義できます。

U

UDP	インターネットプロトコル (IP) に信頼性と多重化をもたらすコネクションレス型のトランスポートレイヤープロトコル。UDP によって、アプリケーションプログラムは、IP 経由でほかのコンピュータのほかのアプリケーションプログラムにデータグラムを配信できます。通常、SNMP が UDP 上に実装されます。
unfilled grant	シャーシモニタリングモジュールがシャーシブレードスロットに許可するようにリクエストされている、まだ許可されていない電力 (ワット) の合計。

requests (満たされていない許可リクエスト)

URI (Uniform Resource Identifier)

インターネットまたはイントラネット上のリソースを識別する一意の文字列。

USB (ユニバーサルシリアルバス)

450 Mbps (USB 2.0) のデータ転送レートをサポートする外部バス標準。USB ポートは、マウスポインタなどのデバイスをコンピュータシステムに接続します。

user account (ユーザーアカウント)

システムに格納されている、不可欠なユーザー情報レコード。システムにアクセスするユーザーはそれぞれユーザーアカウントを 1 つ持ちます。

user identification number (UID number) (ユーザー ID 番号 (UID 番号))

UNIX システムにアクセスしているユーザーにそれぞれ割り当てられる番号。システムが、ファイルおよびディレクトリの所有者を番号によって識別するのに UID 番号を使用します。

user identification (userid) (ユーザー ID (userid))

システムのユーザーを識別する固有の文字列。

user name (ユーザー名)

システムでユーザーを識別する、文字または場合によっては番号の組み合わせ。

user privilege levels (ユーザー権限レベル)

ユーザーが実行できる操作とアクセスできるリソースを指定する、ユーザーの属性。

W

広域ネットワーク (WAN)

ファイル転送サービスを提供する数多くのシステムから構成されるネットワーク。WAN は広い物理範囲に、場合によっては世界中に及びます。

Web サーバー インターネットまたはイントラネットにアクセスするためのサービスを提供するソフトウェア。Web サーバーは Web サイトをホストし、HTTP-HTTPS およびその他のプロトコルをサポートし、サーバー側プログラムを実行します。

X

X.509 certificate (X.509 証明書) もっとも一般的な証明書標準。X.509 証明書は、公開鍵および関連するアイデンティティ情報を持ち、認証局 (CA) によってデジタル署名されたドキュメントです。

X Window System (X ウィンドウシステム) 一般的な UNIX ウィンドウシステムで、ワークステーションまたは端末が複数セッションを同時に制御できるようにします。

索引

あ

- アクティブセッションの詳細、CLI コマンドターゲット, 150
- アラート規則の構成、CLI コマンドターゲット, 151
- 以前の Oracle ILOM バージョンとの互換性、CLI コマンドターゲット, 35
- 一般的なアクションの開始, 39
- イベント通知しきい値, 74
- イベントログ, 54
- エラーと障害の管理, 14
- エラーログ, 120

か

概要

- Oracle Enterprise Ops Center, 17
- Oracle ILOM, 13
- Oracle ILOM 構成のバックアップ、復元とリセット, 88
- Oracle ILOM サービススナップショットユーティリティ, 105
- x86 および SPARC の診断ツール, 88
- 障害のクリア, 112
- 障害マネージャー, 111
- 電力履歴グラフおよびメトリック, 85
- ハードウェア障害通知, 112
- ファームウェアの更新, 88

監査ログ, 54

管理

- システム管理構成アクション, 70
- 保守アクション, 48, 51
- ホスト管理構成アクション, 69
- 未解決の問題, 47

管理ツールとの統合, 17

起動

- x86 Oracle System Assistant, 67

- 障害管理シェル, 114

- 許容ピーク, 74

クリア

- 障害, 116

- 未検出のコンポーネントの障害, 118

- ログエントリ (CLI), 57

- ログエントリ (Web), 56

- 健全性状態, 113

- 健全性状態の定義, 45

- 健全性ステータスの状態

- OK, 45

- オフライン, 45

- 使用できない, 45

- 保守要求, 45

更新

- デバイスのファームウェア (Web), 62

- 更新と構成変更, 17

考慮事項

- CMM 電力割り当てコンポーネント, 82

- サーバー SP 電力割り当てコンポーネント, 82

- 電力割り当てモニタリング, 82

コマンド行インタフェース

- cd コマンド, 127

- CLI を使用したシステム管理, 136

- create コマンド, 127

- delete コマンド, 127

- dump コマンド, 127

- exit コマンド, 127

- help コマンド, 127

- load コマンド, 127

- reset コマンド, 127

- set コマンド, 127

- show および help コマンドの使用, 36

- show コマンド, 127

- start コマンド, 127

- stop コマンド, 127

- version コマンド, 127
- 新しい, 14
- 概要, 125
- 機能, 15
- サポートされているコマンドおよびオプション, 126
- 使用, 125
- ターゲットツリー, 180
- 単一または複数コマンドの実行, 131
- ナビゲート, 29
- ログイン, 21
- コンソール、ホストシリアルのリダイレクト、CLI コマンド
- ターゲット, 154
- コンポーネントごとの電力マップ
 - プロパティ, 80
 - プロパティの上限の定義が可能, 80
 - 割り当て電力, 80
- コンポーネントのサービスへの復帰
 - Web, 51
- コンポーネントのステータス、CLI コマンドターゲット, 149
- コンポーネントの電力割り当て
 - CMM の考慮事項, 82
 - サーバー SP の考慮事項, 82
- コンポーネントの取り外し
 - CLI, 51
 - Web, 51

- さ**
- サードパーティ管理ツール, 17
- サーバー SP
 - 電力割り当ての考慮事項, 82
- サービスプロセッサのリセット、CLI コマンドターゲット, 152
- サービスプロセッサのリモート制御, 17
- サービスプロセッサ (SP)
 - 収集および診断, 106
- サービスへの復帰
 - CLI, 51
- 再起動ポリシー、CLI コマンドターゲット, 152
- サポート
 - CMM ブレードサーバー, 29
- サポートされている
 - Oracle ILOM の特長と機能, 14
 - 管理ツール, 17
- サポートされる
 - IP アドレス, 19
 - MIB, 15
 - 管理インタフェース, 15
 - サポートされる MIB, 15
 - システムアラート, 14
 - システム情報
 - ナビゲーションオプション, 24
 - システム電力仕様
 - 許容ピーク, 78
 - 冗長電力, 78
 - ターゲットの制限, 78
 - 電源装置の最大値, 78
 - 取り付けられているハードウェアの最小値, 78
 - プロパティ, 78
 - 割り当て電力, 78
 - システムのステータス、CLI コマンドターゲット, 149
 - システムの電源制御とモニタリング, 14
 - システムのリセット、CLI コマンドターゲット, 152
 - システムポリシー、CLI コマンドターゲット, 142, 143
 - 実行
 - ブート時の SPARC 診断 (Web), 98, 99, 101, 102
 - ブート時の x86 診断 (CLI), 94, 96
 - ブート時の x86 診断 (Web), 91, 93
 - 実際の電力, 74
 - シャードコンポーネントプロパティ、割り当て電力, 81
 - シャーシビュー, 24
 - 収集
 - システム情報, 39
 - 情報とステータス, 39
 - 出力電力, 73
 - 取得
 - ネットワークアドレス, 19
 - 障害
 - クリア, 112
 - 健全性状態, 113
 - 修正, 112
 - 修復または交換のクリア, 116
 - 障害管理シェルによる管理, 111
 - 障害管理ログファイルの表示, 120
 - 障害のあるコンポーネントの表示, 116
 - 障害マネージャー, 111
 - 診断エンジン, 113
 - 定義, 113
 - ハードウェア通知, 112
 - 保護, 111

- 未検出のコンポーネントのクリア, 118
 - 用語, 113
 - 予防自己修復, 113
 - 障害管理シェル, 113
 - 起動, 114
 - 起動、停止、およびロギングセッション, 114
 - コマンド, 121
 - 障害管理シェルを使用した診断、CLI コマンドターゲット, 156
 - 障害管理統計レポート, 123
 - 障害管理、CLI コマンドターゲット, 156
 - 使用開始, 19
 - 障害状態, 47
 - 障害マネージャー, 111
 - 障害ログ, 120
 - 冗長電力, 78
 - 消費電力, 73
 - CMM, 73
 - 許容ピーク, 74
 - 実際の電源, 74
 - ターゲットの制限, 74
 - 通知しきい値, 74
 - 表示, 71
 - ブレードサーバー, 73
 - ラックマウントサーバー, 73
 - 消費電力アラートの構成、CLI コマンドターゲット, 151
 - 消費電力プロパティ, 72
 - 初期構成, 14
 - シリアルポート、CLI コマンドターゲット, 137
 - シングルサインオン、CLI コマンドターゲット, 139
 - 診断
 - CLI を使用した SPARC システム, 98, 101
 - SPARC システムの, 98, 101
 - Web インタフェースを使用した SPARC システム, 98, 101
 - 概要, 88
 - ツール, 88
 - ブート時に SPARC に対して実行 (Web), 98, 99, 101, 102
 - ブート時に x86 に対して実行 (CLI), 94, 96
 - ブート時に x86 に対して実行 (Web), 91, 93
 - 診断、スナップショットユーティリティの使用, 106
 - 診断ツールの実行, 89
 - 診断用ツール, 88
 - 診断、CLI コマンドターゲット, 155
 - ストレージゾーン作成 (シャーシ)、CLI コマンドターゲット, 158
 - スナップショット
 - Oracle ILOM SP 状態の (CLI), 107
 - Oracle ILOM SP 状態の (Web), 106
 - ユーティリティ, 105
 - スナップショットの取得 (CLI), 107
 - スナップショットの取得 (Web), 106
 - スナップショットユーティリティ, 使用 (Web), 106, 107
 - スナップショットユーティリティを使用したトラブルシューティング, 106
 - 専用サービスプロセッサ, 14
 - ゾーン作成 (シャーシ)、CLI コマンドターゲット, 158
- た**
- ターゲット名前空間, 30
 - ターゲットの制限, 74
 - 帯域外管理, 13
 - ダウンロード可能なファームウェア更新, 14
 - 通知
 - ハードウェア障害の, 112
 - 通知しきい値, 74
 - 電源装置の最大値, 78
 - 電源投入/切断、CLI コマンドターゲット, 152
 - 電力使用統計情報の分析, 83
 - 電力統計情報
 - 移動平均グラフおよびメトリック, 83
 - 概要, 83, 83
 - グラフおよびメトリックの表示, 84
 - 分析, 83
 - 電力モニタリングの考慮事項, 74
 - 電力履歴
 - 概要, 85, 85
 - グラフおよびメトリックについて, 85
 - グラフおよびメトリックの表示, 85
 - 電力履歴グラフおよびメトリック, 85
 - 電力割り当て計画, 75
 - 表示, 75
 - 電力割り当てのモニタリング, 75
 - 電力割り当てモニタリングの考慮事項, 82
 - 特長と機能, 14
 - ドメインブートデバイス、CLI コマンドターゲット, 152
 - トラブルシューティング
 - Oracle ILOM 管理対象デバイス, 87

ネットワーク接続の問題, 87
取り付けられているハードウェアの最小値, 78
取り外す準備
NEM をサービスに (CMM CLI), 50
NEM をサービスに (Web), 49

な

入力電力, 73
ネットワークアドレス
CMM, 19
サーバー SP, 19
ネットワーク接続の問題, 87
ネットワークポート、CLI コマンドターゲット, 137
ネットワーク要件, 19

は

ハードウェア障害
修正アクション, 112
通知, 112
ハードウェアと FRU インベントリ, 14
表示
健全性ステータス (Web), 40
サブコンポーネントレベルの情報 (CLI), 43
サブコンポーネントレベルの情報 (Web), 41
システムレベルの情報 (Web), 40
障害管理統計レポート, 123
障害管理ログファイル, 120
障害のあるアクティブなコンポーネント, 116
消費電力, 71
消費電力プロパティ, 72
デバイスの電源状態 (Web), 60
デバイスのロケータ状態 (Web), 61
電力統計グラフおよびメトリック, 84
電力履歴グラフおよびメトリック, 85
電力割り当て計画, 75
未解決の問題, 47
ログエントリ (Web), 56
ファームウェア
更新, 17
デバイスに対する更新 (Web), 62
ファームウェアの更新、CLI コマンドターゲット, 145
ファームウェアバージョン、CLI コマンドターゲット, 145
ブートデバイスの選択、CLI コマンドターゲット, 152
復帰させる準備

NEM をサービスに (CMM CLI), 50
NEM をサービスに (Web), 49
物理ネットワーク管理接続, 19
ブレードスロット電力のサマリー
許可可能電力, 80
満たされていない許可リクエスト, 80
ブレード電力許可
許可制限, 81
許可電力, 81
必要な電力, 81
変更
デバイスの電源状態 (Web), 60
デバイスのロケータ状態 (Web), 61
保守アクション
NEM のプロパティ, 49
管理, 48, 51
保守の概要, 88
ホストおよびシステムの管理, 69

ま

マスク不可能割り込み (NMI)
CLI を使用して生成, 97
概要, 97
未解決の問題, 47
管理, 47
表示, 47
用語, 47
メモリー Web ページ, 24

や

ユーザーアカウント
構成, 14
ユーザーアカウント、CLI コマンドターゲット, 141
ユーザーセッションタイムアウト、CLI コマンドターゲット,
139
ユーザー認証、CLI コマンドターゲット, 141
用語
障害管理, 113
予防自己修復, 113

ら

リアルタイム電力監視
手順, 71

- リアルタイム電力モニタリング, 73
- リモートアクセス, 14
- リモートハードウェアモニタリング, 14
- レガシーサーバー, 29
- レガシー CLI ターゲット、非表示の解除, 35
- ログ
 - syslog, 54
 - イベント, 54
 - エラー, 120
 - エントリ, 54
 - 監査, 54
 - 障害, 120
 - 説明, 54
 - タイムスタンプ, 56
- ログイン
 - CLI, 21
 - ネットワーク要件, 19
- ログエントリ
 - イベント ID, 54
 - クラス, 54
 - 重要度, 54
 - タイプ, 54
 - 日付と時間, 54
 - 表示およびクリア (CLI), 57
 - 表示およびクリア (Web), 56, 57, 57
 - フィルタリング, 58
- ログ、CLI コマンドターゲット, 150

- B**
- BIOS 構成 (保存、復元、リセット)、CLI コマンドターゲット, 148
- BIOS バージョン、CLI コマンドターゲット, 145

- C**
- /CH レガシーターゲット、CLI コマンドターゲット, 160
- CLI
 - ターゲット名前空間, 30
 - ログイン, 21
- CLI コマンド
 - 確認が必要なコマンドの実行, 132
 - 個別に実行, 131
- CLI コマンドターゲット
 - /SYS、/STORAGE、/CH の表示, 160
 - BIOS 構成の保存、復元、リセット, 148
 - BIOS バージョンの表示, 145
 - http/https アクセス, 139
 - ILOM 構成の保存、復元、リセット, 147
 - KVMS 構成, 153
 - NEM の保守アクション, 157
 - Oracle ILOM アクセスの構成, 139
 - SMTP サーバー構成, 151
 - SPARC 診断構成, 155
 - SSH アクセス, 139
 - syslog 構成, 150
 - USB 内部ポート構成, 137
 - x86 診断構成, 155
 - アクティブセッションの詳細の表示, 150
 - アラート規則, 151
 - 以前の Oracle ILOM バージョンとの下位互換性, 35
 - サービスプロセッサのリセット, 152
 - 再起動ポリシーの設定, 152
 - システムおよびコンポーネントのステータスの表示, 149
 - システムのリセット, 152
 - システムポリシー構成, 142, 143
 - シャーストレージ SAS ゾーン作成, 158
 - 障害管理シェル, 156
 - 消費電力のアラート規則, 151
 - シリアルポート構成, 137
 - シングルサインオン, 139
 - セッションの表示, 139
 - ゾーン作成パスワード, 158
 - ターゲットおよびプロパティの表示, 36
 - ターゲット名前空間の概要, 30
 - ターゲット名前空間のナビゲート, 29
 - ターゲットプロパティおよびコマンドの一覧表示, 36
 - デフォルトの Oracle ILOM 3.2.x ターゲット, 32
 - 電源投入/切断, 152
 - ドメインブートデバイス, 152
 - ネットワークポート構成, 137
 - ファームウェアの更新, 145
 - ファームウェアバージョンの表示, 145
 - ブートデバイスの選択, 152
 - 物理的プレゼンスの設定, 147
 - ユーザーアカウント, 141
 - リモートサーバーを使用したユーザー認証, 141
 - リモートシリアルコンソール構成, 154
 - レガシーターゲット, 160

レガシーターゲットの非表示の解除, 35
ログの管理, 150
CLI コマンドのターゲット
ターゲットへのタスクのマッピング, 136
CLI ターゲットタイプ
/CH, 30
/CMM, 30
/HOST, 30
/Servers, 30
/SP, 30
/SYS, 30, 30, 30
/System, 30
CLI ターゲットタイプ /FMM, 30
CMM
電力割り当ての考慮事項, 82
ブレードサーバーサポート, 29
CRU, 113

D

Distributed Management Task Force コマンド行
プロトコル (DMTF CLP), 125

E

ENTITY-MIB, 15
Ethernet ポート, CLI コマンドターゲット, 137

F

fmadm
コマンドの使用法と構文, 117
ユーティリティ, 115
fmstat レポート
プロパティ, 122
例, 122
FRU, 113

I

Intelligent Platform Management Interface
(IPMI)
機能, 15
IP アドレス, 19

K

KVMS 構成, CLI コマンドターゲット, 153

N

NEM
取り外す準備 (CMM CLI), 50
取り外す準備 (Web), 49
保守アクションプロパティ, 49
NEM の保守アクション, CLI コマンドターゲット, 157

O

Oracle Enterprise Ops Center, 17
Oracle ILOM
概要, 13
障害マネージャー, 111
Oracle ILOM サービススナップショットユーティリ
ティ, 105
Oracle ILOM へのインタフェース, 15
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM)
CLI へのログイン, 21
一般的な管理アクションの実行 (Web), 60
インタフェース, 15
概要, 13
構成 (保存、復元、リセット), CLI コマンドターゲット,
147
サービスプロセッサ
組み込みオペレーティングシステム, 13
サポートされるユーザーインタフェース, 13, 15
障害管理シェル, 47
使用開始, 19
特長と機能, 14
ほかの管理ツールとの統合, 17
ログエントリ, 54
ログエントリの管理, 53
ログの説明, 54
ログのタイムスタンプ, 56

S

/STORAGE レガシーターゲット, CLI コマンドターゲッ
ト, 160
/SYS レガシーターゲット, CLI コマンドターゲット, 160
Simple Network Management Protocol
(SNMP)

機能, 15, 15, 15
SMTP サーバー構成, CLI コマンドターゲット, 151
SNMP-FRAMEWORK-MIB, 15
SNMP-MPD-MIB, 15
SNMPv2-MIB, 15
SPARC 診断
 構成 (Web インタフェース), 98, 101
SSH アクセス, CLI コマンドターゲット, 139
SUN-HW-TRAP-MIB, 15
SUN-ILOM-CONTROL-MIB, 15
SUN-ILOM-PET-MIB, 15
SUN-PLATFORM-MIB, 15
Sun xVM Ops Center
 ILOM での使用, 17
Sun 管理対象デバイス, 113
syslog, 54
Syslog 構成, CLI コマンドターゲット, 150

T

TPM 構成, CLI コマンドターゲット, 152

U

USB 内部 Ethernet ポート, CLI コマンドターゲット,
137
UUID, 113

W

Web アクセス, CLI コマンドターゲット, 139
Web インタフェース
 CMM ブレードサーバーのビュー, 29
 新しい, 14
 機能, 15
 サポートされるブラウザ, 16
 ナビゲーションオプション, 24
 ナビゲート, 23
Web ナビゲーションオプション, 24
Web ブラウザ, 16
Web ページ
 BIOS, 24
 CLI, 24
 DNS, 24
 I/O モジュール, 24
 IPMI, 24

KVMS, 24
LDAP/SSL, 24
LDAP, 24
Oracle ILOM 管理, 24
PCI デバイス, 24
RADIUS, 24
SAS ゾーン作成, 24
SMTP クライアント, 24
SNMP, 24
SSH サーバー, 24
SSL 証明書, 24
syslog, 24
web サーバー, 24
 アクティブディレクトリ, 24
 アクティブなセッション, 24
アラート, 24
イベントログ, 24
監査ログ, 24
クロック, 24
コンポーネントのリセット, 24
サマリー, 24
識別情報, 24
システム管理, 24
システム情報, 24
シャーシビュー, 24
冗長性, 24
消費, 24
シリアルポート, 24
診断, 24
ストレージ, 24
スナップショット, 24
制限, 24
設定, 24
タイムゾーン, 24
電源, 24
電源管理, 24
電源制御, 24
統計, 24
ネットワーク, 24, 24
バックアップ/復元, 24
バナーメッセージ, 24
ファームウェア, 24, 24
ブレード, 24
プロセッサ, 24
ホスト管理, 24
ホスト制御, 24

ポリシー, 24
未解決の問題, 24
ユーザーアカウント, 24
リセットデフォルト, 24
リダイレクト, 24
履歴, 24
冷却, 24
割り当て, 24

X

x86 システムの診断
構成 (CLI), 94, 96
x86 システムの PC-Check 診断
構成 (CLI), 94, 96
x86 プロセッサ割り込みの生成, 97